第19巻

SEIJU

成寿

1992

秋季号

横浜

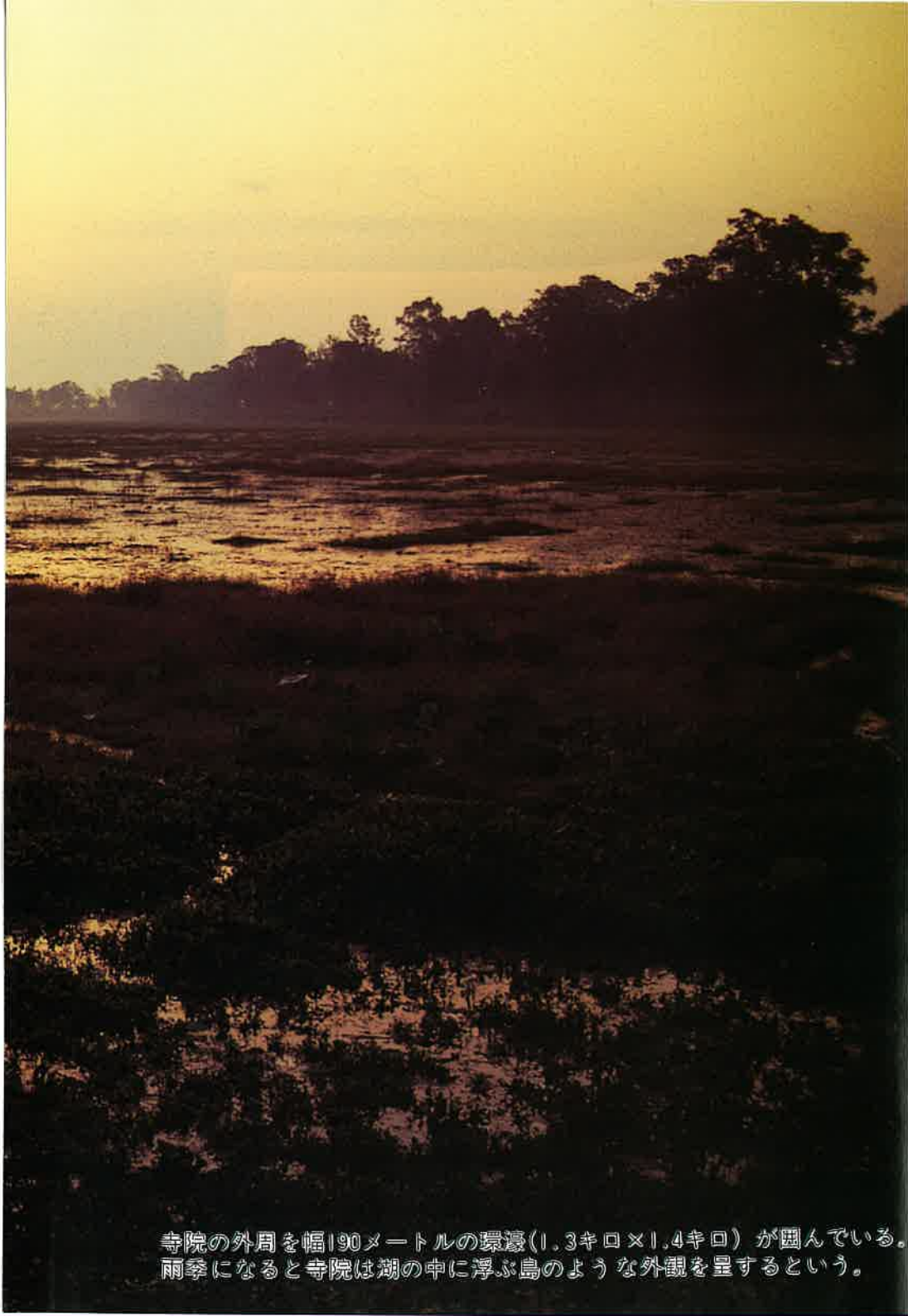
善光寺刊

比丘

手を制え
足を制え
語を制え
すべてを善く制え
内に悦びあり
定に住し
独居にこころ足るもの
彼を　比丘とよぶなり

〈法句経〉

アンコールワット 西参道からのぞみ見る日の出



寺院の外周を幅190メートルの環濠(1.3キロ×1.4キロ)が囲んでいる。
雨季になると寺院は湖の中に浮ぶ島のような外観を呈するという。

すがすがしい西参道の朝のひとと

５基の中で最も高い中央堂塔ヴィシュヌ神が降臨して王と合致するところ。

回廊、ラーマヤーナ物語のレリーフと
その前で昼寝する洗浄作業の女たち。

壁面レリーフ、デバター(女神)

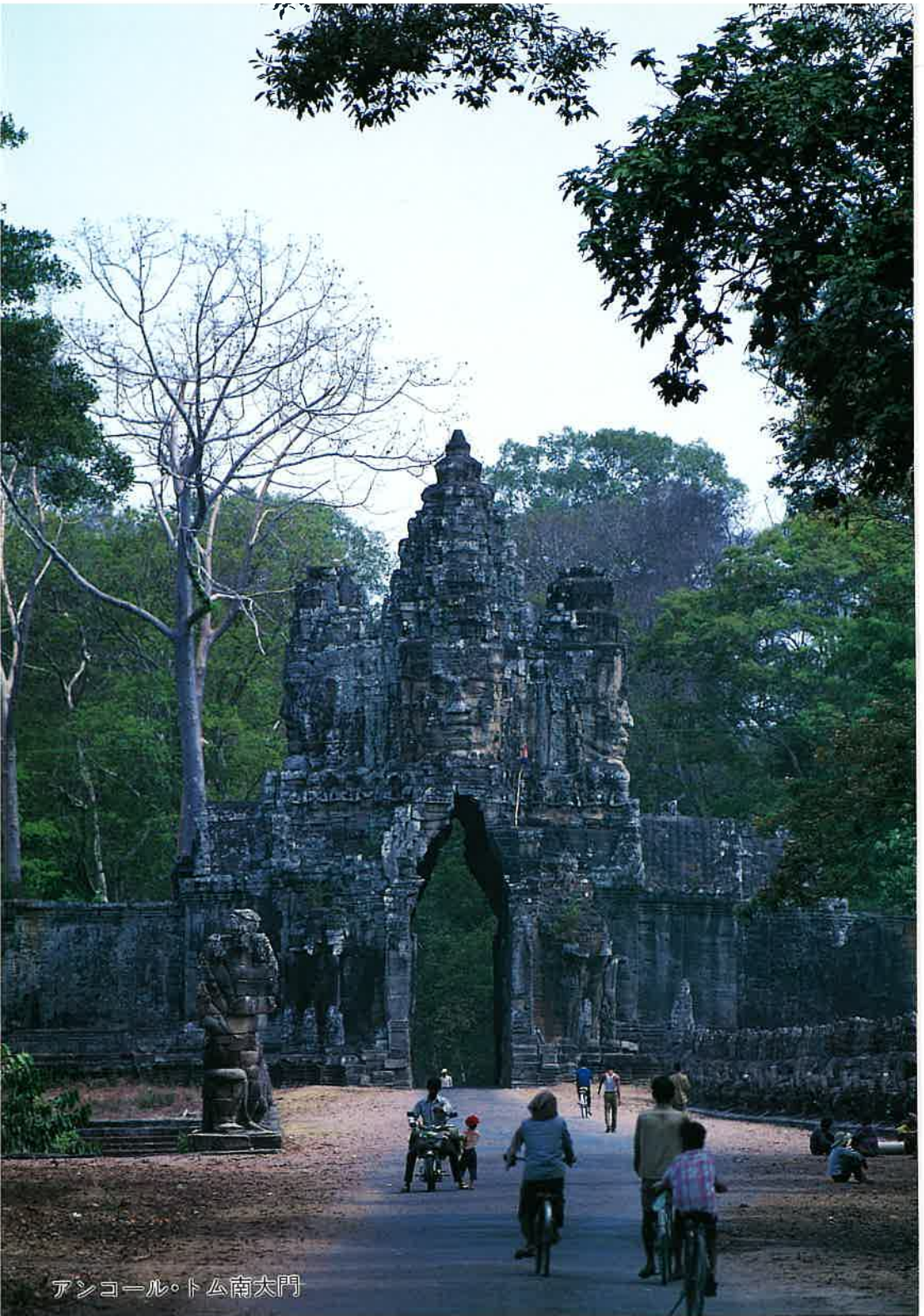
中央本殿最頂部

バイヨン

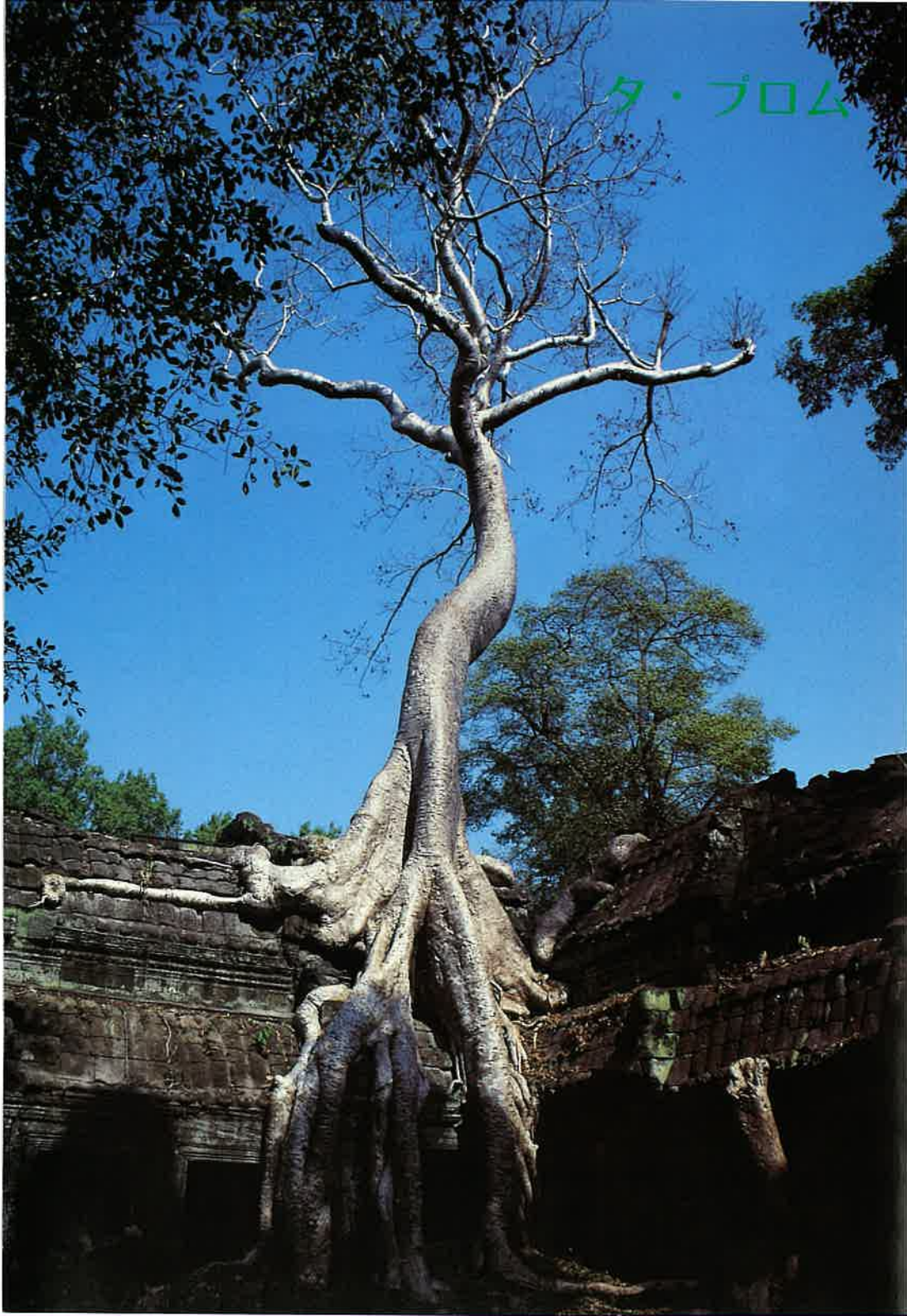
アンコール・トム中央寺院バイヨンのロケシュバラ(観音)の顔をした巨大な仏面。

▲バイヨンの正面

▼レリーフ(産院)



アンコール・トム南大門


タ・プロム

夕映えに浮かぶ本殿尖塔

カラー■アンコール遺跡
巻頭言●悲しみを超えて……黒田武志 18
特集●アンコール・ワット紀行……佐藤俊明 20
●アンコール・ワットは祇園精舎（？）だった……石澤良昭 41
——宇宙観・巨大規模・華麗美術——
●天竺報恩旅行……坂井司 55
カラー■追悼　故黒田嘉さま……落合隆 67
エッセイ●「聖地」・イサーン……水野克彦 92
●泰国行脚日誌……島岩 97
留学記●忘れえぬ人々(1)……高橋堯英 104
●インドの学校事情　その四……清水晶子 115
エッセイ●聖地巡礼——ケダルナート……及川弘美 119
●神話のいきづくヤムナー河畔（その三）……123
●善光寺海外留学僧派遣育英会『論文集』発刊……127
●第八回育英生決定……130
●第八回育英生入選論文……133
渋井修、ペルキ・ローフ（大玄）、韓仁徹、韓京愛、権来順、李焌秀
善光寺だより……162
読者からのお便り……166

題字・さし絵　伊藤三喜庵
グラビア　樋口英夫・五十嵐千彦

悲しみを超えて

四月にカンボジアに行ってまいりました。このごろ毎日の新聞にカンボジアのことが報道されない日とてなく、カンボジアはまさにいま世界注目の国であります。

この国に、善光寺海外派遣留学僧が二年も前から入国して孤軍奮闘しているのです。渋井修という真言宗の坊さんです。

カンボジアはかの悪名高いポル・ポト政権が厳重な鎖国体制のもと、宗教・文化活動を禁圧し、三百万人を虐殺しております。渋井師はその虐殺の現場に足を運び供養を手向けるとともに、今日あることを予測してカンボジアの人たちに日本語教育をおこなっておりますが、ポルポト時代壊滅的な打撃を受けた仏教界がいまようやく復興に立ち上がろうとしておりますので、師の活躍範囲は今後いよいよ増大することでしょう。ことに、カンボジアには世界屈指のアンコール遺跡群があり、いよいよ日本がその修復に乗り出すことになり、その権威者石沢先生が顧問でも

ありますので、善光寺海外留学僧派遣育英会としては可能な限り、日本とカンボジアの仏教の親善友好に尽力したいと思っております。

次に私はこの一月に母をあの世に送りました。人が死別に際して悲しいのは、それが永遠の別れであるばかりでなく、生前、あれもしてやりたかった、これもしてやりたかった、あれもしてやれなかった、これもしてやれなかったという悔恨の情が加わるからだといった人がありましたが、まさにそのとおりだと思います。

目連尊者は神通力を得て、何はさておいてもいまは亡き父母に思いを馳せ、ことに母の「乳哺養育の恩」に報いようと決心され、実行されたのが盂蘭盆の起源であり、私はいま初盆を迎えて感無量なものがあります。

親鸞聖人は、「父母の孝養のためとて一返にても念仏申したること　いまだ候はず」といっております。すべての人を救う念仏を、仏法を、私も父母に対する孝順供養のために私物化せず、世界平和のために微力を捧げる所存ですので、何卒皆様の御支援のほどをお願い申し上げます。

アンコール・ワット紀行

善光寺海外留学僧派遣育英会
常任理事　佐藤俊明

プノンペンまで

バンコクのエメラルド寺院にアンコール・ワットの大きな模型がある。拝観の都度、眺めたり、フイルムにおさめたりして、「一度はいってみたいものだ」と、思いをつのらせていたが、カンボジアが内戦続きでは、と、半ば諦めていた。ところが昨年春ごろから、かすかな光がさし込むようになって来た。

善光寺海外留学僧派遣育英会の顧問、上智大学教授石沢良昭先生は、アジア文化研究所の所長であり、アジアの文化遺産の保存修復指導に当っておられる世界的権威だが、昨春、カンボジア政府との折衝と現地指導のため出かけておられた際、政府招へいの形で、育英会理事長の方丈さんと常任理事の私に、ビザと日程を用意してくださったので、「これは有難い！」と期待に胸をふくらませていたところ、半月ほど前になって、「ホテルが都合つかなくなったので八月

に延期してほしい」との連絡がはいった。八月といえば私のところはお盆の月で忙しいので、惜しいことではあったが結局沙汰止みとなってしまった。

「アンコール・ワットというんだから、そのうち、アンコールがかかるだろう」と思っていたら、案の定、昨年十月パリーの和平会議で合意が成立し、カンボジアにようやく平和が訪れ、観光ビザで簡単にゆけるようになった。

カンボジアは、五月から十月までが雨季、十一月から四月までが乾季で、雨季明けの年末年始のころが旅行の適期なのだが、寺はこの時期は忙しいので、動くとなるとどうしても彼岸明けになる。そこで暑いのは覚悟のうえで四月二日出発と相成った。

バンコクに一泊して翌朝早々プノンペン入りしたが、エアポート・ホテルはこの点乗り継ぎにたいへん便利である。空港ビルから廊下を通ってゆけるので時間のロスがない。フライトは六時だったが、ホテルで朝食を済ませることができた。

飛行機は三十分遅れて離陸し、八時プノンペンのポチェントン空港に着いた。

何しろカンボジアはいま世界の注目を集めている国なので、半年前のミャンマー行きの時とは打って変って飛行機はフォッカー一〇〇の新車ならぬピカピカの新機で、「これは幸先きがいいぞ」と意気込んでいたら、とんだハプニングに見舞われた。というのは積込んだスーツケースが到着しないのである。実は旅行案内には、「このごろ報道関係者の入国が多く、重量器材の積込みが多いので、荷物は一日二日遅れることもあるから、機内持込みだけにしたほうがいい」と書いてあった。高を括ったのがいけなかった。おかげで三日間、着のみ着のままで過ごさねばならなかった。

飛行機から降りて、歩いて待合室に足を運ぶ。気温四十度というのにクーラーもない狭い待合室に大勢の人がごった返し。どこに何の窓口があって、どんな風に入国処理が進められているのか皆目見当もつかず、まことに頼りないことおびただしい。そんな状況の中で、笑顔で迎えてくれた小柄な若い日本女性、夫君とともに旅行社を営む谷川さんのきびきびした活動はまさに一服の清涼剤だった。のんびりかまえているこの国の人々の中にあって、谷川さんが目立つのは当然、あとで聞いた夫君の話では「彼女はテレビでも紹介されました」とのこと。

プノンペンのプノンは山とか丘の意で、ペンは夫人の名で、プノンペンとはペン夫人の丘という意味だとか、何やらロマンチックな感じがしないでもない。その名にふさわしく、フランス人の造ったこの街は、道幅が広く、並木がこんもり茂り、色とりどりの花が綻び、まことに

プノンペン（ホテルから）

王宮（プノンペン）

清楚な感じがする。方丈さんは二十五年前に来たことがあるそうで、そのときは実にきれいだったという。その後二十年にわたる戦乱が街の美観をすっかりこわしたわけだが、それにも美しい街だ。この美しい街の中心部を通ってホテル・カンボジアーナに着く。

このホテルは昨年経営者が代ったばかりとか。戦乱続きでは経営も思うに任せなかったにちがいない。それにしてもいまひと息がんばっておれば、平和が到来し、観光客が押し寄せ、国連の機関が入ってきたものを。前の経営者には気の毒だが、今の経営者はまさに幸運児だ。この新しい経営者のもと、このホテルは平和と繁栄のシンボルのようなもので、このホテルをバックにして写真を撮ることがはやっているとのことで、写真屋がたむろしている。

ホテルの駐車場には、クルマの横っ腹にUNと大書きした白色のジープが数台とまっている。「国連カンボジア暫定行政機構（UNTAC）」か、その傘下での「平和維持軍（PKF）」のクルマであろう。これらをバックにすればたしかに絵になる。

チェック・インして、ウナロム寺に渋井修師を訪ねた。

ウナロム寺は王宮の近くにあり、カンボジア仏教の総本山格の名刹であり、ポル・ポト時代に壊わされなかった代りに、壊された小学校がこの寺の建物を教室として使っており、大勢の子供たちでにぎわっていた。

活躍する日本人僧

渋井修師は昭和六三年、バンコクのワット・パクナムに派遣された第四期留学僧だが、ワット・パクナムの修行を終えてカンボジア各地を遊行し、心に期するところがあり、一旦ワット・パクナムに戻り、三年前よりこの寺に居を移し、

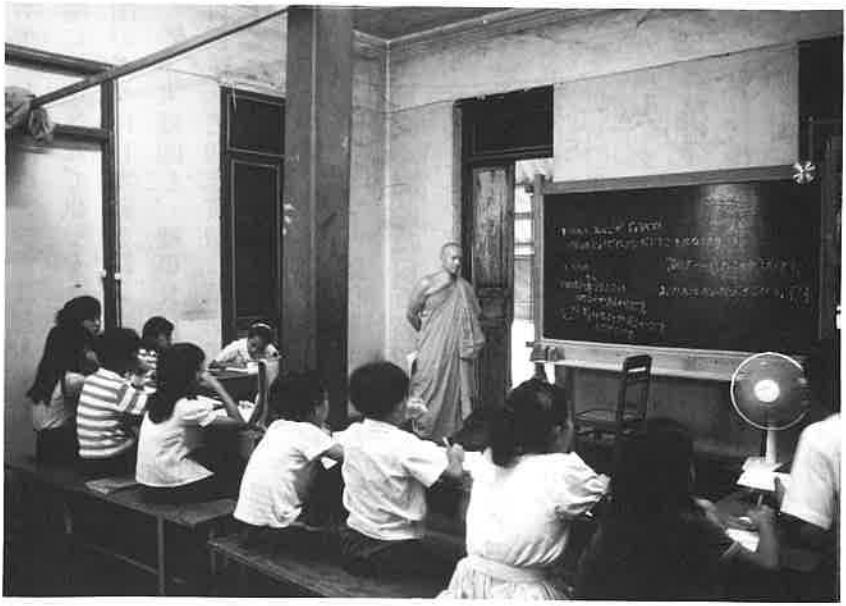
ポルポト時代に虐殺された人々を、その虐殺現場に足を運んで供養を手向けるとともに、この国の人々に日本語を教えているのである。

昨年末帰国し、理事長に一部始終を報告し、再び戻って初志貫徹に精進する旨を誓った。黒田理事長、この奇特の浄行に感銘し、理事会に諮り、彼を第二次派遣生に採用した。渋井師また大いに力を得、所要の準備をととのえ、二月ウナロム寺に戻ったのであった。

長年にわたるフランスの植民地支配から脱却して一九五三年（昭和二八年）カンボジア王国は独立し、過去の栄光を取り戻すかにみえた。ところが七〇年(昭和四五年)、シアヌーク元首が外遊中にクーデターが起きて、ロン・ノル親米反共政府が成立した。しかし五年後には政権が奪われ、代って赤色クメール・ポル・ポト派が政権を掌握した。ポル・ポトは厳重な鎖国体制のもとで、都市廃絶、貨幣廃止、宗教や文化活動の禁圧、公共サービス一切の停止といった異常な政策を強行し、全国民を刑務所同然のサハコー（人民公社）に閉じ込め、知識人や僧侶の過半数を含む男女三百万人、実に国民総人口の三分の一を虐殺している。

市内のどまん中にある、高校の校舎を転用した刑務所に案内してもらったが、虐殺されたおびただしい数の人々の写真、虐殺に使われた用具、虐殺シーンを描いた数枚の絵、子供のしゃれこうべをびっしりならべた壁面など、二〇世紀の今日、果してこのようなことがおこなわれたのかと、われとわが眼を疑うほど、身の毛もよだつ思いだった。

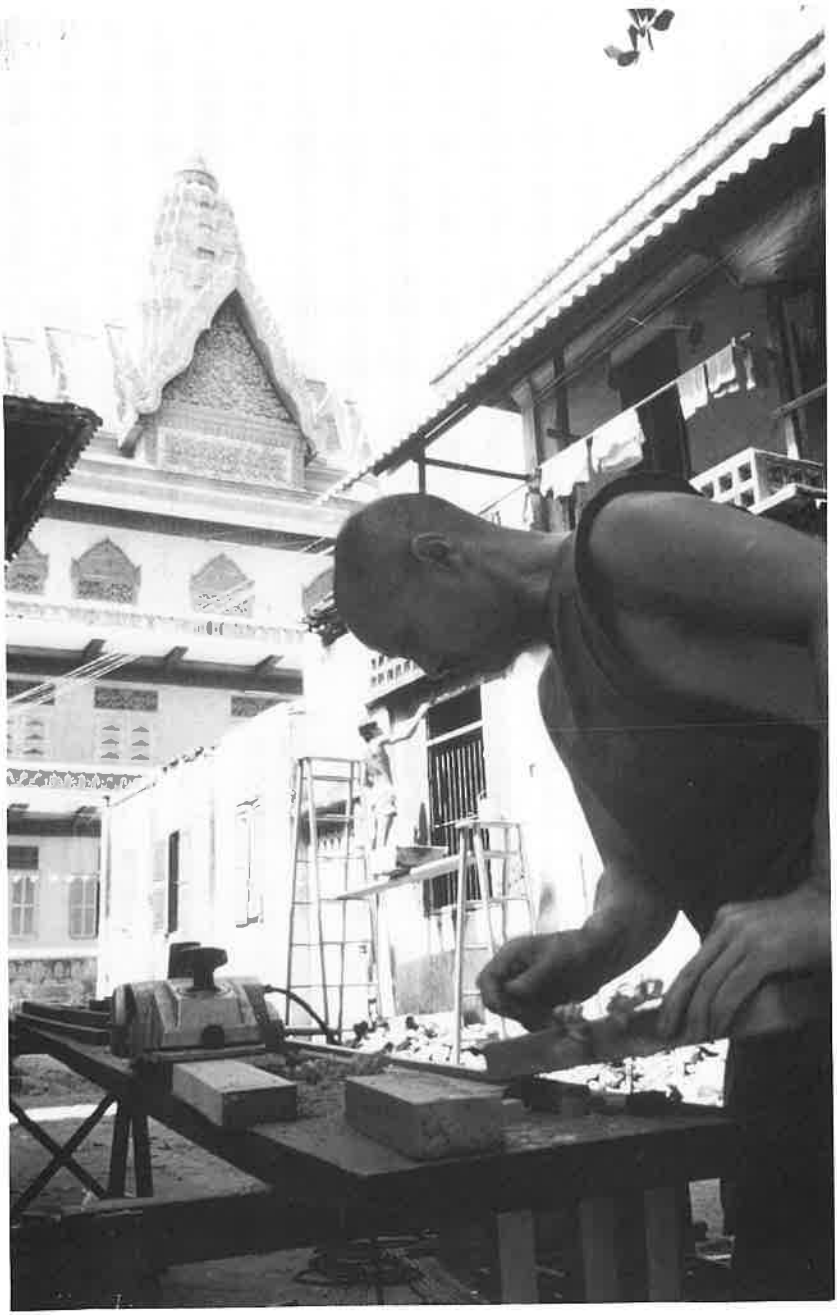
諸処方々でおこなわれた虐殺の現場にはいまなお人骨が山積みになっているという。渋井師はその現場に足を運んで供養しているのだが、いろんな制約があってなかなか思うにまかせず、まだ十カ所ほど廻ったに過ぎないという。



日本語教室

彼はこのはかどらない行脚の間に考えさせられた。「カンボジアの復興のため日本僧として何をなすべきか」と。そこで気付いたことは、この国には日本語の本もなければ、日本語を教える教師もいないということだった。そこで彼は早速日本からカンボジア語、日本語の本を取り寄せ、手づくりで教科書をつくり、それを人数分だけコピーして製本した。日本国内であればさほどのことでもあるまいが、コピー機器はもち論のこと、鉛筆一本の消耗品にいたるまでバンコクに買い出しにゆかねばならなかった。その労力とその経費、これは私たちの想像以上のものである。さいわい彼はタフで労をいとわないし、また、法輪転ずるところ、少額ながらも有志の喜捨もあり、一歩一歩前進を続けている。

彼の居住する庫裡は二階建ての大きな建物なので、教室を開くだけのゆとりはあるが、机、椅子はつくらねばならなかった。さいわい彼は



大工仕事に精出す渋井師

大工仕事も得意なので、現地の大工を督励して何とかつくっていた。訪ねたとき、ベランダで話し合ったのだが、「ここも屋根があれば雨季でも使えるので…」と、目下庇をおろす作業中で、「この乾季中には仕上げなくては！」と張り切っていた。

タイの僧院よりこの国のほうが彼には合っているように思う。タイの仏教はすっかり整っているので自由裁量の範囲が限られている。ところがこの国ではポル・ポト時代、僧侶の多くは虐殺か還俗かさせられ、解放二年後（一九八一年）の全国の僧侶の数は二千人に過ぎなかったという。それが年々増え続けて昨年には二万一千人となった。仏教国としてやらねばならぬ仕事は山積している。まさに彼にとっては打って付けの時であり処である。いまプノンペン仏教研究所の再興を望む声があがっており、これら再興には日本仏教界の強力な援助が望まれているという。そうなるとその面でも彼に大きな期待が寄せられてくるのであろう。渋井師の健闘を期待してやまない。

カンボジアはいま

夕方ホテルに帰ると、ホテルの前の路上に大勢の人々がバイクにまたがって勢揃いしている。ガイドの説明では、どこへゆくあてもない人たちとか。買い立てのバイクで夕涼みというところなのか。

「国連景気といわれて、まずふえたのがバイクですよ」とは渋井師の言。「なるほど」と思った。この国の通貨はリエル。百円が五〇〇リエルだった。二万円両替えしたら一センチほどの札束が渡された。一〇万リエルである。この札束を見て私はふと思い出した。第二次世界大戦末期のころ、私は中国にいたが、その頃日本円一八〇円が中国元千元だった。あるとき中国人

の知人宅を訪れ、雑談の途中、「メモ用紙頂戴」といったら、彼は十元紙幣を出した。「メモ用紙ですよ」というと、彼曰く「これ、紙より安いよ」と。これにはあぜんとしたが、リエルがそんな風にならないことを祈ってやまない。

国連関係者が強いドルを持ち込む。弱いリエルはますます弱くなり、一般国民生活はいよいよ苦しくなる。背に腹はかえられず、役人でさえ、援助物資を横流ししているという。

四月十一日付の「朝日新聞」の「透視鏡」欄に「カンボジアに依存体質・目立たぬ〝自力復興〟への意気」と題する大和修氏の一文が載っていたが、残念ながら私も感を同じうするものである。

いま難民がタイの収容所から続々郷里に送り帰されている。続々とは書いたが、実は日に千人を帰すという予定は空文にひとしく、また一週間だけという仮りの宿に、半月経っても立ち退かぬ者も多いという。

十数年間収容所生活をして生産手段から離れていた彼ら、しかも無数に仕かけられた地雷原のそばで、果して定住できるのであろうか。何割かは職を求めて都市に流れ込むのではないだろうか。その混乱は予想以上に大きいものかと思う。

トンレ・サップ

ホテルのうしろはメコン河、トンレ・サップ河の合流するところである。合流地点を見ればまぎれもなく河だが、下流を望見するとまさに大洋である。雨季には水位が八メートルも上昇するというのだから、それはまた壮大な眺めであろう。さすがは全長四、二〇〇キロ、四カ国を縦断して南シナ海に注ぐ大河である。

インド文明が、インダス、ガンジスの両大河によって育くまれたように、メコンの流れはカ

ンボジア文化の母なる河であることが感取できる。

この国のもっとも栄えたのは九世紀から十四世紀にかけてのクメール王国(アンコール王朝)時代であり、その最盛期の版図はいまよりはるかに大きかった。

アンコール王朝は、いまのカンボジアの北西部、シェムレアップ州とその周辺部に、アンコール・トムその他いくつかの都城を築き、アンコール・ワットはじめ大小約千三百の石造建築を残した。それらは、建築面でも美術面でも、遺跡の中で群を抜いており、世界の注目を浴びていることは周知の事である。

プノンペンから飛行機でトンレ・サップ河の流れを上流に辿って飛ぶと、トンレ・サップ湖が見えてくる。まるで海のような大きな湖だが、雨季には、水嵩を増したトンレ・サップ河が逆流して湖に注ぎ込み、湖は三倍以上の大きさ、

メコン河とトンレ・サップ河の合流地点（ホテルの窓から）

一万平方キロにもなるという。そのため湖の周囲の森林地帯は毎年雨季になると水びたしになり、乾季になると肥沃な土壌を残して水は去ってゆくので、冠水林は絶好の天然養魚場になるという。農業もまた然り、あくせく働らかなくても、タネを蒔きさえすれば、肥料なしで作物はとれる。果樹は年々たわわに実をつけてくれる。この恵まれた自然環境がアンコールの建造物を生み出す経済的基盤だったのではなかろうか。

このトンレ・サップ湖の北西部にシエムレアップ市があり、ここの空港まで一時間弱のフライトである。双発のプロペラ機が、日曜は二便、週日は一便往復している。

飛行機といえば座席指定がきまりのようなものだが、ここにはそれがなく、定員オーバーで飛んでいる。コック・ピットと客室の間の広場や尾翼前の荷物室に藤椅子が置いてあるからこれは常習のことのようだ。

シエムレアップの空港に降り立ったとき、いまの日本ではどんな片田舎に行っても、こんなに静かな、のどかな風景に接することはできないであろうと思った。草や樹は美しい花を咲かせ、平和そのものの感じだった。

しかし、ホテルに着くと、UNのジープ数台にまじって奇妙な形のクルマが目に入った。聞けば地雷処理のクルマだということで、少々の地雷にはびくともしない鋼鉄のかたまりのようなクルマで、その重量を支えるに足る橋梁がないので、行動は相当制約されているということだが、これは周囲ののどかな風景とは全くちぐはぐな感じのもので、アンコールの遺跡を取りまく状況のきびしさを見せつけられたような気がした。

アンコール・ワット

シルムレアップのホテルからクルマで二十分も走ると、アンコール・ワットの正面に続く表（西）参道に達する。

アンコール・ワットとは、クメール語で「寺院のある町」という意味だという。

アンコール・ワットを紹介した文献は数多くあるが、石沢良昭先生の『甦える文化遺産　アンコール・ワット』（日本テレビ発行）によって述べることとする。以下、括弧内はこの本の引用文である。

「幅一九〇メートルもの広大な環濠で囲まれた寺院は、湖の中に浮ぶ島のような外観を呈していた」

とあるが、残念ながら私の見た限りの写真集には、水をたたえた環濠の写真が見当らなかった。それだけに水のある環濠はどんなに美しいだろうと想像を逞しうしていたのだが、プノンペンのホテル・カンボジアーナのロビーに、アンコールワットの建物をバックにした環濠で大勢の女性が水浴している姿を描いた大きな額が掲げてあったのを見て、〝ああ、なるほど〟と合点がいった。

カンボジア人は非常にきれい好きで日に二回水浴するという。そして水浴場は社交の場でもあり、夕日の沈むころ、一日の仕事を終えて水浴場に集まり、水中に入って体を洗い、一日の出来事をたのしそうに語り合うというが、まさにその雰囲気が感じられる絵である。

「アンコール・ワットを見た者は、それが途方もなく大きな規模であることに驚き、整然たるプランをもつ非常に調和のとれた建物であることに感動を覚えずにいられない。寺院の外周を幅広い環濠（1.3*。×1.4*。）で囲まれ、周壁で区切られた境内には、さらに盛土によっ

て高くなった基礎上に土台石を敷設し、その上に三重の回廊を造り、中央部に本殿が築かれた。中心に近づくほど高くなり、つまりは天界に近づくよう考えられた建築構造である。

参道は四方にまっすぐにのびていた。東参道は土塁が、南北には参道跡が残っているだけだが、西参道は石畳で舗装され、両側にナーガ（大蛇）の欄干が設けられている。西参道入口から中央神殿まで七〇〇メートル、大人の足でさえゆうに三〇分はかかる。西参道をはさんでそれぞれ一対づつの聖池と経蔵がある」

気温四十度のカンカン照りの中を、道幅一二メートルの石の参道を歩くのはらくではなかったが、ふと気がつくと、第一回廊の屋根が白く変色して調和をくずしている。聞けば八六年（昭和六一年）からのインド作業班の薬物による洗浄で変色したものだという。

一九八六年（昭和六一年）より、カンボジア・インド両国政府間協定にもとずき、翌八七年より、インドが遺跡の保存修復作業を実施しているが、これにはいくつかの問題点が指摘されている。「例えば遺跡の主な用材となっている、砂岩は損壊しやすく、その取り扱い方の問題、原石材保護を念頭においた作業方法の再検討、滞水の雨水に対する排水の方法、薬剤クリーニングの方法と効果、作業の熟練度と薬剤使用に当って健康管理など基本的な技術上の問題を含めて、今後さらに充分な検討をしていく必要性がある。

また、これまでのフランス極東学院が実施してきた修復保守作業資料を、インド専門家チームがまったく参照していない点は憂慮すべきこである。」

まことに惜しいことをしたものだと思いながら歩いていると、五メートル高くなっているテラスに達した。さらに数段登ると第一回廊とな

る。この回廊（二百㍍×百八十㍍）の内壁には叙事詩や歴史をテーマにした壮大な絵物語のレリーフがある。この第一回廊を過ぎると次は十字中回廊に入る。この一角にプリヤ・ポアン（千本仏）が安置してある。ポル・ポトに破壊された仏像の姿は痛々しい。

この寺は、一二世紀の前半、スールヤヴァルマン二世によって建立されたヒンズー系の墳墓寺院なのだが一五世紀にアンコールの都城が放棄されたのちは上座部仏教の寺院となって今日に及んでいる。仏像があるのはそのためである。

さて、この千体仏の安置してある近くの柱に墨で書かれた日本人の筆跡がある。長い年月を経て判読しがたくなっているものをポル・ポト派がさらに横なぐりに消しているが、朱印船貿易の盛んだった一七世紀に日本人がこの寺に参詣しており、十四カ所に墨書の跡が見つかっているという。例えば、森本右近太夫一房（加藤

レリーフ・女神（アンコール・ワット）

清正の旧臣の子供）は、寛永九年（一六三二年）に父の菩提を弔うために四体の仏像を奉納したと記しており、彼らはここをインドの祇園精舎だと誤解していたらしい。当時日本で作出された祇園精舎の絵図面にはアンコール・ワットが描かれている。

十字中回廊を経て、また数段登ると第二回廊（百㍍×百十五㍍）である。ここには華麗な女神たちの群舞が浮き彫りされている。

このあたりに来たとき、十二時少々前だった。インドの作業班に傭われたのであろうこの地方の女性たちは、石畳の上に横たわって昼寝している。これは現前に見る華麗なる女身たちの群舞の休憩の姿。

第二回廊の中庭を抜けると眼前に急傾斜の階段が迫り、荘厳な五基の堂塔をいただく第三回廊へと登ってゆく。

「アンコール・ワットの中心は、整然と五点形「∴」に配置された五基の堂塔である。ひときわ高い中央堂塔とそれを囲む四基の堂塔は第三回廊によって各々が結ばれており、参詣者たちは第二回廊の内庭から、高さ一三メートルの急な階段を登って第三回廊へと達する。

この五基の堂塔こそ、宇宙世界の中心を模したものであった。スールヤヴァルマン二世は王権を神格化し、その独特の宇宙観を具現するために、アンコール・ワットを建立したといわれる。中央の堂塔は、まさに世界の中心山である、神々が棲むメール山（須弥山）を象徴し、周壁は雄大なヒマラヤ連峰を、環濠は無限の大洋をそれぞれ意味していた。

五基の中でもっとも高い六五メートルの中央堂塔はいつもヴィシュヌ神が降臨し、王と神が合致する場所と考えられ、特別な神像の祭式が執り行われていた」

階段は急で、一部がセメントで補修されてお

最頂部にあるブッダ像（アンコール・ワット）

り、鉄製の階段もあったが、私にはもう登る余力がなかったので石畳に腰をおろして、華麗なる女性たちの昼寝姿を拝んでいた。

以上でアンコール・ワットのおおよその姿が頭に描かれたことかと思う。

このアンコール・ワットは前出のスールヤヴァルマン二世が、一一一三年に王位につくとすぐ建設に着手し、三十年の歳月をかけて完成したものであり、ヴィシュヌ神に捧げる祠であると同時に王自身の墳墓として建立したものといわれる。

アンコールの他の遺跡がほとんど東向きなのにこの寺だけが西向きなのはそのためといわれる。

アンコール・トム

日本では、アンコール遺跡即アンコール・ワットであるかのような印象を受けるほどアンコール・ワットだけが有名で、その他は陰に隠れてしまっているのだが、アンコール・ワットの表参道の前の道を左折して北に一キロ半ほど進むとアンコール・トムの南大門につく。

アンコールとは都、都市のことで、これはナガラからきているという。ナガラは町ということで、お釈迦さま入寂の地はクシナガラ、このナガラがナコールになまり、アンコールになったという。トムは「大きい」という意味なので、アンコール・トムは大都城のことで、クメール王国最大の王ジャヤバルマン七世が、十二世紀末から十三世紀初頭にかけて造営した大都城である。

「都城建設プランは一一七七年のチャンバ軍来襲の事件の教訓から、王都を出来るだけ要塞化しようと考えていたようであり、それ故に「輝ける王都」アンコール・トムに高い城壁が構築されたのである。それは大きな環濠とあわせる

南大門（アンコール・トム）

と二重の堅固な防御壁となり、一辺が三キロメートルの正方形を形づくり、巨大な五つの大城門がその城壁の出入口となっている。その都城の中央部には、山岳型寺院バイヨンが建立され、仏陀を頂点に国内のあらゆる神々が合祀されている」

アンコール・トムは、人口二〇万人を数え、華僑はじめ多くの民族が居住した国際都市で、バイヨンをはじめとし、パプーオン神殿、古王宮とその付属寺院ピミヤナカ、象のテラス、癩王のテラスなどの有名な遺跡がある。

中でもバイヨンはアンコール・トムの中心、すなわち東西南北の各大門から一・五キロ半の処に位置する寺院で、岩石を山のように築きあげた壮大なものである。

仏教の篤信者であった大王は、もっとも深く信仰した観世音菩薩、ロケシュヴァラに自分の顔をミックスさせたのではないかといわれる巨

バイヨン（アンコール・トム）

大な四面像をそびえ立つ多くの塔に刻み込んでいる。観世音菩薩の面は全部で一九六面あり、また中心塔の高さは四五メートルに達するという。

九世紀から繁栄の道を歩んだクメール王朝は、ジヤヤバルマン七世を最後に衰退を余儀なくされ、隣国シャム（タイ）の侵攻などで遂に都城を放棄し、バサン（カンボジア中部）へ、そしてプノンペンへの遷都となり、旧領土の大部分は隣国のシャムとベトナムに奪われるに至った。

こうしてアンコールの遺跡は密林の奥深くに忘れ去られるのである。

緊急修復を期待する

カンボジアを保護国としていたフランスはアンコール遺跡保存事務所を創設し、遺跡の保存、管理、修復、調査研究などの仕事を展開して来た。そしてカンボジア独立後はユネスコがその業務を引継いで来たが、七〇年来の内戦により、すべては中断された。

八六年（昭和六二年）より、おこなわれた、インド遺跡保存修復作業については前述のとおりである。

さいわい日本政府は今春、アンコール・ワット修復作戦を本格的に支援することとなり、緊急措置として新たに百万ドルをユネスコの基金を通じて拠出することを表明し、さらにアンコール・ワット修復のための国際会議を九月に東京でおこなうことを準備しているという。

人類共通の文化遺産と高く評価されているアンコール遺跡群が緊急の修復措置により一日も早く甦ることを念するとともに石沢先生はじめ日本スタッフのご健闘を祈念してペンを擱く。

アンコール・ワットは祇園精舎(?)だった

―宇宙観・巨大建築・華麗美術―

上智大学アジア文化研究所
石澤良昭

一、アンコール遺跡はどこにありますか

アンコール遺跡は現在のカンボジアの北西部シエムリアップ州に在り、トンレサップ湖西北岸一帯（別名アンコール地方）にある石造・レンガ造りの遺跡群を指す。それらはアンコール朝（八〇二―一四三一）の最盛期（十二―十三世紀前半）に建造された石造りの寺院・祠堂・貯水池・橋梁・宗教都城などである。そこはプノンペンから三一三キロのところに在り、特にシエムリアップ市郊外には有名なアンコール・ワット、アンコール・トムなど主要な六二遺跡がある。その特色は規模の壮大さ、巨大建築、華麗美術などで知られた東南アジア最大の文化遺産である。これらの文化遺産は当時の社会が創りだした構築物であり、その時代精神を凝集していて、この遺跡研究を通じて往時の領域、政治・社会・宗教・技術・生活状況・宇宙観などが判明してくる。それは王朝の盛衰が遺構の増減と一致しており、繁栄した長期にわたる統

治は大遺跡の建立を可能にしている。

アンコール朝は神格化された王権を背景に富国強兵政策を掲げ、十二世紀から十三世紀初めにかけての最盛期には、その領域は現在のラオスのビエンチャンからタイ中部のスコータイまでの地域まで、西がチャオプラヤー川下流域、南がマレー半島北部まで、東がベトナム南部に及ぶ大版図であった。都城付近には約十五万の人々が住んでいたといわれ、一種の水利灌漑を基盤とした農村社会であった。水利網と大貯水池の建設は雨期の排水と、乾期の用水を円滑に行うための装置であった。

二、前アンコール時代は地方の時代

カンボジア史の時代区分ではアンコール時代に先立つ時代を「前アンコール時代（三世紀ごろ～九世紀初め）と呼んでいる。日本でいうと古墳時代から奈良時代にかけての時期にあたる。前アンコール時代をさらに前半を扶南期、後半を真臘期にわけている。その前アンコール時代以前の時代には、メコン川デルタのカンボジア南部ではインド文化（稲作・儀礼・王権の考え方・武器・美術など）が受容され、自成的な土着社会が形成され、それがやがて扶南国として拡大していった。その外港オケオ遺跡からは、インド・西方世界からの渡来品（ローマ貨幣型コイン・仏像・ヒンドゥー神像・刻印入り護符など）および中国からの古い鏡などが出土している。六世紀後半のカンボジア南部のプノンダ遺跡からは大型のヒンドゥー教神像・仏像が発見されている。クメール真臘はもともとラオス南部チャンバサック地方に興ったらしく、数世紀かかってカンボジア中部の大平野部へ南下してきた。七世紀初めカンボジア中部のコンポントム地方ではイーシャナプラ（「伊奢那城」＝『新唐書』）にイーシャナヴァルマン（六一六

年登位）と名乗る王が統治していた。当時カンボジア各地には中小の地方拠点があり、小王が治めていたようである。メコン川のクラチェ地方ではサンボール遺趾が見つかっているが、そこにも地方の小王がいたようである。

三、遺跡はみんな宗教建造物

アンコール遺跡はそのほとんどが宗教建造物である。寺院の建築様式から、基本的に二類型に分類される。基壇上に列状に配列された平面展開祠堂形式と、アンコール・ワットのような高塔堂をピラミッド状に積みあげた山岳寺院形式の二種類がある。前者は主として王の親者の墓を兼ねたもので、祖先を祀るのでこれを「祖寺」と呼び、後者は世界の中心寺院を表わす宇宙観に基づいているので「山寺」と呼んでいる。このピラミッド型山岳寺院は王権の神格化を演出するための道具であり、当時の人々が考えている宇宙世界を地上に具現する目的で建設された。例えば、アンコール・トムには都城の中心にそびえ立つ高さ四五メートルのバイヨン寺院があり、そこは神々や仏が降臨する須弥山（メール山）を象徴したものであった。そこからは世界へ通じる東西南北に向けた基幹道路が走り、境内には天界と同じように諸寺院・僧院・王宮などが整然と配置されていた。その高い城壁・周壁はヒマラヤの霊峰に見立てられ、環濠は深い大洋を象徴していた。アンコール・トム都城は最初から外敵を防衛するために濠や城壁をつくったのではなかった。この宗教都城に必要な大道具は中心寺院・濠・貯水池・基軸道路・王宮・諸寺院であった。これら寺院の中央祠堂内では王と神が合体した特別な神(仏)像（神王＝デヴァーラージャ）が安置され、礼拝されていたという。

建築資材はアンコール時代初期にレンガと紅

土に砂岩を部分的に併用していた。十世紀頃から紅土と砂岩が主要建材となったが、浮彫りに漆喰を用いていた。しかしその扉や門は、まだ木造であった。砂岩を化粧石として使い、壁面にあの華麗な浮き彫り絵図や図像を彫り刻んでいた。十一世紀初めに建築技術の飛躍があり、ピラミッド型の高塔大型寺院が技術的に可能となり、そうした技術の改良がアンコール・ワットを十二世紀前半に実現させた。

四、アンコール朝は建寺王朝であった

アンコール朝の初代王ジャヤヴァルマン二世（八〇二―八三四？）は各地を征服し、プノンクレーン丘陵（シエムリアップ市内から約四〇キロ）において王朝創始の諸儀式を執り行ったといわれる。このアンコールの地が以後約六〇〇年にわたり王都として存続する宗教的きっかけをつくった王である。三代目のインドラヴァルマン一世（八七七―八八九）は、シエムリアップ市内から南へ十三キロのところにある都城ハリハラーラヤ（ロリュオス遺跡）を造営した。都城には中心山を模したバコン寺院（八八一）、祖先を祀るプリヤ・コー（八七九）、貯水池インドラタターカとその寺院ロレイ（八九三）がある。次に前王の息子ヤショヴァルマン一世（八八九―九一〇？）は小丘プノン・バケンの上に中心寺院プノン・バケンを建立し、一辺四キロの環濠を備えた大新都を造営した。以来この第一次ヤショダラプラ（「ヤショヴァルマン王の町」の意味）がこの地域の名称となった。この王はラオス南部からシャム湾まで遠征にでかけていた。その後国内が分裂し、ジャヤヴァルマン四世（九二八―九四二）がアンコールの北東九〇キロのところコー・ケーに新都をつくった。ラージェンドラヴァルマン王（九四四―九六九）は再びアンコールの地へ遷都し、国内を再統一

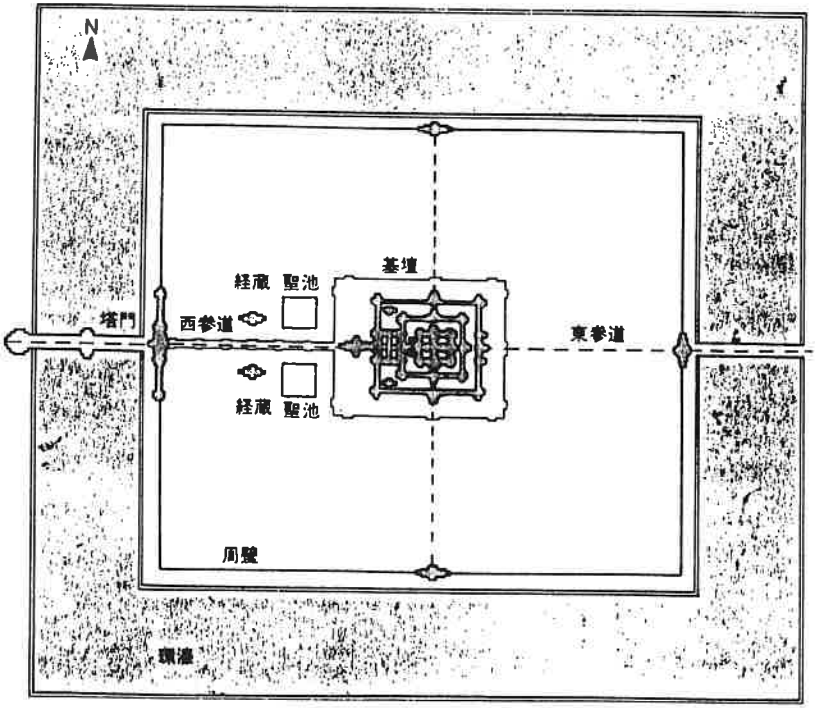
して、中心寺院プレ・ループ（九六一）と東バライ貯水池・東メボン（九五二）を建設した。その後平穏な時代が三〇年あまり続き、華麗な浮彫り絵図で有名な小寺バンテアイ・スレイが建立された(九六七)。ジャヤヴァルマン五世が一〇〇一年に逝去し、有力者三名が王位争奪戦を行ない、スールヤヴァルマン一世（一〇〇二―一〇五〇）が即位した。同王は王宮楼門およびピミアナアス寺院・クレアン小寺群などを建立し、現在のタイ国のチャオプラヤ川流域まで支配下におさめたようである。続いて息子のウダヤディティヤヴァルマン二世が一〇五〇年に登位して中心寺院バプオーンを建て、大貯水池西バライを開削した。

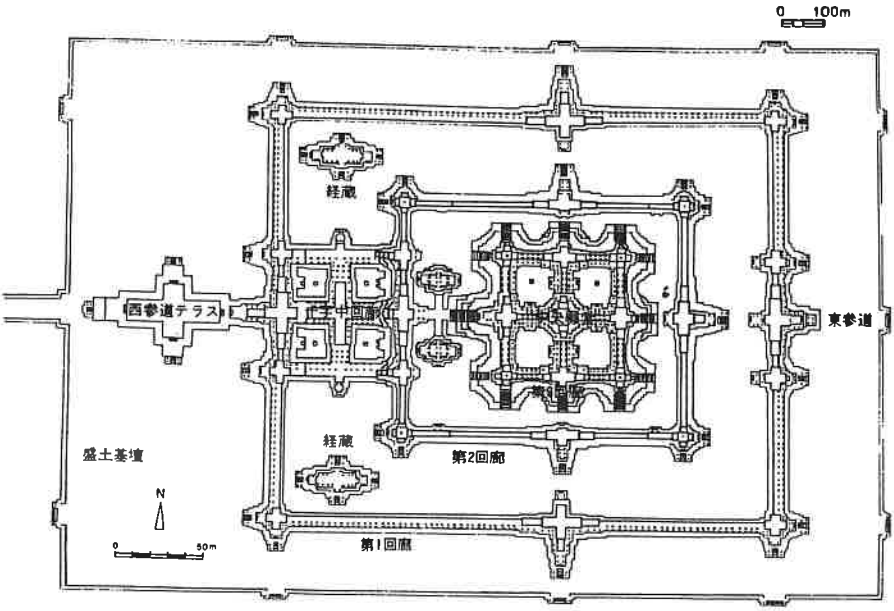
五、高塔・大回廊・大階段のアンコール・ワット

一一一三年に即位したスールヤヴァルマン二世は、アンコール・ワット建設に着工し、約三五年かかって完成させた。アンコール・ワットとはクメール語で「寺院のある町」の意味で、ヒンドゥー教ヴィシュヌ神に捧げられ、王の死後は墳墓寺院となった。この寺院は幅一九〇メートルの環濠が南北一・三キロ、東西一・四キロの長さで取り囲んでいる。石畳を敷き詰めた幅一六メートルの西参道ではナーガ(蛇神)の胴体の欄干が続き、入口から外回廊まで五四〇メートルの参道が天界に通じる路のようにまっすぐ伸びている。さらに数キロに及ぶ大回廊がつながり、本殿には高さ六五メートルの中央塔を中心に5基の尖塔が天空に突き抜けるごとく峻立している。実際は西側が正式な参道であり、東側は建材等の搬入道路であったらしく、土塁のまま残っている。建築学的な特徴は、大規模な高塔と大階段と長い回廊である。

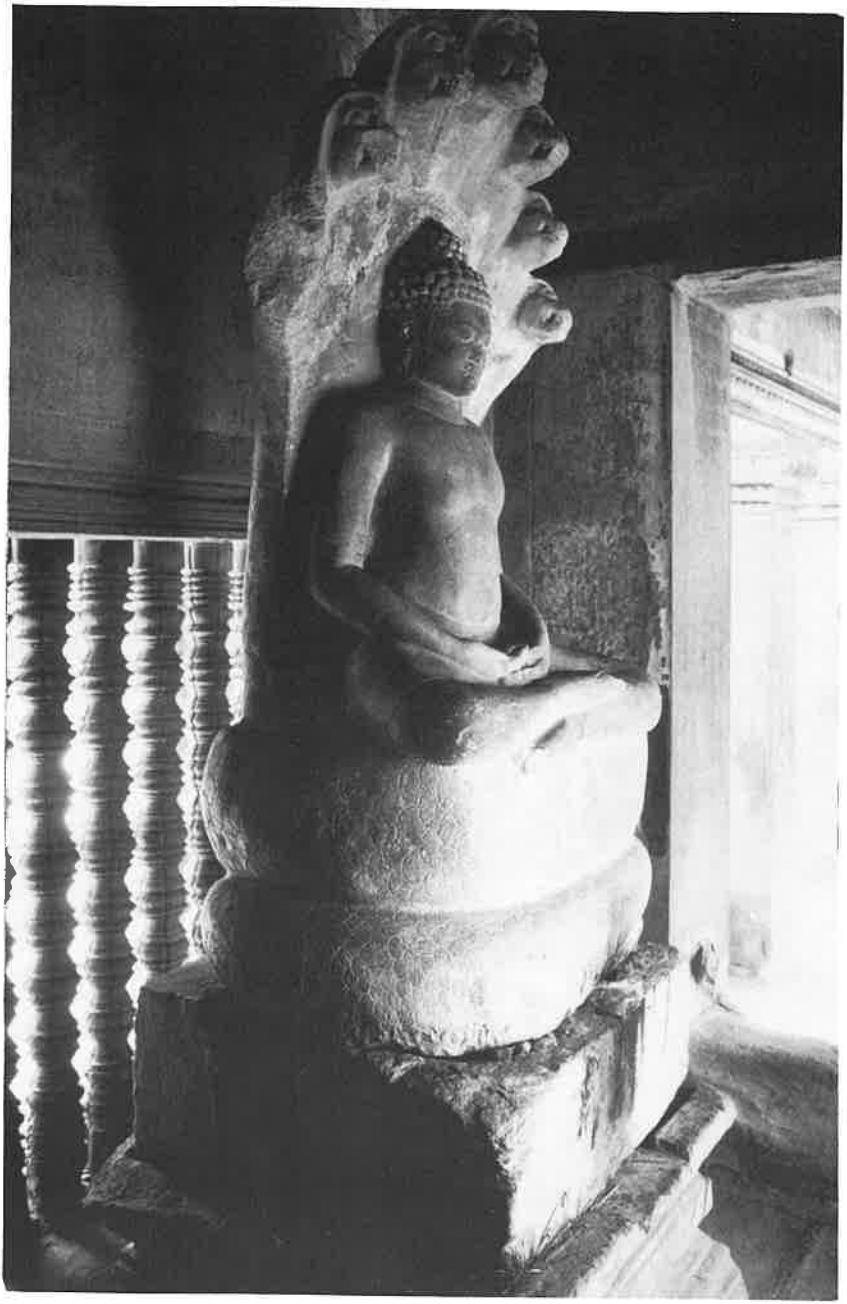
建築装飾では、大回廊内壁面に帯状に彫り込まれた薄肉浮彫り絵図、高塔堂の身舎頂上まで

アンコール・ワット配置図(上)と中央拡大図(下)





ラーマーヤナのレリーフ（アンコール・ワット）



回廊の仏像

全壁面に施された巧緻な種々の文様、それに壁龕や堂塔四隅に刻まれたデヴァター（女神）立像浮彫りなど、どれも絢爛豪華な装飾である。特に第一回廊（二〇〇メートル×一八〇メートル）内壁にはインドの叙事詩から挿話したラーマーヤナ物語・マハーバーラタ物語の絵図面が描かれている。また、王の歴史的絵図、天国と地獄の図、乳海攪拌の図、クリシュナと怪物バーナの戦闘図などが有名である。アンコール・ワットは十五世紀後半から上座部仏教の寺院に衣替えした。十字回廊などに仏像が多数奉納され、近隣住民の聖地として今も生き続けている。

十七世紀の朱印船貿易隆盛のころ多数の日本人がここを祇園精舎と考えて、参詣していた。十字回廊など十四か所に日本人墨書跡が確認できる。その年代は一六一二年から一六三二年までに及んでいる。その絵図面（「祇園精舎の図」）が水戸彰考館に残っている。なかでも森本右近太夫一房（もと加藤清正家旧臣の子）が寛永九年（一六三二年）にアンコール・ワットを訪れ、父義太夫の菩提を弔うため仏像四体を納めたと記している。

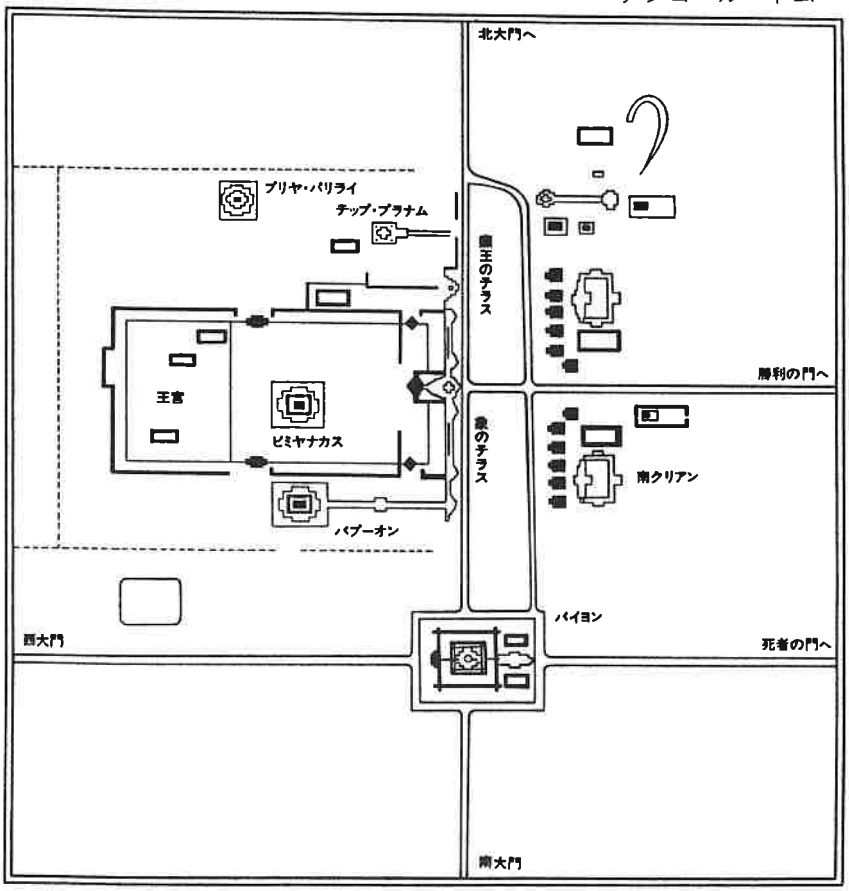
六、宗教都城アンコール・トム

スールヤヴァルマン二世は一一四五年ごろに行方不明となってしまった。王位継承者は短命で、王位簒奪もあり国内政治が混乱していた。一一七七年にベトナム南部にあったチャンパ国の軍隊がメコン川をさかのぼってアンコール都城まで侵入し、王都を蹂躙した。

国内の混乱を収拾して一一八一年に即位したシャヤヴァルマン七世は、各地に一〇二か所の施療院と一二一か所の宿駅を建設した。その版図をインドシナ全域にまで拡大し、空前のアンコール大帝国を建設した。アンコール・トムとはクメール語で「大きな町」の意味で、ジャヤ

ヴァルマン七世が十二世紀末から十三世紀初めにかけて造営した宗教都城である。この都城は周囲十二キロの環濠に囲まれ、高さ八メートルの城壁と五つの城門を備えている。城内には中心寺院バイヨンがあり、他に王宮、諸寺院、祠堂、僧院などがある。城門の高さは二三メートル、その上部には王の篤信する観世音菩薩が飾られている。城門の前に幅一一三メートルの環濠にかかった陸橋を渡り、その両側にはナーガ（大蛇）の胴体で綱引きをする五十四体の巨像が一列に並

アンコール・トム



び、一方がデヴァ（神々）で、他方がアシュラ（阿修羅）である。これらの巨人群はアンコール・ワット東面回廊浮彫りに彫られた「乳海攪拌」場面を立体的につくりあげたものである。城門は巨象・山車・牛車などが通り抜けられる。城扉は朝開かれ、夜閉じられたという。

七、大乗仏教の中心山バイヨン寺院

ジャヤヴァルマン七世は仏教に帰依していた。巨大な四面仏顔が塔頂に安置され、仏陀の慈悲が四周を照らすといわれている。この仏面塔建築様式は世界に類似のない独特の様式である。バイヨンの設計は二重の回廊を巡らせ、円形の中央本殿の上部に四面仏顔を高く積み上げている。その仏顔塔は高さ四五メートルに達し、さながら大きな岩石の山という観がある。バイヨンは建築中に何度かの設計変更があったらしく、複雑な構造となっている。寺院内部には動物・植物の装飾文様が施され、破風・楣（マグサ）など随所に神仏を称えた浮彫りが彫られている。建築手法にも数多くの独創性が見られる。回廊浮彫りには、壁面にびっしり帯状の浮彫りが描かれ、その構図・手法・図像・題材とも写実的であると同時に迫真性にあふれ、見ごたえがある。回廊南面には当時の庶民の日常生活が描かれ、アンコール軍とチャンパ軍の壮烈な戦闘場面も壮観である。城府内にはバプォーン寺院（十一世紀）、王宮跡・象のテラス、テップ・プラナム寺院（十世紀初頭）、プリヤ・パリライ寺院（十二世紀前半）などジャヤヴァルマン七世以前の寺院や諸施設がそのまま残っている。

ジャヤヴァルマン七世の建築様式には、多く四面仏顔が配され、アンコール・トム城外ではタ・プローム（一一八六）、バンテアイ・クディ（十二世紀末）、プリヤ・カーン（一一九一）、ニャック・ポアン、タ・ソム僧院、バンテアイ・

南大門（アンコール・トム）前のナーガ（蛇神）の欄干

チュマール寺院など数百の寺院・僧院・施療院・宿駅を建設した。一二九六年に元朝使節の中国人周達観がアンコールを訪れ、その見聞録『真臘風土記』を著わし、当時のアンコール・トムの様子を伝える貴重な史料となっている。

八、アンコール遺跡ＳＯＳ

観光客はあの有名なアンコール・ワットやバイヨン寺院などの巨大な石造寺院に倒壊の危機が迫っているとは感じないかもしれない。内戦の被害は少なかったが、大量の雨水、大樹木の根、コウモリの糞など、自然の力による崩壊の危機は予想以上である事がわかった。実際に詳しく調査して見れば見るほど、あの荘厳な堂塔群もかろうじてそこに建っているだけであることがわかった。すでに倒壊した小建物や堂塔は、ここ五年以内に起こったものが多く、保存修復作業はまさに緊急の課題である。

カンボジアの人々はアンコール遺跡の保存修復の責任を自覚し、人的・財政的・物質的不足にもかかわらず、これまでできるかぎりの努力を傾けてきた。しかしながら、遺跡の規模の巨大さ、緊急に着手しなければならない遺跡だけでも二五か所あり、その緊急工事だけでも二〇年以上かかると推定される。二二年間放置されていたために、自然的人為的破壊が進み、倒壊の危機に直面しているのが現実である。上智大学では一九八〇年からアンコール遺跡調査・研究を開始し、アンコール遺跡の優れた世界的な価値とその損壊の危機的状況のデータを収集し、遺跡救済の緊急性を世界に訴えてきた。なぜ日本がアンコール遺跡の保存修復を手伝うかといえば、その優れた技術と人的貢献の可能性が高いこと、それがカンボジアに文化復興を導くこと、また、近隣のアジア諸国に日本の知的支援の事例と実績を示すよい見本となることが

考えられる。

日本政府がアンコール遺跡のために百万ドル（ユネスコ信託基金の中から）供与する件は、カンボジアでこの三月十八日の朝のトップニュースとして伝えられ、現地にいた私たち調査団にまで確認の問い合わせがあったほど大きな反響があった。上智大学ではこれまで第七次までの調査団を派遣し、インベントリー（破壊状況カルテ）、考古発掘、建築、地質、保存技術、環境、社会経済、植物植生の八課題の調査を実施し、生のデータを集積してきた。これらの膨大な調査成果はアンコール遺跡全体のマスタープランの基礎資料になるものである。日本のアンコール遺跡保存修復への協力は地道で長い時間のかかる文化貢献であり、二一世紀に向けての最大の文化事業となるであろうし、日本が地球レヴェルで人間・文化・環境を掲げて行動する経済大国として、その文化協力の中味と実行力が問われるところである。

「アンコール遺跡救済委員会」

一九九〇年七月、日本の官・民・財界の代表が集い、「アンコール遺跡救済委員会」が設立しました。アンコール遺跡修復の支援についてアンコール遺跡救済委員会事務局（上智大学アジア文化研究所内）までお問い合わせ下さい。

電　話　〇三（三二三八）四一三六
FAX　〇三（三二三八）四一三八

天竺報恩旅行

坂井　司

この度一九九二年一月二十七日より二月十三日の間、福井県小浜市発心寺僧堂堂長原田雪渓老師の印度旅行に随伴して参りました。この旅行は印度バンガロール（Bangalore）のMaha Bodhi Society(大菩薩仏教会）会長サンガセーナ師の懇請に基き計画され、横浜市善光寺の住職黒田武志老師の全面的賛同と協力によって実現されたものであります。

私はその御生前親しく御指導を賜りました井上義衍老師の弟子であられる原田老師に海外に於て禅の紹介、指導をして戴くと云う計画を年来の希望として参りました。それは大悟せられた老師の直接の声を海外の仏教関係者、仏教に関心を寄せられる人々に是非とも聞いて戴きたいという願望であります。

二年程前から実社会の現役を一度引退した私にスリランカで工場を建てる事を計画している友人から協力の要請があり、マレーシア、スリランカ、インドの諸国を度々訪れる縁が出来たのであります。私はこの旅行中、此等諸国の仏教関係者の中で最近特に瞑想が重要視されつつある事に気付きました。尤もスリランカには既に何ケ所かに瞑想センターがあり、コロンボの街の中心地ブラース・ロード近くには国際瞑想

センターがあり、又マレーシアではペナンにマレーシア仏教瞑想センターがあり、ビルマからの僧侶がそこの指導に当っております。マレーシアの仏教関係者はマレーシア、タイ国境近くにあるソラタニと云うタイの土地にある瞑想センターへグループで訪れている模様です。前記バンガロールのマハボディ仏教会のサンガセーナ師は「読経礼拝ではもう仏教は通用しない。瞑想修行坐禅を第一の修行とする日本の禅に活路を見出すべきだ」と強調しております。ところが逐次高まりつつある此等諸国の瞑想への関心に対し、日本の仏教界からは日蓮宗やその関係団体の進出はあるものの現世利益の誘いには冷静に対処し、自らが納得の行く方法で精神的悩みからの解放を求める、主として有識階級の要求に応える日本仏教界からの働きかけは残念ながら見られないのであります。私は此等諸国の此等の人々の期待に疑いなく応じられると信ずる肝心の禅宗—坐禅修行を仏道修行の第一義とする禅宗—特に曹洞宗の布教活動を見ない事を誠に残念に思うのであります。この状況下にあって今回の原田老師訪印が実現した事は私個人の喜びは別として、そこに大きな意義を感ずるのであります。

旅行目的地インドは云うまでもなく釈尊御生誕の地であります。然しインドは長年に亘り仏教の衰退が著しく、漸く第二次世界大戦後現インド憲法の創案者で近代インドの三聖人であるアンベドガル博士の唱導により大量の仏教への改宗が行われ、恐らくはそれも理由の一つとして逐次仏教復活の兆しがインドでは見られると云われますが、財政的理由から必ずしも予断が許されない状況であります。仏教徒は未だインド総人口の一%にも満たない模様であります。又今回の旅行で奇しき因縁と驚いた事に、バンガロールへの途次立寄ったマドラス(Madras)

から近々七十五㌔離れたカンチープラム(Kan-cheepuram)が三十年程前に達磨大師の御生誕の地として確認されていると聞かされました。そんな事から私は今回の原田老師の訪印旅行をお釈迦さま、達磨さまへの報恩と意義づけ、頭にインドの古名の天竺を持って来て敢えて「天竺報恩旅行」と名づけたのであります。

さて一九九二年一月二十七日午前十時四十五分成田空港出発から始ったこの天竺報恩旅行で原田老師に随伴する人々は、発心寺に掛錫して十五年になる米国人デビッド・ルメー師（大岳さん）、横山益枝女史（原田老師弟子）、私の友人坂田健太郎氏とそれに私であります。飛行機はマレーシア航空クアラルンプールへの直行。所要時間約七時間を経てクアラルンプールには同日薄暮に到着しました。空港にはクアラルンプール郊外バトウー・アラン(Batu Arang)に別宅を持ちそれを禅センターにしようと目論むリンガム(Lingam)氏夫妻、同氏の友人三名の出迎えを受けました。その日はクアラルンプールのフェデラル・ホテル(Federal Hotel)に一泊。明けて一月二十八日マドラスへの出発が午後九時三十五分と云う事もあって同日の午前はクアラルンプールのほんの一部を見物、午後は前記リンガム氏の別宅で同氏の知人、友人を集め、原田老師の禅についての短い講話に続いて質疑応答に移り夕刻に到りました。

クアラルンプールを午後九時三十五分出発、航空時間は四時間なのに時差（二時間半）の関係でマドラス着はまだ同日の深夜でありました。空港には深夜に拘らず出迎えられたのはマドラスのマハボディ仏教会の主任僧ラタナパラ師とバンガロールのマハボディ仏教会幹事ナンダーナ氏でありました。明けて一月二十九日マドラスのマハボディ仏教会訪問。その折再会のラタナパラ師から達磨大師生誕地の話を聞きま

した。

達磨大師は紀元五世紀、南インドにあったパラバ(Pallaba)王国の王子であった云われます。年令八十歳の時中国へ向け出発、その二年後に中国に到着したと云う事です。その時中国に向ってインドを旅立たれた港は現存しており、その名をマハバリプラムと云う処であります。パラバ王国は別名カンジー(Canji)国と呼ばれ、その由来は同国のある時の女王が貧民にお粥を施したと云う事にあると聞きました。Canjiは勿論お粥を意味します。現在香港でもシンガポールでも又マレーシアでも、お粥を注文する時カンジーと云えば間違いなくお粥が出て来る筈です。カンジーは中国人にとって外来語と思います。達磨さま生誕の国として中国語で香至国と紹介されているそうですが、現に中国人(広東出身か)に香至の発音を聞いてみるとファンジーと答えました。香至はカンジーの当て字なのかも知れません。達磨さんにまつわる少林寺拳法も達磨さんが中国に伝えたと云われているそうです。マドラスのあるタミルナード州に隣接するケララ州は元々武術の盛んな地であり、達磨さんに随行した人の中にこの地に伝わっていた拳法を得意とした人がいたのでしょう。

さて明けて一月二十九日は、二度出発延期があって漸く午後六時インド航空の飛行機はバンガロールに四十五分後に到着。空港ビルに入った途端にガーランドを首にかけられました。見るとバンガロール、マハボディ仏教会々長サンガセーナ師始め五～六名のお坊さん、在家の仏教会関係者数名の笑顔の出迎え。その後歓迎の車は夕闇でもうっそうとさだかに見える大木のアーチの並木道を一路マハボディ仏教会へ。約三十分ドライブの後仏教会到着。門前を入ると本館から門までの一面が眼を瞠る明るさ。よく見ると本館前までの前庭の通路の両側に仏教会

に寄宿する少年三十名位それを埋めて仏教会関係者の人々が立ち並び、少年は手に光芒を放つローソクを持っており、私どもが門から本館へ向い始めると一斉にお経のコーラスを始めました。一瞬戸惑いを感じましたが熱烈な歓迎に少なからず感激しました。本館の一階で正面ホールに入るとその正面一段高い所には老師と私どもの為にテーブル、椅子が設けられており、そ

こでは早速、茶菓の接待を受けました。私もどに対面してホールには仏教会幹事、後援者の人々が起立して私どもに注目しており、それらの人々を前にまず会長サンガセーナ師の歓迎の御挨拶、続いて老師の返礼の謝辞。ホール内での歓迎会は簡潔に終了しました。その後仏教会の眞裏にあるカニシュカホテルへ移動。三日後に始まる坐禅講習会からバンガロール出発の日までこのホテルで日々を過しました。

続く一月三十日、三十一日はマハボディ仏教会側との坐禅講習会実施に関しての細い打合せと市内見物に当てられました。

さて坐禅講習会の打合せでサンガセーナ会長の日本の接心をやり方を学びたいという希望を考え、一方原田老師の長続きするように厳格の度が過ぎないようにとの配慮に沿い、次のように査定を決定したのであります。

午前

四時	振鈴	四時半	止静
五時十五分	経行	五時半	止静
六時十五分	朝課	六時半	粥座
八時二十分	止静	九時	経行
九時二十分	止静	十時	経行
十時二十分	随意坐	十一時二十分	止静
十二時	斎座		

午後

一時	随意坐	二時二十分	止静
三時	経行	三時二十分	止静
四時	経行	四時二十分	止静
（午後二時～五時　独参）			
五時	薬石	六時二十分	提唱（提唱後質疑応答）
八時二十分	止静	九時開枕	

作務は仏教会内で別に清掃その他の労務を行

う人がおり、今回はその時間を設けない事に決定しました。

参禅者は四十五名。但し申込希望者は一〇〇名を越えた模様で会場の都合上四十五名に限定したと聞きました。尭も参加者のあの独参に見られる熱心さから、老師の御健康上四十五名位が限度かと思われました。

参加者の主体が各分野での中堅層もしくはそれ以上に位置する人々が中心と推測され、一応七日間の決して楽とは考えられない行事に参加するには、参加者側に於て並々ならぬ決意を要したと思われます。一方講習会開催の発表は通告程度の小さい新聞記事でなされたと聞きます。このような状況下で一〇〇名を越える参加希望者があった事は、潜在的な禅への関心が相当広く深いと考えさせられるのであります。

参加者は私の接触した限りでは市の土木技師、航空関係技師、大学化学教授、経営コンサルタント、精神開発のコンサルタント、婦人記者、会社経営者、ヨガの指導者、銀行家夫人、中高年の夫婦二組、それにボン字の研究家もいたと聞きます。この種会合には普通婦人が多数を占めるケースが多いのですが、今回の坐禅講習会では中年男性は極めて多数であった事は驚きでした。参加者の中にはボンベイともう一つ北インドの都市から馳せ参じた人も居られたと聞きました。更にバンガロール在住のブータンとチベットからの僧侶の参加を見たのであります。

さて二月一日から二月七日までの坐禅講習会は極めて実質的内容に富み、参加者に多大の感銘を与えたと推察できます。講習会最終日の感想発表会では心からの老師への感謝の言葉が相次ぎ述べられました。ある一人はインドで始めての坐禅センター開設の必要を表明しました。私が知り合った中老の人は独参の時坐禅センタ

ー設立の為の用地提供の用意があると老師に申し上げたと話しておりました。参加者の感想の発表から講習会の成果は満足すべきものであったとの結論を得ました。

マハボディ仏教会々長サンガセーナ師から直接聞いた話では、ここ何年か背をかがめると激痛を感ずる婦人参加者の一人が二回の独参の時、老師の前で礼拝しても二回とも激痛が無かったと述懐したと云う事です。又二、三人に止まらない人が独参の時の異常な感銘を語ったとも聞きました。私自身参加者の一人から直接に独参により多年に亘る疑団が解消したと興奮して語るのを聞きました。同人は後刻、その間の状況の詳細を手紙で伝えると約束しました。サンセガナ師は私に「原田老師は子供のような面も見受けられるが何とも深い智恵をお持ちのようで、このような仏教関係の師に出会った事がない」と印象を話されました。

この講習会での老師の提唱は『般若心経』をその教本と決めてありましたが、老師の冒頭の説明の如く字句にとらわれず奔放に老師は色んな話題を取り上げられました。提唱は一応テープに集録されていますが、提唱中メモした老師の御言葉を多少下記に紹介したいと思います。老師の言葉はその悟境から出たもので、一般老師の悟境を向うに見ての言葉とは次元的な違いがあり、老師の語り口は実に淡々としたものでありますが、聞くものをして、のっぴきならぬ逃げ場のない処に追いつめられる感を与えるのが常です。

○（涅槃はどんな状態かとの質問に即答して）
貴方の今が涅槃の状態です。（参加者一同洪笑）然しもし貴方が涅槃にあると知ったら直ちにその外にある。

○人は今を認められない。唯未来と過去しか認

められない。
○不純さが無くなれば純粋さも無くなる。
○悟りも空も涅槃もあっては駄目。我々はそれ程自分自身である。我々は世界人口五十億人の五十億分の一つである。
○知る事も知らぬ事も半分しか知らぬ事もそれはすべて貴方の事実。
○そのままにして自分を残してはならない。
○悟る事は自分が自分になる事。
○（人生の意義は何かと聞かれて）人生に意味はない。目的をもたなかった子供の時に色々の知識を持って帰る事。
○瞑想中は涅槃に入れぬ。
○月を差す指が経典。坐禅瞑想は指の役目。重要な事はその指が無くならないと涅槃を見る事がない。
○自分のではない仏の道を歩くから道が見えない。
○理として知らねば修行をどうして進めるか分らぬ。仏陀にはその指針が無かった。全く分らなかった。全くの暗闇の中で明るいものを見たいと私欲が全く無くなったその時星の光を見た。では色々の方法を知った我々はその知った事を擦り潰す以外はない。自分自身の事だから擦り潰す事が出来れば悟が開ける。意識で意識を潰す。
○坐禅はテクニクが無い方が良い。
○無くなった事を知ったものも無くす事。
○坐禅について正しいと云う言葉は一つになった事で正邪の正ではない。考えそのものになる。
○禅とは禅を無くする禅、瞑想を無くする瞑想。
○戒法は三昧に入り易い為に考えられた。戒律を守ればそれが仏道の修行と長い間間違えて考えられて来た。
○心の動きを収めるのに動かさないようにする

のは心を収める事にならぬ。動きのままに任せるのがその方法。
○小が絶大、中が絶大。
○損をしても喜ぶべきで悲しむべきではない。
○仏法すべて結果論。
○今の自己が最も重要で確か。この意味で仏道は要らぬ。
○法理は蛇足。一応法理を聞いて貰って理は必要でなかったと云う事を知って貰う為に話をする。病人には薬が要るが病人でない人には薬は要らぬ。むしろ無い方が良い。然し病気でないのに病気と考える人にも薬を見せる必要がある。
本来成仏。今それを信じたならば仏教は不必要。然しエゴの為に信じられない。それで法理の薬を与える。
○雪ほど黒いものはない。
○何物も無くなった処が仏道の究極。
○真を求める一番の仏道は坐禅。
○分る、分らぬにはつぎ目が無い。どちらも一つものから出ている。

坐禅講習会は二月七日終了。同日午後三時より参加者の感想発表会。発心寺紹介のＮＨＫビデオの放映。その後参加者、マハボディ仏教会の関係者多数を交えての参加者からの老師始め私どもに対する感謝の贈物贈呈式。続いて出席者一人一人が順次ホール正面に鎮坐する老師に脆いて拝礼、これが延々と続いたのであります。これで一応参加者との御別れ。式後各人は興奮気味でバルコニーのあちこちに会話の輪を作っていました。

明けて二月八日は午後五時からマハボディ仏教会との別れの行事。会長始め幹事の挨拶の後、筆者も一云謝辞を述べました。最後に老師の御挨拶。後は仏教会関係者の仏教会に寄宿する少

年達も加わって前日同様の一人一人の老師へ拝礼が始まる。又少年のお経の合唱が同時に始まる。仏教会の先任僧アナンダ師は感激の面持ちで、この時老師は落涙されたと後刻私に語ったのであります。

続く二月九日は午後六時十五分マドラスへの出発を前に仏教会本館の前庭で簡単な茶菓の接待があり、仏教会を去る老師始め私どもに少年の整列による見送り。私はなるべく多くの少年と握手する事に努めました。老師はこの見送り直前に特に僧侶のみを集められ、僧侶のあり方について訓示を与えられました。

帰路は往路と同じルートでマドラス、クアラルンプール、東京のコースが採られました。クアラルンプールでは旅行代理店のミスで東京の出発が一日遅れました。結局二月十三日午前九時クアラルンプール出発で成田へ向う事になりました。

今回の旅行が南西アジアへの禅関係の布教活動の端緒になる事が期待されます。今回の坐禅講習会直後から来年度の計画が話合われ、マハボディ仏教会々長サンガセーナ師は来年夏カシミヤ州ラダックでの接心を考慮されるよう老師に懇請しました。参加者の一人は印度の主要都市数カ所での講習会開催の希望を申し出ました。

考えますと禅の重要性は今後愈々大きくなると思います。科学万能主義は早やその軌道修正を迫られています。科学の功績の大を認めるにやぶさかではありませんが、その罪過は大量殺人兵器の出現や世界規模で対策を迫られている公害問題に見られます。政治的に今の世界は人類の幸福を企図した社会主義も資本主義も、もはやその極め手では成り得ない事が立証されつつあります。経済第一主義も人心の荒廃や資源

の涸渇等でやがてその修正が迫られるでしょう。この状況に鑑みて私は禅を通じて人間の意識の改革の必要を痛感するのであります。即ち知識が智恵の上段にあると云う位置づけの是正です。知識は智恵の下段にあるべきです。この修正を通じ科学の進展が人間の良識の統制下に入り、又エゴのない本当の民主主義の出現がやがては期待出来ないかと思うのであります。何れにしましても禅の重要性は愈々高まる許りであります。先鋭的な物理学者の間で大分以前から知の時代から行（習練）の時代が予見されております。この様な時勢の中で私が誠に残念に思う事があります。それは来るべき時代のにない手となるべき禅の本尊曹洞宗の中で、兼てから見性悟道不要論が一部で主張されている事です。道元禅師以来綿々として守られて来たこの金看板を下す事は決して許さるべき問題ではありません。見性悟道が無くなれば禅宗は後に何が残るのでしょうか。その他一般宗教の一つと成り下る許りです。これは日本文化大きくは世界文化にとって由々しい問題であります。猛省を御願いしたいのであります。人生の最終期を迎え更に坐禅修行の続行を決意する老人の私は、この機に敢て苦言を呈するのであります。

さて締りのない旅行報告になりました。終りにのぞみ改めて黒田老師、原田老師、今回の随伴の人々、マハボディ仏教会のサンガセーナ師、クアラルンプールのリンガム夫妻にも深く謝意を表したいと思います。

今回の旅行は蛇足の行以外の何物でもないと叱責を受ける向きもあるかも知れませんので、ここら辺りで天竺報恩旅行の報告を終らせて戴きます。

一九九二年二月二十五日　　合掌

追悼　故 黒田嘉さま

しめやかに追悼会厳修

——法名　安徳院殿嘉祥妙慶禅尼——

故黒田嘉略歴

明治三六年六月一日　長野県井上村(現 須坂市井上)の安養寺にて前角朴翁・安意の長女として生まれ、後、須坂興国寺にて育つ。

大正九年　長野高等女学校(現 長野西高等学校)卒

大正十三年　女子美術大学(現 女子美術大学)卒

大正一四年　光真寺三六世黒田白順と結婚、男子八名を出産。以来光真寺復興発展に貢献。

昭和二四年　栃本県西那須野町 那須寺の開創に貢献

昭和三〇年　東京都品川区 桐ケ谷寺開創開基

昭和三九年　学校法人ひかり幼稚園創設

昭和四四年　横浜市港南区 善光寺の開創に尽力

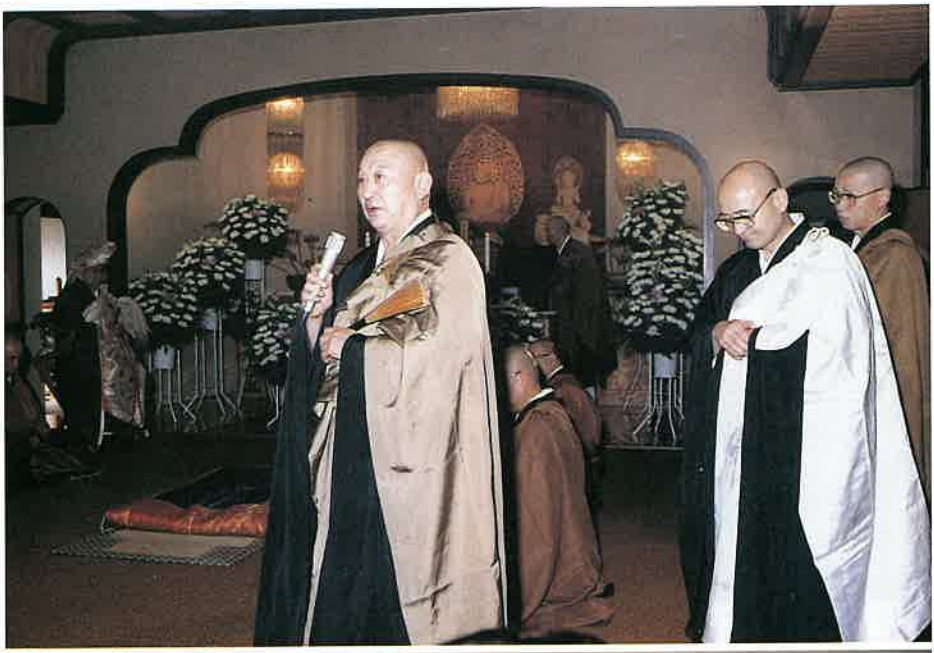
昭和四五年　米国ロスアンゼルス仏真寺開基

昭和四六年　米国仏真寺開単式参列・メキシコ等歴訪

平成三年　静岡県小山町 不二寺開基

平成四年一月三一日　行年九十歳にて逝去

挨拶する光真寺住職黒田俊雄老師



善光寺黒田方丈の母堂・黒田嘉様が一月三十一日に逝去されました。二月八日善光寺において、佐藤俊明老師導師のもとしめやかに追悼会が厳修され、ありし日のご母堂を偲びました。本誌では写真や追悼文、弔辞やお悔みのお手紙などで「〈特集〉追悼　故黒田嘉さま」をおおくりします。

東郷　優氏

東　隆眞老師

池沢悦二氏

東郷　敏氏

婦徳浄く嘉祥圓かなり

佐藤俊明

昨年六月十一日は方丈様のお母様とお会いした最後の日でした。

桐ヶ谷寺さんが富士山麓に別院「不二寺」を建立され、その本尊様の開眼法要のおこなわれたのがこの日でした。

黒田純夫方丈様は本尊釈迦牟尼仏奉祀の発願文の最後を次のように結んでおられます。

この功徳回らし以て、
一には開創楳庵白純大和尚の為にし奉り上
慈衛の大恩に酬いんものなり
二には開基悲母黒田嘉刀自、乳哺養育の恩に
報じ、現当二世の安楽を祈誓し奉る
三には山門興隆、檀信帰崇、諸縁如意吉祥な
らんことを

と。

この晴れがましい大法要の主賓であられるお母様ですが、決して表に出るようなことはなく、小さな体をより小さくしてかげにひそまれるような慎しみ深いお姿でおられたのがとても印象的でした。

帰途、横浜までクルマでごいっしょさせていただいたのですが、そのときも「善光寺をよろ

しく頼みます」と、まことに丁寧なお言葉をいただき、恐縮したのでした。このときはたいへんご元気でしたので、まだまだ大丈夫と思っていたのでしたが、秋ごろから健康をそこなわれ、十一月下旬、方丈様と共にお仏舎利奉戴のためタイに出かけるときは、果たして出発できるだろうかと案じられたのでしたが、さいわい予定通り日程を消化することができて胸をなでおろしたのでした。

年末には方丈様はたいへん心配なされ、万一に備えられたのでしたが、ほんとうに強い生命力でよく頑張ってくださいました。白純大和尚様の御命日まではと自らをはげまされたのでありましょうが、とうとう力尽きて一月三十一日、遂に不帰の客となられました。

二月六日、肌寒い日でしたが、さいわい好天に恵まれ、大田原の光真寺様で御葬儀がおこなわれ、二千人の会葬者が別れを惜んで焼香され、まことに御生前のお徳を偲ばせる一大セレモニーでした。私は方丈様との深い仏縁のおかげで尊茶師をつとめさせていただきました。尊茶師は大導師の脇役ですので、手短かに所懐の一端を述べたに過ぎませんでしたが、二月八日、善光寺様での追悼会の際、導師をつとめさせていただきましたのでそのときの香語をしるして、お別れの言葉といたします。

安徳院殿嘉祥妙慶禅尼追悼会香語

成壽山頭・寂浄の光
心香一炷、霊堂に供う
音容、今日、何所の処にか在る
唯祈る、余慶、久しく昌昌ならんことを
恭しく惟れば、安徳院殿嘉祥妙慶禅尼　霊位
婦徳　自ら浄く　嘉祥是れ圓かなり。
事に処しては丹精、左之右之、陰徳を積む。
人に対しては懇切、茶裡飯裡、安祥を事とす。

夫師の室に侍しては辛酸を嘗め、念慮密密にして内助息むこと無し。
子息の母となりては寝食を忘れ、心情綿綿として鞠育厳然たり。
慈雨普く注いで潤い余り有り　六個の鉄漢、法運いよいよ盛んなり。
心華恒に開いて彩変らず　家風穆穆として寺門永く全しし。
此の日現董大圓武志方丈　鴻大の恩徳に感じ、報恩の悃を披き、諸山の耆宿、有縁の四衆を招請し、追悼法会を厳修す。
因みに野衲、大圓方丈の清嘱を蒙り、上具の筵に侍す。
正与麽の時、妙慶禅尼、応供有伴の消息、如何が口唇を湿さん
咦
清白の家風、梅雪の月
去来跡無く寒光を散ず

母を語る

善光寺住職　黒田武志

新しい年を迎えて母を亡くしました。昨日、実家で荼毘にして帰って参りました。おめでたい時にこれを申し上げてどうかなと思いましたが、私も皆様と同様に両親がありましたが、諸行は無常であり、今は二人とも亡くなりました。「会うは別れの始めなり」ということであります。母は最後の一ヶ月間は宇都宮の独協大学病院に入院しており、九十歳の生涯でありました。私も何も悔いることはありませんが、本当に生前、皆様方始めお寺でお手伝いいただく多くの方にお世話になりました。母に代わって、厚くお礼を申し上げます。

皆さんに私の母のことを申し上げるのは大変僭越ではありますが、私の母は遠慮に遠慮して、決して人の前に立つようなことはしない小柄な母で、父の十メートルぐらい後から、黙ってついて行くというような人生を送りました。従いまして、そういう性格でありましたから、人様の前に出て話しをしたり、何か書いて残そうというようなことを一度も考えない母でありました。母に関しては何の記録もありませんので、皆様に私の母の一端を、お話しさせていただければと思っておりますのでお許しを頂戴してご不快な、お聞苦しいこともあろうかと思います

が、方丈は勝手にお話しをしているとお思い頂いて、軽くお聞き流していただきたいと思っております。

昨日夕方帰りまして、留守のことや本日（節分）の準備を、院代始めこの寺で毎日お手伝いをしていただいている皆様にお願いをしておりまして、準備が整いましたので、早目に休もうかなと、十一時少し前に休みました。夜中の一時半に起きて、三時に起きて、五時に何とはなしに起きたのですね。四時頃でしたか、夢の中で私がある島の岸におりまして、強い風がきました。すると、波がいきなりワーッと三メートルも四メートルも上がって、思わず「あっ、そこの子どもさんたち、だめだーっ、早く逃げないと海の中に入っちゃう、逃げろ！」と叫びました。ところが今度はこっちのほうが早く逃げなくちゃだめということでそこを去り、そこがどうなっているかと再び戻って来たら、また、どんどん風が吹いてきて、最後にある岩まで、そこが流されたら困るんだと思っているうちに流され、いやいや全て失った…というところで、目が覚めました。さて、これは何の夢だったのか。考えておりましたんですが、一切を捨てて生きた母親の生きざまではなかったかと感じました。これは、私利私欲を捨てて仏様にお尽くしをした母の姿であり、私に対する忠告ではないかと思っております。

母は長野の須坂市の安養寺という小さいお寺に生まれました。後に父親は興国寺というお寺の住職となって移り、そこで育ちました。母には弟二人おりましたが、どういうわけか二人とも若くして死にました。母は長野から栃木の寺に嫁ぎましたが、その寺は火事の後で、住居全体が小さく、十六畳の本堂と左右に八畳と六畳の部屋、台所が板の間で戸もないようなバラックで、そこで生活をしておりました。そういう

ところへ嫁いできましたから、「いやいや、これはえらいことになった」と。あんまり小さいし、貧しい寺ですから「何度も帰ろうと思った」ということであります。母が嫁いで来る前にお寺から火が出て、風も強く町の大半を焼く大火になりました。それでおばあさんは毎日「申し訳ない、申し訳ない」と謝っておりました。そこへ母が嫁ぎました。母は須坂ではわりかた恵まれた生活をしておりましたが、おばあさんは厳格な上にさらに厳しく、「女が生まれたら離婚をしてほしい。絶対に女は生まないでほしい」というのが、嫁いできた母に対する最初の言葉でした。「まあびっくりした。女が生まれたら連れて帰らなければならない。どうなるかと思った」というのでした。そして最初に、男が生まれました。しかし四歳でバナナを食べ過ぎて、大腸カタルで死にました。「さあ、困ったな」ということで、お寺ですから跡継ぎがいないと困ります。そこで弟子を迎えます。ところがどういうわけか、次々と生まれてくる子どもが全部男で、八人生まれましたがみんな男でしたので離婚されずにすみました。小さかった寺も父と母が苦労をし、皆様のお力添えで大きな寺になりましたが、終戦直後などは収入がありません。学校へ行く子どもがたくさんいて、それは貧乏をしておりました。それに父は若くして出世をし、昭和二十六年から大本山総持寺に勤めをしておりまして、それなりに費用が掛かり、支払いができない。それを私は見ておりまして、「おふくろは本当に哀れなものだ。貧乏をさせたくない」と、小さい時から、唯一つ肝に銘じ、魂に銘じたことでした。母親が皆さんに、迷惑を掛けることに対して、「本当に申し訳ない」と言っていたのが私の小さい時の印象であります。母は一メートル五〇センチそこそこですから、昔のご飯の釜が持てない。ですからどうしても私が手

伝ってやらねばなりません。兄弟は七人おりましたが、それぞれに勉強したりしていましたので、私は常に母親だけは粗末にしたくないと、自転車でお使いなどにも行って、少しは母親の役に立つような心掛けだけはしたつもりでしたが、やったことといえば親不孝の最たることだけでした。

前々日に雪が降って、昨日はまだ雪が残り、庭もぬかり、斎場に行きましても山のような雪が積もっておりましたが、純白の清い雪の中でお葬儀をして、汚れのない素晴らしいところで荼毘にして「これでよかったなあ」と思っております。皆様に本当にお世話になりましたが、申し上げましたように、常々合掌して多くの皆様にお世話になってありがたい、又子供達には「あなた方のところが何とかなるように」と、いつも口ぐせに言っておりました。私も皆様のお陰で少しづつ良くなりつつあるところであります。生前ご厚情を頂戴いたしましたことを重ねて厚くお礼を申しあげるわけであります。私は六男坊でありますので、母は滅多にこちらへは参りませんでした。何か行事がある時だけ参りました。「皆様にお礼を」と言いますと恥ずかしがって「いやいや、私はいい」とこう申すものですから、ろくなご挨拶も申し上げませんでした。皆様のおかげで善光寺が少しづつ形が整って参りまして、厚く厚くお礼を申し上げるわけでございます。私は喪主ではありません。全て田舎の方で致しますので御了承頂きたいと思います。

母はつねづね「おじいちゃん、おばあちゃんをどうぞ大事にしていただきたい。また、おじいちゃん、おばあちゃんは、お孫さんよりお嫁さんに好かれますようにお願いします。どうぞ親子はご円満に、姑さんとも仲良くしていただきたく思います」と申しておりました。私の母

の最後の願いの一端を申し上げ生前のご厚情に対して重ねて厚くお礼のことばにかえさせていただきます。

（節分会での挨拶より）

追悼の詞

東　隆眞

故黒田嘉様　法名安徳院殿嘉祥妙慶禅尼様は、明治三十六年六月一日長野県須坂市でお生れになり、平成四年一月三十一日行年九十歳の天寿を全うしてご逝去になりました。あなた様は大正九年長野高等女学校(現長野西高等学校)をご卒業のうえ、大正十三年女子美術学校(現女子美術大学)をご卒業になり、その翌年大正十四年、栃木県大田原市光真寺第三十六世黒田白純老師とご結婚になりました。

以来、一代の傑僧白純老師のよき理解者として、またよきパートナーとして、火災のため焼失した光真寺の復興に専心努力して、栃木県、関東有数の大寺院として見事に発展させ今日の大に導いたのをはじめとして、昭和二十四年の栃木県西那須町の那須寺の開創、昭和三十年の東京都品川区の桐ケ谷寺の開創、昭和三十九年の学校法人ひかり幼稚園の創設、昭和四十四年の当善光寺の開創、昭和四十五年の米国ロスアンゼルス仏真寺の開創、平成三年の静岡県不二寺の開創等々にあたっては、直接間接に有形無形物心両面にわたる絶大なる御力を傾注されたのでした。

また八名の男子をもうけ、ことごとく仏縁を結ばせ、このうち四

名すなわち光真寺俊雄老師、仏真寺博雄老師、善光寺武志老師、桐ケ谷寺純夫老師は、それぞれ末寺末山を更に新しく創設し、一か寺を新基建立するなど、常識を超えた大きな力を発揮して、国内はもちろん海外にいたるまで、もっとも活発な宗教活動を展開しておられます。

その性まことに温和、しかも忍耐力強く、白純老師と協力して寺門の興隆、檀信徒の教化に力を尽し、数多くの男子にことごとく大学教育を受けさせ、決してめだつことなく、仏法の信心につらぬかれたご一生は、仏教者、人間の鑑と申しあげても決して過言ではございません。

それにしても、あの小さなおからだのどこに、天地をゆるがすほどのバイタリティがひそんでいたのでしょう。

仏法のために生れ、仏法のために生きぬかれた九十年のご生涯は、いま、確実に世界人類の平和としあわせのために花開き、真実を結ぼうとしております。私どもは、安徳院殿嘉祥妙慶禅尼様のご精神を体して、微力ながら精励することを、ここにあらためて、お誓い申しあげて、弔辞に代えさせていただきます。

平成四年二月八日

株式会社
ナリス化粧品
社長　村岡有尚

本日茲に故黒田嘉刀自　御戒名安徳院殿嘉祥妙慶禅尼様の御供養がおこなわるるに当り、株式会社ナリス化粧品並に社員一同を代表して御霊前に合掌低頭謹んで哀悼の誠を捧げます。私は御子息横浜善光寺住職黒田武志様に御縁をいただきましてより時折拝眉の機会を得まして、その都度御慈愛に溢れたお諭を賜わり、今日に及んでおります。

昨年中ごろよりご健康を損われ、爾来御療養専一にお過しの結果、一進一退の御病状の中にも一時は快方に向われたやにお聞きしておりましたが、今突然の訃報に接し、あまりにもにわかなお別れとなり全く信じられません。

しかし翻って思えば、白純大和尚様の御命日までと懸命に頑張ってこられたものと、その御心中をお察し致します時、白純大和尚様へ、最期の最期までお尽しなさるそのお姿は、誠に尊いきわみであります。本当に有難うございました。本当におつかれさまでした。

安徳院殿嘉祥妙慶禅尼様、あなた様が九十年の御生涯において培かわれた御精神と御遺徳は六人の御子息、方丈様方をはじめ、大勢のお弟子さん方お檀家の皆様方に引き継がれ、尊い菩薩行の原動力となって不滅の光彩を添えるものと信じます。

安徳院殿嘉祥妙慶禅尼様、どうぞ安らかにお眠りくだされ、いつまでも、いつまでも私どもをお護りくださいますようお願い致します。

ここに謹んでお別れの言葉といたします。

平成四年二月八日

大阪府高槻市
東郷　敏

私はお母さまと申し上げます。

親しみと想い出と懐しみばかりが去来致します。方丈さまから、お母さまの御具合いが思わしくないと聞かされ案じておりました。つい先日も「母（おふくろ）は大丈夫ですキット大丈夫です。必らず回復いたします」子としてのご信念から祈る様に、願う様に、届く様に申された方丈さまのお言葉。安易に信じてしまったことは　迂濶でした。自分の忙しさにかまけて御見舞いも先送りしてしまった私。ほんとうに御免んなさい。いまはなんとも申し訳けもなく唯々胸の痛みを覚えます。

白純和尚さまをして最もご信仰あつく生仏けと称せられたお母さまのこと、必らず御仏さまの大なる御加護もあろうかと永遠のいのちに期待し、また新しい春を御迎えいただくこと、信じておりまし

た。そして願わくば一日も早いご快復をと、御祈り申し上げておりました矢先。方丈さまから突然の悲しみを知らされ愕然と致しました。

お母さまはキット天なる御仏さまに救われて守られて召されて白純大々和尚さまのみもとに逝かれたことと思います。

思い出は尽きません。お母さまにはじめてお目にかかりましたのは、善光寺の山が開かれて間もなく、方丈さまと倫子さまのご結婚式が挙げられましたその時でした。

白純大和尚さまは、都度に「嘉子が、よし子が」と仰せられるし、方丈さまは「母(おふくろ)が、おふくろに」とはやくから影武者のような存在を、よーく承知しておりました。

何もかも大の男達がよりかかってしまっている存在。屈強な男児七名、立派な御子達に恵まれこの世に送り出したお母さまでありますから大きく頑丈で果敢な御方ばかりと想像しておりました。

時にお母さまは胸に両手を合わせて男児の中に囲まれてそれはあまりに小さく、まあーるく、低くやさしく、おおらかな御姿に思わず、はっと胸に声つまらせたこと忘れることができません。以来ご立派なお母さまに　私も親しくお話をさせていただくことが出来大

きな感化を受けることになりました。

白純大和尚さまや御子達がそれこそ命を賭けて世のため人のためにと、寺づくりや人づくりの、表舞台でご活躍なさっている間、御台所用人としてのお母さま。「やりくり」の御苦労は人知れずしてとても語り尽せるものでない事、察するに余りあります。

黒田家の暦の中に、悪しき日は一日もなし。どんな辛くとも、苦しくとも今日一日の辛捧。と、みんなの為に尽しても尽しても尚、尚足りぬ御気持で尽され躬自ら身を以って行じてくださった　お母さま。篤く敬して違わぬ、偉大な母像が観じられてなりません。

かってお母さまが子育ての頃の御述懐に、わたくしが手を合わせ拝んでいるとこの子達は、いっこうに手を合わせようともせずそれを見て笑っておりました。云うても見せても聞かせても手を合わせようとはしなかった子供たち。でもそれがいまどうでしょう。朝日ののぼるのをみて、この子達は一生懸命手を合わせ拝んでいるではありませんか。なんと素直でありがたいことか、まことにうれしいことです。和尚さまと手をとり合ってよろこび泣けてしまいました、と、お話くださるお母さまには、安らぎと安堵の色が躰中に溢れ、正にはなる生仏さま、涙ながらに御話くださったことがきのうの

様に鮮明でございます。

東を向いては親さまを拝み、南を向いては諸師を拝み、西を向いては夫や子達を拝み、北を向いては衆生と御世話してくださった方々を拝み、上を向いては御神佛を拝み、下を向いてはお仕えくださる方々を拝む。

目に見えぬ御佛の心を通うこそ、この拝みこそ人のまことであり感謝のすべであり、人の尊さであると活々と教えてくださいましたお母さま。

いつも両手を合わせ、両手でささえ、両手でにぎり、両手の愛をいっぱいくださった成寿山善光寺のお母さま。本當にありがとうございました。

永遠の御別れになりますが御母さまの御恩身に泌みて忘れるものではございません。

以上尽きぬ名残りを惜しみながら。

平成四年二月八日

お悔みのお便り

東京都
中村　元

貴誌『成寿』春期号をなにげなく拝見しておりましたところ、御挨拶を拝見しまして驚ろきました。

承りますと、御尊母様には一月三十一日に御逝去あられました由、何とも申し上げることばもございません。少しも存じませんで、お悔みも申し上げませんでして相済まず存じます。

尊師はじめ御皆さまの御清祥を御覧になられまして上でのことでありまして、御尊母さまには御心残りも無きことと存じますが、御一統さまにはさぞかし御愁傷の御事と拝察致しここに謹しんでお悔み申し上げ、御冥福を祈り上げます。

御皆さま御悲嘆のあまりお疲れが出ませんように、くれぐれも御大事に願い上げます。　合掌

二月二十四日

横浜市
高野　義郎

御母堂様御逝去と伺い心からお悔み申し上げます。小生も昨年母を失いました。お寂しくなられたこと存じます。御母堂様には生前きっと貴方の御活躍をお喜びになっていたことでしょう。お疲れ

の出ませぬようお体おいとい下さい。

二月一七日

横浜市
伏見　暲

ご母堂様のお逝去深くお悔み申し上げます。
善光寺さんで方丈さんと一緒に働いていたあの頃、お母さんにお会いする度びなにがしかのおこずかいを戴いた当時のあの笑顔御温顔を思いだし、涙しきり止むあたわず。
何時の日か別れる事と知りながら、(尽くしても尽くしてもたりなかったなア、母の恩) どうしても下の句ができませんでした。
お体をたいせつに。

二月一八日

東京都
奈良　政子

御母上様御遷化の御事、「成寿」で拝見いたしびっくしました。立派なお子様方を大勢育てられ大役を果してのお旅立ちは見事というほかはありません。私共凡人にはとうてい出来ることではございません。心から御冥福をお祈り致します。
何卒御身ご大切にますますの発展と御活躍を念じ上げます。

二月二十日

横浜市
石原　孝哉

この度　新井誠心氏より御母堂様ご逝去の知らせを受け驚いております。

昨年末、荒井氏より具合が良くないことは知らされてはおりましたが、まさかこんなに早く訃報に接するとは思いませんでした。同じように老いた母を持つ身として、方丈様のお悲しみは痛いほど分かります。

どうかお心落なさらぬよう心よりお祈り申し上げます。

本来ならばご霊前に出向いて香など献げさせていただくべきですが、学年末の多忙な時期ゆえ手紙にて失礼させていただきます。

二月二十四日

大阪府松原市
佐田　依枝

御母上様御逝去遊ばされました由伺い驚いております。何も存じませず本当に申訳ございません。

八十九歳の御高齢まで御長寿遊ばされ、善光寺の益々の御隆昌を御覧になられ、どんなにかお喜びだったことかと拝察申上げております。

皆様も親孝行でいらっしゃいます由姉よりも伺っておりました。御力落しでございましょうが充分の御供養なされま様心より御冥福を

お祈り申し上げます。
先づは遅ればせながら謹んで御悔み申し上げます。
二月二十六日

川崎市
長棟　梅峰

此の度　御母堂様逝去と洩れ承り、ご心中いかばかりかとお悔やみ申しあげます。
しかしながら、九十の齢を閲された長い年月の間、方丈様が七面八臂の転法輪に活躍されるお姿を眼の当りにされ、心安らかに大往生をお遂げになられたことと推察申しあげます。
さりとて、諸行無常とは言いながら、何時何時までも長生きを希うのが人の常であります。御母堂様との永久の別離にご愁傷の一事を深くお察し申しあげ、早速ご弔問に参上いたすべきところでございますが、遅ればせながら、略儀ながらお悔やみ申しあげ、心から御冥福をお祈り申上げます。
三月四日

千葉県成東町
岩井　文子

此の度は御丁寧に御供養の御品を頂戴いたしまして、恐縮に存じております。鎌倉彫りの立派なお盆、御母堂様の想い出に大切に使

わせて頂きます。

略歴を拝見しまして御立派な御母堂様で、おしい方を亡くされたと、もう少し長生きなさってもっと御話をさせて頂きたかったとしみじみ思います。主人の母も私の母も明治三十六年生まれでございますので、丁度十歳ちがいでございます。母を亡くした時のように悲しい事でございます。

お彼岸には伺わせて頂きたいと思っております。御丁寧に恐れ入りました。

二月二十四日

「聖地」・イサーン

落合　隆・ピンダーラタノ
（バンコック　ワットパクナム）

イサーン（タイ東北地方）は乾ききっている。畑には貧弱な野菜が息もたえだえといった様子で生えていて、土の表面は砂浜のような熱を持っている。数センチ掘ってみても水分はまったくない。

ノドが乾く。一日何リットルの水を飲んだろうか。あらゆる命あるものから水分を奪い去ってゆこうとするイサーンの自然は、人間だからといって容赦はしない。水分は汗になる時間も与えられずに体から消え去ってゆく。午後の二時、三時といった時刻は四十度を超えているはずだ。毎年繰り返されるこの自然の苛酷を、イサーンの村人は生まれた時から、どうにもならない事として受け止める外にないのだろう。

「自然」＝緑豊かな豊饒。季節ごとに咲き乱れる花々。清流を渡る風。これも「自然」の一つの姿ならば、キャベツが大人の握りこぶしほどにしか成らないイサーンの自然も、「自然」のもう一つの姿に変りはない。

タイ語で「自然」は（thamma-chaat）と発音

され、日本語に直訳すると「仏法が生まれる」となる。

朝の六時、村の中心にある寺院で大太鼓が鳴らされる。しばらくすると村人たちがモチ米（イサーンはモチ米が主食）の入った小さな竹籠とおかずを持って集まってくる。ほとんどが老人と子供たちだが、それでも三十人以上にはなる。僧侶に食物を施し、食前の読経が始まると用意して来た水筒から器に水を注ぐ。これはクルワット・ナームといわれる儀式であらゆる仏教儀式にはかかせない。経文によって聖化された水は家の仏壇に上げられるのか、飲料水となるのか、いずれにせよ聖なる水として重要な意味を持っている。

この乾いた土地、イサーンで人間の命の営みに背を向けているような自然が水の儀式を通して、そのきびしい態度を和らげるならば「水」と「聖」を結び付ける意味あいはさらに強まる。

僧侶は集められた竹籠の蓋をすべて開け、にぎり固めたモチ米をおかずに着けて食べるのだが、かなり貧弱な食事だ。僧侶には特に上等な食事を出す事が習慣になっているようだから、村人たちが普段食べている食事の内容が想像できる。野菜はニラの類だけで、あとは大小の川魚を塩焼きにした程度のもの。食後に出された西瓜は生長しきれないのだろう、果肉のほとんどが白い色をしたままになっている。

村人たちは食べ残された料理を再び器にもどし、モチ米の入った竹籠を肩にかけ家路につく。百軒ほどの集落の家々はきわめて簡素な作りになっている。高床式の家は階下に牛や豚を飼い、

柱にぞんざいな感じで板を打ち付けてあるだけだ。熱風と共に入り込む砂埃で床はザラザラしている。特に部屋として仕切っているわけでもない内部にはさして家具らしいものもない。ほとんどプライバシーなどといったものはないのだろう、村全体が大きな家族のようなもので夫婦と子供だけといった家庭はないようだ。

帰るまぎわに訪ねた家は父親が近くの村で住職になっていて長男は僧侶として十年前に出家、娘の一人は尼さんになっている。誰が畑仕事をするのかと訊ねれば娘婿や近所の人が手伝うと答える。村落共同体としての生活スタイルがあるにせよ出家、得度といった日本などではきわめて特殊な事柄も、この地イサーンでは意味がちがってくる。

確かに生活の状態は貧しく見える。しかし理由はそれだけだろうか。小学校の校庭の脇にある家ではムエ・タイ（タイ式ボクシング）を子供たちに教えている。枝のような細い足でサンドバックを蹴り上げている姿は逞ましさよりも痛々しさの印象のほうが強い。都会に出て金や名誉をつかむ手段がボクサーになるか僧侶になるか、少女ならば夜の町で働く以外にはないなどときめ付けたくはないのだが。

牛を連れて来た少年が村はずれにある池の岸に一人で座り遠くを眺めている。この村ではほとんどの家で牛か水牛を飼っている。朝早いうちに外に連れて行き、草を食べさせ夕暮れ時にはもどって来る。そして村はずれにあるその池で水を飲ませ水浴をさせる。なかば消えかけた陽光の中で牛たちは、その鉛色の巨体を水に沈める。大きな動物のゆっくりとした動作にはこの世の中の秘密を少しだけ明らかにして見せてくれているような印象がある。

子供や女たち。そして少年僧までも水浴びを

しに集まってくる。牛だけではない、ここでは誰の動作もゆっくりしている。この苛酷な自然に逆らうような動作が似合わないことは、牛だけではなくここで暮す誰もが知っている事なのだろう。

牛を曳いて帰ろうとする少年が私のほうに顔を向けた。少し怒っているような、何かが不満であるような表情をしている。こんな事、好きでやっているわけじゃないんだと言いたいのか、ただ単に少年期特有の無愛想な表情を見せているのにすぎないのか。

空中に漂う砂の一粒一粒にイサーンの台地の縁から夕方の陽があびせられ、風景は一昔前の写真の様なセピア色になっている。

バンコックへ向うバスに乗るために農道を駆けるトラックの座席は激しく揺れている。トラックは乾期の今、水のまったくなくなった川床から這い上がろうと喘いでいたが、何処からか村人が一人二人と集まり、ついには五人ほどの人々で川床から押し上げた。

農道の向こう側から行列がこちらに来る。太鼓を叩き踊りながら進むその行列の中ほどには、みこし状の台に乗せられた近くの村の老僧が座っている。やせて小柄な老僧の背中はまるくなっているが顔はニコニコと笑っている。トラックが行列と擦れ違う。運転手は顔なじみらしく車を止めて彼らに声をかけ、村人と同じ身振りで踊って見せている。

車は再び走り始める。私は、私の気持の底が何かザラザラしているのを感じていた。

この風土は私にとってそれほど異質なものなのだろうか。いくら水分を補給したところで、このザラザラした印象を押し流すことはできないようにも思える。

イサーンの自然。仏法が生まれる聖地。

泰国行脚日誌

水野克彦

一九九一年七月泰国WAT PAKNAMに於いて南方上座部仏教の得度を受け、泰僧侶として九カ月の時を泰の僧院にて過ごす事が出来ました。

WAT PAKNAMに於いての雨安居では、泰語もわからず、南方上座部仏教の僧侶についての知識も少なくただひたすらに回りの様子を見て感じ動いていた事を思い出します。しかし、この安居の三カ月間で泰僧侶の生活様式が一部ではありますが、身についた様な気がします。

安居開けには、タイ北部の都市Chiang Mai(チェンマイ) Chiang Rai (チェンライ) Mai Sai (メーサイ)泰南部ではKrabi(クラビー)へ短期間ではありましたが、一人行脚を行なって参りました。BANGKOK(バンコク市内)の僧院生活と地方の僧院生活を比べて見て一番に感じたことは、「地方に於いては、大変素朴で質素な生活をしている」という事を一番に感じました。

Chiang MaiのWAT Phra Sing (ワットプラシン) に於ては、トカゲ (体長六〇㌢) のま

る焼きをメーチ（尼僧）さんが料理してくれた事を始めとし、Chiang Rai WAT Prakeo（ワットプラケオ）では、日本人の僧侶が寺に来たと言う事で昼の食事のおかずを一品から二品へと急遽変更していただいた事、又、WAT Phrathat Doi Suthep ワット・プラタート・ドイ・ステープ）WAT Doi Wao ワット・ドイ・ワオ）WAT Keew Koravaram（ワット・ケェオ・コォラァバーラン）と各寺に於いて宿泊させていただいた際にいろいろな心遣いをしていただき、日本人でありながら南方上座部仏教の得度を受け、黄衣を纏っている私に対してタイの人々、僧侶の方々は、タイ人僧と同じ様に扱って戴き、また大変親切に指導していただいた事に私自身、タイの仏教の根強さ信仰心の強さに心を打たれ、また、日本の仏教に失なわれつつある何かを感じた様です。もし日本国内でタイ人僧が行脚していたら日本の人々はどの様に感じどの様な対応をするでしょうか。タイの人々の信仰心並びタイ仏教と言うものの生活様式化は、他の仏教国に負けないすばらしい物を持っている様な感じがします。それが何であるか未だ私には理解しがたいと言う事が現状です。

WAT PAKNAMでの僧院生活が七カ月八カ月過ぎた頃、私の中で一つの考えが浮び上がりました。「泰国内を日本の禅僧が行脚・修行したら、タイの人々、僧侶はどの様に感じ、どの様な対応をするだろう。」と言う考えです。

約二カ月の間毎晩の様に考えました。上座部僧侶と禅僧とでは相違点が多すぎるからです。泰僧侶の黄衣（法衣・三衣）に対し、我が曹洞宗の法衣は黒色しかも三衣にあらず。泰僧侶が二二七の戒律を基本に僧院生活を送っているのに対し、禅僧の頼る所は人間性（僧侶自身）の本質と個人の判断に頼るものである。

また日本僧が使用している作務衣をどの様に説明するかである。日本では法衣の一種と見做されているが、タイ人・タイ僧侶から見れば作務衣は法衣にあらず私服と見る為である。いろいろな面で異質な点があり困難極まる事は始める前からわかっていたからです。タイ僧侶の姿のままで行脚すればいろいろな面で好都合な事は知っているがそれでは、戒律の問題で行動範囲が決められてしまう事。また、一番に他の仏教国の僧侶姿を少しの人でも良いから知っていただく事もタイでは必要な事ではないかと考えました。黒田方丈・育英会の皆様・善光寺の壇信徒の皆様のお顔が浮かび上がり、今日こうして泰僧侶として生活出来ているのも皆様のおかげではないか、「なぜ、そんな事を考える」「なぜ、いまさら日本の禅僧として行脚する必要がある」と私の中では反論も数多く出ましたが、泰で育英生として生活する一年間はこれからの僧侶生活の中で二度とない時間であり、他の仏教を簡単に受けつけない泰国で禅僧として行脚する事は自分自身との戦いでもあり、また、タイの人々にも何かを感じ取っていただけるチャンスではないかと思い、残り二カ月間を日本の禅僧として行脚する事を決意いたしました。

泰僧侶の身分を捨て日本僧として行脚する事は、一歩方向を踏みはずせばただの旅になってしまう危険性を持っていますが、黒田方丈・育英会・壇信徒の皆様の期待に応えられる様、未熟者の私がどこまで出来るかわかりませんが、日本の禅僧としてはじない様がんばりますので宜しくお願い申し上げます。

平成四年三月十八日気温三十七度。ついに日本の禅僧として行脚する日がやって来た。

行脚の第一歩として、Kanchanaburi(カンチャナブリー)に足を進めました。戦争中「泰緬

鉄道」建設に駆り出され病気や栄養不足で亡くなった、連合軍兵士の眠っている地である。日本では戦争体験の風化が叫ばれているが、この地を訪れる人々の中には当時連合軍の一員として共に戦かった人々、又旧日本軍として泰緬鉄道の建設にたずさわっていた人々の顔を目にします。Kanchanaburi War Semetery・Chungkai War Semetery の墓石数を合わせると八六七八にも及びます。いまでは当時の面影は少なくなっていますが、整然と並ぶ墓石に目をやると当時の過酷な状況を物語っている様に感じられます。

この地では戦争中、日本軍によって建てられた慰霊塔を中心に法要・供養を行ない、連合軍共同墓地に足をはこび、八六七八体の墓石一つ一つに御経を上げ供養する事が目的です。三月二十四日現在三五〇〇体の供養が終わり残り、五一七八体については四月上旬から行なう予定です。

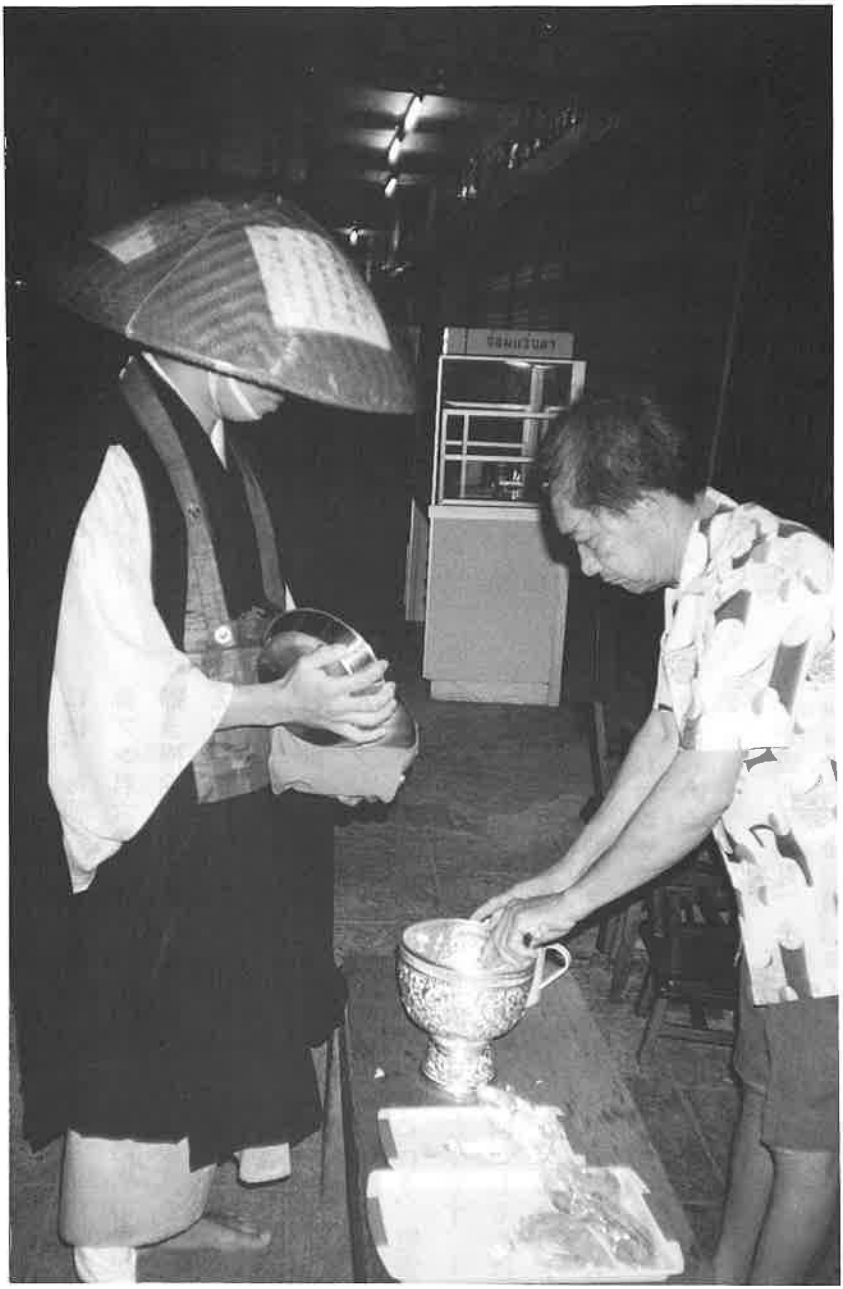
日本人によって建てられた慰霊塔は、一年に

慰霊塔と管理にあたっているトンカンさん

一度（三月に）泰国日本人会の皆様の手によって法要が行なわれています。慰霊塔の管理には、タイ人のトンカンさん七六歳のおばあさんが行なっています。毎朝八時～夕方五時まで一日中慰霊塔の敷地内の木陰の下で参拝の人々が来られるのを待っておられます。トンカンさんは日本人が慰霊塔に来ると、人数分の線香に火をつけ参拝者の方々に手渡しています。単純な事だと感じるかもしれませんが、毎日毎日、このタイの暑い日差しの中をもう何十年も続けておられる事に対し、私自身驚きを隠せませんでした。

トンカンさんに雨季の時は、どうするのですかと訪ねたところ、トンカンさんは「雨がやむまでトイレですわっているよ。」と言われました。日本の皆様にはタイの雨季の雨は想像もつかないと思われますが、雨と言うよりもバケツの水を頭からかぶった様に降ります。時間にすれば一時間～二時間位ですが、雨季の期間（約三カ月間）ほとんど毎日の様に降ります。又、慰霊塔には、毎朝六時には近くに住んでいる子供、通称プン君六歳、カアー君七歳の二人の男の子が掃き掃除に来ています。このことは観光で訪れる日本人の人々の目には触れない蔭の奉仕となっています。この様に旧日本軍によって建てられた慰霊塔は泰国日本人会の皆様、トンカンさん、プン君、カアー君、の人々によって管理されています。この現状も、慰霊塔に行き、慰霊塔にて寝起きをしてはじめて知った事です。トンカンさん、プン君、カアー君に何かしてあげたいのですが、今の私に出来る事は、掃除の手伝いと、お勤めをする事が精一杯の事です。ちなみにカンチャナブリに於いて日本僧の私は、僧侶にあらず「忍者」と呼ばれていました。

平成四年三月二十四日、カンチャナブリの慰霊塔から一路、南部タイの町クラビーに足をは



タイ国で日本僧の姿で托鉢をする水野師

こびました。バンコク市内からバスに乗り約十四時間で目的地クラビーに到着いたしました。この町には以前、泰僧侶の姿で行脚に来たことのある町でしたが今回は日本の禅僧の姿です。町の人々は私を「何者だ」と言う様な目で見られている事が一番に感じ取られました。子供たちは以前に泰国内で放映された漫画の「一休さん」と私が一致したらしく、私の事を「一休さん」と呼びましたが、大人たちはやはり「忍者」「侍」「腹切り」と僧侶からかけはなれた言葉で私の事を話題にしていた様です。クラビーのWAT Keew（ワットケェオ）にての目的は以前からお付き合いのあるアーチャン（先生）プラ・パラ・ス・テェープ師に協力をしていただき、泰僧侶と日本禅僧のコンビでクラビーの町を托鉢して人々に日本僧を見ていただく事が目的でした。寺に宿泊する件については住職プラ・シュタアー・ウ・ウイスィミス師からすぐに許可が出ましたが、托鉢又は食事の面に関しては上座部と禅宗とでは異なると言う事からなかなか許可が出ませんでしたが、アーチャンの働きかけでクラビーの町を托鉢する念願がかないました。アーチャンに日本僧の応量器（頭鉢）を見せた所、小さすぎてだめだと言う事で、タイ式の鉢を貸していただき、又、托鉢の際はタイ式にはだしにて行なう様に指導されました。

托鉢を終えた後に私に浮かんだ思いは「禅僧としての私にタイの人々は手を合わせ、タイ僧侶と同じ様に供養してくれた」事に対し宗教者としてのよろこび、そして一条の光の様なものを感じた様に思われます。日本禅僧として行脚を始め二週間、まだ始まったばかりですが、残りの一カ月半を精一杯に精進弁道にはげむしだいです。

（平成四年三月三十一日）

インド留学記

その8

忘れえぬ人々 (1)

大学教授
岩沢 助
金島

インドの女仏教学者ケールさん

私が西インドのプーナ市にあるプーナ大学に留学したのは、プーナ大学と名古屋大学との第二回交換留学生としてであったが、一九七四年一月に第一回の交換留学生としてインドからはじめてやってきたのが、ケール（Citralekha kher）さんだった。当時はまだ留学生会館などなく、当時修士課程で私の同級生だった日野氏の下宿先にホームステイのような形で下宿していた。

また、今のように総合言語センターに日本語教育の専門家がいて授業が行われ、留学生はまずそこで集中的に日本語の訓練を受けてから専門の授業に出る、というような体制も整っていなかったので、主に大学院生がよってたかって日本語を教えるというような状態だった。日本人学生の方はインドに主にサンスクリット語

（梵語）を習いに行くのだが、では名古屋大学のインド哲学科に来るインド人の方はいったい何をしに来るのかというと、主に日本語とチベット語を習いに来るのである。

仏教の研究も大乗仏教になると、もともとサンスクリット語で書かれていたものが、中国語（漢文）やチベット語に数多く翻訳されており、なかには漢文やチベット語では経典が残っているが、もともとのサンスクリット語のものは現存しないなんてものも多いし、サンスクリット語で残っている写本やその写本をもとに出版されたテキストよりも、漢訳のもののほうが時代的に古かったりするので、ちゃんと研究しようとすると、どうしてもサンスクリット語のものと漢文のものとチベット語のものを比較対照しながらではないとまずいということになるのである。

ところがインドはなんといってもヒンドゥー教の国なので、インド哲学は盛んでも仏教学はそれほどでもない。パーリ語やサンスクリット語で仏教の経典や論書を読むことはあっても、漢文やチベット語の資料まで扱える人はごく例外的でほとんどいない。もちろん大学の授業でそんな科目があるわけもない。

そんなわけでインドの仏教研究者は、日本に来てまず日本語をやり（そうしないとなんといっても日常生活での不便が大きいので）、日本語で漢字もできるようになると漢文へと進み、その一方でチベット語も学習していくということになるのである。こんなふうにして、漢文とチベット語の両方ともマスターしてインドに帰れば、サンスクリット語はもともとよくできるのだから、鬼に金棒ということになるのだけれど、一年では残念ながらそううまくはいかない。表音文字の国から来た人にとって、漢字という表意文字の世界との距離はあまりにも遠いよう

で、日本語の日常的に用いられる漢字の世界まではそこそこなんとかなっても、すべて漢字が並んでいる漢文の世界まではとてもとてもということで、同じ表音文字の世界であるチベット語が一年でなんとかなれば上出来というところで帰国ということになるのである。

ケールさんは留学途中でお父さんに不幸があったりして、予定より早めに帰国することになったが、インドに戻ってからも漢字の世界への熱意にあふれており、私と夏目漱石の作品などを読んでいた。この調子で漢字をマスターしていけば、サンスクリット語もチベット語も漢文もという、三拍子そろった本格的なインド仏教学者が、定年退官後プーナに住んでおられ日本人の仏教学者もしばしばその指導を受けていた長老ゴーカレー先生以来、ひさかたぶりに出現するはずだった。しかし残念なことにケールさんは、四十代半ばで、子宮ガンのために亡くなられてしまったのであった。

インドの女文法学者バテー姉御

インド人にとってはハンディーの大きい仏教をやっていたケールさんとほぼ同世代で、ケールさんとは対照的にインド人が強い分野の一つであるサンスクリット古典文法学をやっていたのが、バテー（Saroja Bhaṭe、現プーナ大学サンスクリット語プラークリット語学科長）さんだった。一見比較的内向的なケールさんに比べて、バテーさんは外向的な姉御肌の人で、私はひそかにバテー姉御と呼んでいた。当時の学科長がジョシ（S.D.Joshi）先生という文法学の大家（この人は後年国民栄誉賞ならぬ「国民的学者」（National Pandit）の称号まで授与された）であったことも手伝って、プーナ大学には文法学を研究する学者や研究者・大学院生が多く、マイナーな仏教学をやっているケールさんに比

べて、バテーさんはまさに主流派をゆくという感じだった。

でも二人はとっても仲良しで、プーナ市の中央の小高い丘パールヴァティー・ヒル（ここにはシヴァというヒンドゥー教の中心となる神様のお妃である女神パールヴァティーの祭られたお寺がある。丘の上まで急な石段を登りきるのがなかなかしんどい）に、お弁当もってピクニックなんてことをよくやっていた。私も何度かお供したものである。

このバテーさんがサンスクリット語で劇作をしたりする人だなんてことはつゆ知らずに、英語でいうと中学生程度のサンスクリット作文を習っていたのだが、留学後一年足らずのころだったろうか、突然ラトナギリ（プーナから北東へバスで七時間位、アラビア海沿いにあり、マンゴーの産地。またインド独立運動の闘士ティラクの生まれたところでも有名）に行って、高校生を前にサンスクリットでスピーチをしてこいと言われたのであった。

「何分位やるんですか」とおそるおそる聞くと、簡単に一時間位と言われてしまった。そればかりか、一泊二日で初日は英語で一時間、二日目はサンスクリットで一時間というではないか。英語で一時間はなんとかなるにしても、サンスクリットで一時間とはね―とは思ったものの、当時すでにバテーさんの個人授業料はタダにしてもらっていたという恩義があったのと、旅費・宿泊費相手持ちで謝礼までるという好条件につられて、ついつい引き受けてしまったのであった。

「日本人の見たインドの印象」というような題で作文し、バテーさんにしっかり添削してもらって当日に備えた。ラトナギリでは英語が喋れないという学僧に出迎えられ、道々たどたどしいサンストリット語で会話しながら会場に向

かった。初日は「日本の仏教の歴史」ということで英語で話した。だが、サンスクリットのスピーチの準備に全精力を注いでいたのと、英語なら原稿なしでなんとかなるだろうという見通しの甘さが見事に裏目に出て、自分でも何を喋ったのか分からないほどメロメロだった。壇上の隣に座っていたインド人ゲストには、「今日ここに出席したのは時間の無駄だった」という正直かつありがたい御講評を全員の前でいただいてしまうは、主催者には「日本人が英語でスピーチするということはわれわれがドイツ語でスピーチするようなもので云々」という苦しいフォローをしてもらう羽目になるはで、とにかく散々だった。

さすがに自分でも青ざめて宿舎に帰り、明日もこの調子だったら舌かんで死んじゃいたいってことになってしまうというわけで、ひたすら宿舎にこもり用意の原稿の暗記に努めた。そのかいあって翌日は好評だった。ほっとして帰路についたが、結局はラトナギリまで行きながら、バス停と宿舎と会場以外はどこも見ないでプーナに帰ってきたのであった。

ヴェーダーンタおじさんラフルカル先生

ラフルカル（V.G.Rahurkar）先生は、褐色の布袋さんのような体型の人で、いつも人なつっこくニコニコと笑っていた。私は留学当初からこの先生にヴェーダーンタ哲学（ヒンドゥー教の神学の基本となっている哲学）を習っていたので、ひそかにヴェーダーンタおじさんと呼んでいた。

留学後半年ほどたった頃だったろうか。大学にいくとみんながなんとなくざわざわしていて、部屋に行ってもいつも机に向かっているラフルカル先生がいないのだ。約束の授業の時間なのにどうしたんだろうと思ってみんなに聞い

てみると、なんと逮捕されたというではないか。「ええー、なんで、なんで」と聞いてみると、次のような事情だった。

当時、インディラ・ガンジィー首相の選挙違反の裁判が最高裁で行われていて、その判決がインディラ・ガンジィーに不利な形ででたのであった。そこでインディラは即座に全国土に非常事態宣言を発令し、政敵をほとんどすべて逮捕してしまうという手にでた。ラフルカル先生は、現在のBJP（インド・ジャナタ党）を支援するヒンドゥー教下部組織のRSS(Rastriya Svayamsevak Sanga)のプーナ地区組織の代表者ということで、逮捕されたとのことであった。

「ええー?、あのいつもニコニコ笑っている、人のいいヴェーダーンタおじさんが、そんな大物だったのー?」っていうのが、外国人である私の最初の感想だったが、インドの学生たちの受けとめ方は当然ながらもっと深刻なものだった。「物言えば唇寒し」という暗い雰囲気がただよっていた。

ラフルカル先生は結局一年間刑務所暮らしをすることになるのだが、その刑務所はイェルワダ（Yervada）刑務所といってプーナ市の郊外に位置しており、インド独立運動の時には独立運動の闘士たちが牢につながれていたところだそうで、変な言い方だが由緒ある刑務所とのことであった。

逮捕後しばらくして、ラフルカル先生の指導を受けていた博士課程の学生に、「博士論文の指導を受けに刑務所に行くんだけど、一緒に行ってみない」と言われて、「そんなことできるのー?」と思いつつ一緒に行ってみた。なんだか陣中見舞いって感じで、無責任な話しだけれど、ウキウキした気分だった。

刑務所の受け付けを通り、面会室で先生に会

った。やつれもせず元気そうで相変わらずのかっぷくだった。「毎日どうしておられるんですか」などと間抜けなことしか聞けなかった。すると先生は答えた。「学生運動で捕まっている若い子がいてね。捕らわれの間にインド精神文化の源流であるウパニシャッド（梵我一如を説くインド古代の聖典）を勉強したいというので、毎日教えています」と。インド独立運動の時にも何度か投獄されているとのことであったが、それにしてもその泰然自若ぶりになんだかとても感動して帰ってきた。

その後留学中は先生の授業を受けることはもうなかった。先生はその後プーナ大学を定年で退官の後、バンダルカル東洋学研究所におられたが、一九八七年十一月十三日に六十八歳で亡くなられた。晩年は奥様を先に亡くされ寂しい日々だったとうかがっている。御冥福を祈ります。

明快で楽しい授業ジョグ先生

ラフルカル先生が逮捕されたあと、私にヴェーダーンタ哲学を教えてくれたのがジョグ（K.P.Jog）先生だった。結局一年間ほどで修士課程の授業ではシャンカラ（七〇〇―七五〇年頃の哲学者で、梵我一如の知識による解脱を説く。インド最大の哲学者と称されている）の『ブラフマ・スートラ註解』を、個人授業ではラーマーヌジャ（一〇一七―一一三七年頃の哲学者で、シャンカラを批判して、唯一の神への帰依による救済を説いた）の『神聖なる註解』を読んでもらった。

とても教えるのが好きな先生で、普通は個人授業のときには一時間五ルピー（一五〇円）払っていたのだが、ジョグ先生はいっさい謝礼を受け取らなかった。「教えるのが教師の仕事です。それで給料をもらっているのだから、それ

以外には必要ありません」というのが先生の言葉だった。

先生の専門は第一にはヴェーダ（インド最古の宗教文献）で、第二がインド修辞学、そしてヴェーダーンタは第三の専門領域だった。最初は週に三日あとではほとんど毎日のように個人授業をしてもらったが、本当に教えるのが楽しいという感じで教えてくれた。授業でもインドの学生はほとんど予習などしてこないので、個人授業で私が予習してきているのを見ると、いつもひやかし気味にほめてくれた。

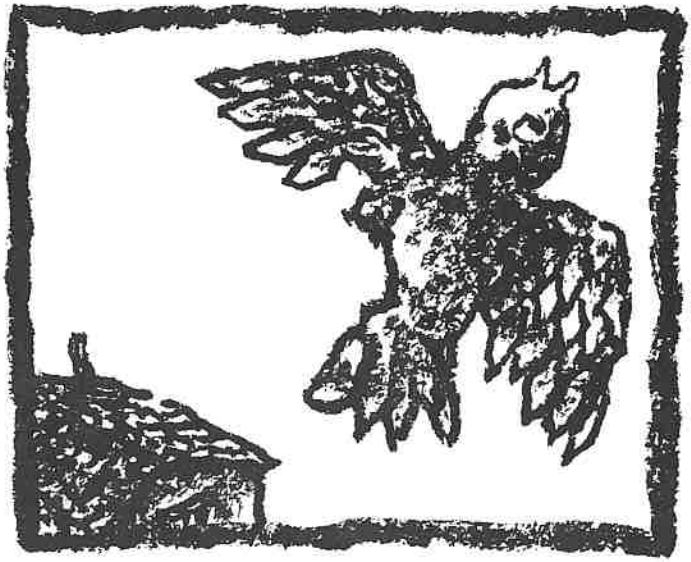
修士の授業は、期末試験で『ブラフマ・スートラ註解』の三分の一が試験範囲とマハーラーシュトラ州レベルの基準で決まっているとのことであったが、授業はいっこうに進まなかった。最初の序の部分（チャトウフ・スートリー）が大事だからと半年近くかけて徹底的にその箇所を教えてくれた。インドの学生は、こんなことで試験が終わるのだろうかとイライラしていた（結局最後には週二回の授業を週四回にしてなんとか試験範囲は終了した）のだが、私にはもってこいの授業だった。そしてその説明はいつも明快で、授業が終わると、予習の時には混乱していた頭がスッキリするような気がしたものだった。そんな訳で、修士の授業も個人授業もほぼ一年間とても楽しかった。私が帰国後修士論文でシャンカラを選んだ理由の一つには、このときの授業が楽しかったということがあるような気がするのである。

こんな先生だったから、学生にはとても人気があった。それも何故か女子学生に人気があった。先生を中心に指導生たちが、プーナとボンベイの中間にある有名な仏教石窟寺院カルラーにピクニックに行ったことや、授業中に何故かみんなが歌を歌うことになり、音痴の私はお経でごまかしたら、その節はサーマ・ヴェーダを

唱えるときの節と似ていると言われたりしたことが、とてもなつかしい思い出である。

先生はその後、プーナ大学を定年でやめられたあと、デッカン大学のサンスクリット語辞書編纂局の主任編集員を勤められたのち、現在ボンベイのアジア協会とインド学問研究所（Bharatiya Vidya Bhavan）で元気に働いておられる。また、私の次にジョグ先生について、私とは違って本格的に博士課程でジョグ先生の指導のもとで博士論文を仕上げた日野氏（現岐阜薬科大学助教授）と共著で、現在も次々と本を出されており、ますます健在である。いつまでも御健在をお祈りします。

第一回目の交換留学生としてはじめてプーナ大学に行った清原さんが残していった最大の遺産は、大学と寮における多くのインドの友人たちであった。日本人学生自体がまだプーナ大学全体で一人という物珍しさと、清原さんの社交的性格とが重なって、私が日本人だと分かると、「I am a freind of Mr. Kiyohara」という人が続々と現れてきた。そのなかで私の最良の友人



となったのがシャランギ（A.C.Sarangi 現オリッサ州ウトカル大学講師）であった。ひとなつっこくて面倒みのいい人で、同じ寮に住んでいるという気楽さもあって、「困ったときのシャランギ頼み」という状態であった。

ちょうどそのころ、寮の菜食料理三ヶ月ほどで痔になり、体力が落ちて風邪をひきやすくなっていた私は、とにかく菜食料理はあきらめて、弁当屋から肉食の弁当をとることにした。ダッパと呼ばれるアルミの円筒形のカン五段重ねのそれぞれに、ご飯、肉と野菜のカレー煮、ヨーグルト、ダルなどの入ったものである。一日二食一月で寮の食費の約倍の二〇〇ルピー（六〇〇〇円）で、月末払いだった。

弁当にして三ヶ月ほどしたとき、いつも弁当を運んできてくれる男の子が突然やってきた。今月から半額先払いになったので一〇〇ルピー先にくれというのだ。何の疑いもなく払った。ところがそれっきり弁当が配達されなくなったのだ。そこで「困ったときのシャランギ頼み」である。シャランギと一緒にプーナ駅近くの弁当屋に行った。そこは旦那さんが気車の機関士で奥さんが弁当屋をやっているとのことで普通の民家だった。

弁当が配達されなくなったこと、男の子に一〇〇ルピー先払いしたことを話した。すると奥さんの話しでは、男の子はやめて田舎に帰ったとのことで、男の子からは私が弁当をやめることにしたのだと聞いているとのことであった。そこで交渉が開始された。まずは、監督者責任の問題ということで奥さんのほうから一〇〇ルピー返してもらう交渉である。こちらの代理人はシャランギであちらの代理人は機関士の旦那である。最初のうちは英語だったので内容は分かったが、なんだかこちらが押され気味だった。途中で突然シャランギがヒンディー語で喋り始

めた。何を言っているのか皆目分からないが、なんだかこちらに有利に展開しはじめたような雰囲気である。それで結局は、旦那の運転する汽車に乗せてもらって、男の子の田舎まで取り立てに行くことに決まった。

後でシャランギにヒンディー語でなにを喋っていたのか聞いたら、「あのときは、遠い日本からやってきた学生にインドでこんな理不尽な目に会わせたまま帰国させるのはインドの恥ではないか、と愛国心に訴えていたからね。そういうときはやっぱりヒンディーなんだよね」ということであった。「ふーん、さすが」と感心してしまった。

後日旦那の運転する汽車に乗せてもらって、シャランギと二人取り立てに向かった。タダ乗りなので客車というわけにはいかず、機関車の後ろの荷物置き場のようなところだった。うっかりあの男の子の田舎がどこかなんてことは聞いてなくて、なんとなく近いんだろうと思っていたのだが、夜の十一時に汽車に乗って着いたのはあくる朝の六時だった。インドは皆早起きなので、そのまま男の子の家に向かった。男の子との交渉はヒンディー語だったので、シャランギの活躍と男の子がだんだんションボリしてくるくらいしか分からなかったが、とにかく分割払いの弁当屋経由で全額返却してもらうということに決まった。帰りにシャランギにあの男の子があの金を何に使ったのか聞いたら、男の子だと思っていたのがもう二十歳過ぎで女に貢いだとのことであった。分割払いの返済の約束が現実に実行される確率はほとんどないだろうとは思いつつ、まあ女に貢ぐなんて気のきいたことに使われたのなら本望かなんて、訳の分からないことを思いながらプーナに戻ってきた。結局、案の定あの一〇〇ルピーが私の手元に返ることはなかったのであった。

インド留学記 その4

インドの学校事情

東方研究会専任研究員
立正大学講師 高橋堯英

デリー大学の学生、いや、インドの大学生に、「将来の夢は？」と尋ねてみて下さい。彼らのほとんどの口から、「IAS」という答えが返ってくるはずです。

「IAS」とは、例年一〇〇〇人程募集される国家公務員採用の為の上級職総合統一試験の俗称で、イギリス統治下の「インド文官制度」(ICS)を継承するものです。興味深い点は、この総合職試験の成績結果によって、行政官(Indian Administrative Service)、上級職警察官(Indian Police Service)、外交官(Indian Foreign Service)、その他、税務官、税関吏、インド国有鉄道管理官などに採用される点であります。これらの高級職のなかで、学生たちの憧れの的が先の行政官職で、彼らは、数年のうちに一地域の司法・行政権を有する行政長官(Magistrate)となったり、後に内務省などで重責を担う官僚となるのです。

この試験の準備は、まさに一年間のデスマッチ。手元にある一九八七年の報告書によりますと、気が遠くなるような猛暑の六月十四日に行われた一次試験に、学部を卒業した二一歳から

三三歳までの十四万九千六百三十一人が願書を提出し、書類選考や他の個人的諸事情のため、実際には八万三千四百三十一人が受験しています。英語／インドの諸言語・一般教養・専門科目から成るこの一次試験はマークシート方式で行われ、この試験で選抜された一万百四十七人が十一月に行われた本試験に挑戦する権利を得ました。主に一般教養と専門科目二科目の論述問題で競われるこの本試験には、九千三百人が受験し、その結果が三月二十四日に発表され、一千七百二十四人が四月十六日に行われた口頭試問に進む資格を手にしています。この報告書では、この年の実際の採用人数は明かされていませんが、そこに述べられていた前年度のケースでは八百五十五人が最終的に採用されております。

一九八〇年頃あった一次試験を行うという新制度の導入以前は、デリー大学の史学専攻科のカリキュラムが、そのまま、この選抜試験の歴史コースの科目と一致しておりました。ですから、五〇人ほどいた私のクラスメートも他聞に漏れず、ほとんどが、この試験合格を目指して学部の講義を受け、一年生の頃からトピック毎に二〇〇〇ワード位（レポート用紙五枚位）のエッセイを準備するという作業をしていました。学部の進級試験の準備が、即ち、この試験準備であったのです。

エッセイやノートの交換などの試験準備は、学生の出身地や出身校によるグループ単位で行われるのが常でした。特に、気が付いたことは、学生の間で、彼らの出身地が大きな意味を持っていたことでした。「あいつはビハリーだ（ビハール州出身者）。」「奴らはボング（ベンガル州出身者）だ。」「所詮あいつはオリヤー（オリッサ州出身者）だ。」「おい、サウジー（英語のsouthから派生させたスラングで南インド人の通

称)。」などという言葉をよく耳にしました。ノートの交換のみならず、日々の行動も大概がこのグループ単位。一言でいえば、「仲良しグループのみんなで、良い点とりましょう」といったような試験準備なのです。その反面、彼らは、無意識のうちにも、他のグループに対して対抗意識を強く抱いていたようです。

当時、私の学年では、特にラージャスターン州のジャイプル市出身者が優勢で、通称「ジャイプル・ギャング」なるものを構成していまし

た。修士コースの学生から学部の一年生までのラージャスターン州出身者二〇人くらいが、構内の喫茶店でテーブルを囲み、ワイワイガヤガヤ騒ぎながらお茶を飲んでいる様子は、何故か一種異様なものです。試験前には先輩から後輩にノートが渡されることもあったようです。運動部のクリケット部などは、このジャイプル・ギャングの巣窟のようなもので、正選手・補欠など、ほとんどを彼らが占めていました。

インド社会の問題点の一つであるリジョナリズム（地方中心主義）がキャンパスライフにも反映されていたのです。まさに、インド社会の縮図そのものです。私個人はと言いますと、最初はどのグループにも入れてもらえていなかったようです。しかし、一年くらいたって、各々のグループに一人二人は知合いが出来てくると、その知合いを通じて各グループの客分格のような扱いをされるようになりました。また、同時に私を媒介にいろんなグループが接近する、といったような現象が起こってきたのです。当時を思い出す度に、彼らが、外国人である私を融合作用を進める触媒として利用していたような気さえします。

「IAS」に話を戻しますが、彼らは、学部卒業までに集めた膨大な量のエッセイを暗記し、修士課程で修めた情報を加味して、与えられた三回のチャンスに将来を賭けるのです。行政官職に選抜されさえすれば、二十代前半の若者が地位と莫大な権力を手にすることが出来るだけに、そして家族の誇り、いや、一族の誇りとなりうるだけに、彼らは、一族の期待とプレッシャーを一身に受けていたようでした。私がそれに気が付いたのは、もう少し後になってからのことですが、何れ御紹介したいと思います。

（つづく）

聖地巡礼―ケダルナート

東方研究会専任研究員
清　水　晶　子

ケダールナート寺院は海抜三千五百八十メートルの高地にあり、灰色の切り石を一つ一つ積み重ねて建てられている。ヒンドゥー教の寺院にしては単色で、簡素ながら精巧な彫刻が外部の壁面上部を装飾していて、重厚な風格を見せている。寺院の背後には、万年雪をいただいた六千九百四十メートルのケダール峰が真近に迫っている。

ヒマラヤの聖地ケダールナートの天気は変わりやすい。ガイドによれば、ケダールという語には「ぬかるんだ所」という意味があるという。その言葉通り、午後からはずっと霧雨が降り続き、雪山のふところにいることを肌で感じさせるように外気温が一気に下がった。

夕方の礼拝は六時からはじまる。ケダールナート寺院のご神体は、シヴァ神の住居とされる

カイラーサ山を形どったような自然の岩である。献火の儀式の後、お寺の扉が開かれ、待ちかねた巡礼者たちは先を争って中へ押し寄せて行く。まるで初詣での光景を見るような熱気に包まれている。ご神体は、うすいピンク色の絹地に銀糸の刺しゅう飾りがほどこされた覆いが掛けられていた。ここでもご神体の写真を撮ることは禁じられていた。

恐らく一生に一度の機会であろう。功徳を積むためにはるばる辺地まで困難のともなう山道を登って来た人々は、雨の降る中素足に伝わってくる石の床の冷たさもいとわず、シヴァ神と見える至福の瞬間を迎えているのである。ご神体との対面を心に刻み込むかのように、人々は何度も何度も礼拝の列に並んでいた。

夜になってようやく雨もやみ、星明りをたよりにロッジまで戻った。夕食もロウソクをともして摂る。聖地には文明の利器はふさわしくな

いと納得し、ロッジで用意してくれた火鉢で部屋を暖めてから床についた。

南インドのバンガロールから来た母子は、翌朝六時のお寺でのプージャー（ご祈禱）を申し込んできたという。五人までは列席が許可されているから一緒にとの招待を受けた。そしてプージャーに参加する前に、必ず沐浴をして身を潔めてくるように指示された。ケダールナート寺院でプージャーをしてもらうことは、特別の功徳を積むことになり、そのためには高額のお布施を払わなければならないと後で聞いた。

この母子は印刷屋を経営していて、巡礼のために二週間の休暇をとってきたという。五十代半ばのメータ夫人は、元気なうちにかつて両親が巡礼したケダールナートを訪れたかったと話してくれた。ご両親の時代には、私達がリシケーシから二日がかりで辿りついたバス道路も整備されてなくて、料理道具や使用人と共に、カ

ケダルナート寺院と参道

ゴや馬に揺られて赴いたという。当時は費用の点でも日数の点でも、生活にゆとりがなければ当低聖地巡礼もままならなかったようである。

ロッジで沐浴用のお湯を沸かしてもらうのに手間どって、プージャーの開始に少し遅れた。早朝の寒い中、入口の床に座ってハーモニウム（手押しオルガン）にあわせて聖歌をうたっている信者たちがいた。お寺の中には、昨夜の絹布がとり払われた。山すそが一メートル余り、高さ七～八十センチの黒っぽい色のゴツゴツした表面の岩山が安置されていた。これがご神体の姿である。

すでに一同は岩の周囲に座し、一人のバラモン僧によってプージャーがとり行われていた。司祭は花・ギー（バター）・うこんの粉・米を岩に向けてふり注いだり、ガンティ(小さなベル)をならしながら、マントラ（真言）を唱え続けている。最後に、聖歌をうたいながら土器に油を入れた灯明を置いたお盆をご神体の前でかざす献火をして、二十分ほどのプージャーが終わった。

プージャーのあと、司祭が参列者の一人一人の額に、黄色と赤の大きな祝福の印(ティラク)を付けてくれた。参列者は棒げられたギーでへったりした岩に合掌し、恭しく額をこすりつけて、プージャーを果たしたことの喜びとシヴァ神との一体感に陶酔しているかのようであった。

ヒマラヤの聖地でのプージャーは、いつも目にしていた雑踏と喧騒のまっただ中で行われる活気にあふれた町中のお寺のものとはまた一味違って、鈴の音やバラモン僧の声が澄んだ空気に共鳴して、シンプルな中にも厳かな雰囲気に満ちていた。巡礼者たちから託されたそれぞれの祈りを受けとめているかのように、ケダールナート寺院は静かに佇んでいた。

神話のいきづくヤムナー河畔（その三）

東方学院専任研究員　及川弘美

ヤムナー河畔には、まだなお、数カ所にクリシュナ神話にまつわる聖地があります。しかし、それらについてはまたの機会にお話することとして、今回はヴリンダーヴァンの町中に目を向けてみましょう。

いちばん最初に述べましたように、ヴリンダーヴァンはクリシュナ信仰の聖地として、一年中インド各地からの巡礼者で賑わっています。この町の人口は約二万人ですが、町中を歩いているとその倍くらいは住人がいるようにみえます。はじめのうちは、こんな小さな町にずいぶん多くの人々が住んでいるんだなあ、などと感心していたのですが、なれてきますと、この町の住人ではない人々が大勢いることが、わかるようになりました。たとえば、「バンダルデーコー、バンダルデーコー（猿に気を付けなさい）」と叫ぶガイドらしい人の後を付いて行く一団、こぼれそうなほど人間を乗せているインド独特のあの大きな自家用車、そしてこの町では決して見られないような柄のサリーを身にまとった女性たちなどがそうです。巡礼者たちは家族や個人で来る場合、またはバスで集団でやって来たり、あるいは高名な僧侶が大巡礼団を率いて遠方からやってくる場合など様々なようです。

わたしが滞在していた信徒会館では、南インドのバンガロールから千人もの大巡礼団がきてそのうち半分の五百人が、二晩を過ごして次の巡礼地を目指して去っていくということがありました。

さて、このように巡礼者で賑わっているヴリンダーヴァンの町ですが、通りを賑わせているのはなにも人間だけではありません。インドを旅行されたことがある方なら、車の走る通りに牛なども平然と歩いているといった光景を一度ならずも目にしていることと思います。ここヴリンダーヴァンでは牛どころか犬、猿、豚まで市民権があるかのように至る所にいるのです。とにかくここに住んでいる人間と同じ数ほど動物がいるのではないかと思われるくらい多いのです。このようなことはインドで珍しい光景ではありませんが、その中で実際自分も生活してみると、なにか別世界にいるような不思議な気がしてくるのです。日本ではこれほど動物を身近に見ることも、感じる事もなくそれが当たり前でした。ところが、ここでは相当数の動物たちが、ひとつの町の中で共に暮らしているのです。それは、この町の主要成員である人、牛、犬、猿、豚たちが、それぞれ自分たちのテリトリーをもち、ある一定の秩序のうえに共存しているようでもありました。

ある時、私はこんな光景を目にしました。巡礼者たちの食事のバナナの皿と残飯が捨てられていた所に、その残飯を狙って、二匹の犬と豚が数匹が寄ってきたのですが、最初にあさりだしたのは子連れの母豚でした。途中で他の豚が近付こうとしたのですが物凄い勢いで蹴散らされてしまいました。犬たちはその様子を遠巻きに眺めていたのですが、残飯をあらかた食い尽くしてしまって豚たちが行ってしまうと、今度は二匹の犬たちのうち獰猛な顔つきをした一匹

がもう一匹を追い払ってあさりだしたのです。残飯をあさるにしても順番があるのでしょうか。またこんなこともありました。私が、通りのラッシー（ヨーグルトジュース）屋さんでラッシーを飲んでいると、二、三匹犬が近付いて来ました。私は元来、生きものが苦手で、こんな風に集団で近付いてこられたりしたら、恐くて飛び上がってしまうのですけど、この時は、

最初ドキッとしましたが、不思議とその後の恐怖はありませんでした。彼らは私からちょっと離れて、ちょこんと座り私の方を見てなにかを待っているようでした。それがなんであるか、隣の人が飲み終わったのをみて私にもわかりました。ここでは、ラッシーを大きめの素焼きの土器にいれてだすのですが、それは飲みおわると地面にたたきつけて割られてしまいます。犬たちはその内側にこびりついているラッシーがお目当てだったのです。彼らは私がラッシーを飲み終えて容器を壊してくれるまで、実にお行儀よく、おとなしく待っていました。

ところで、この町で一番油断のならないのは猿です。猿はその数もさることながら、屋根や塀の上からすきあらば食物取ってやろうと、常に目を光らしているのです。その洞察力はたいしたものです。私などは二回もその被害にあいました。しかし、その猿たちにしても店先に山のように積まれてある果物には滅多に手を出さないようです。

このようにここでは、お互いの力関係をそれぞれが納得しているようにみえます。かといって動物たちが人間にまったく従属させられてしまっているのではなく、それぞれの動物の社会が独立して共存しているようでもあります。そして、人間と同じように様々な顔つきをしている動物たちを見ていると、人間と動物といってもあまり違いはないことをあらためて実感させられます。ただ下等な動物から高等な動物へという段階があるのかもしれません。そんなことを考えると、お釈迦様の輪廻転生物語であるジャータカ物語が脳裏に浮かんだりします。あのジャータカにみられるようなことが、このヴリンダーヴァンでは実際に起こっているのかもしれない、そんなことを感じさせる町なのです。

善光寺海外留学僧派遣育英会『論文集』発刊

まさに菩提樹の若芽

――留学僧の使命脈々と――

「宗祖を通して釈尊に還る」を信念とする横浜市の曹洞宗善光寺住職黒田武志氏が、同寺の開創十五周年を記念する報恩事業として、世界に活眼を開く人材育成を目指す「善光寺海外留学僧派遣育英会」を設立してから、この一月でちょうど八年目を迎えた。海外に留学僧を派遣し、あるいは海外から日本への留学僧を援助する育英事業を昭和六十年から毎年継続している。二月には第八回の育英生として五人を採用、二人の継続を発表、これによって育英生は世界十カ国・四十人を数えることになる。

このほど中外日報社の編集・印刷により同育英会から刊行された『論文集VOL・1』は、過去七回の育英生三十四人が応募時に提出した論文を集め、育英会の歩みと将来、理事長である黒田住職の対談や講演などを合わせて一冊にしたものである。論文テーマは「禅の国際化と私の役割」や「二十一世紀の仏教と私の役割」あるいは「タイの仏教に学びたいこと」「未来社会の仏教」などで、それぞれに仏教者として生きる理想に燃え、海外での留学体験や実践を通じて、社会に何を果たすべきかの使命を考える

真摯な姿勢に貫かれている。

これには曹洞宗大本山永平寺の丹羽廉芳貫首、同大本山総持寺の梅田信隆貫首、山田恵諦天台座主、東京大学名誉教授の中村元東方学院院長(以上は善光寺育英会名誉顧問)、立正佼成会の庭野日敬開祖、ロサンゼルス禅センターの前角博雄主管(善光寺育英会顧問)が序文を寄せ、「育英会の歩みと将来」を千葉県柏市・龍光寺住職の佐藤俊明常務理事、「育英会の将来について」を駒沢女子短期大学副学長の東隆眞理事が執筆。上智大学の安斎伸教授の随想「『理想具現』の実例に学ぶ」や黒田住職と庭野立正佼成会開祖との対談、黒田住職がフランス・パリ第一大学での第二回日仏セミナーで行なった講演「新しい教化路線を求めて—十五年の軌跡とその成果—」などを収載する。

中村元東方学院長は同書刊行の意義について、次のように語っている。

「善光寺育英会の経過について、いささか存じております。黒田住職が非常に力を入れて、高い理想をもって始められたものです。そこに寄せられた論文は生き生きとしており、若い人々の活気が漲っています。その情熱において、きわめて内容の高いものと思います。

論文は、これまで善光寺の機関誌『成寿』等に発表されたものですが、機関誌自体が一寺院の刊行物としては大変ユニークで、文明評論的な内容も含んだ、アトラクティブな(注目すべき)ものと言えます。東方学院の若い研究者にも発表の機会を与えてもらい、各自がそれぞれ違った角度から自分の感想や体験を述べております。これも仏教界としては珍しいことでしょう。

このような事業は、本山や宗派がなさるのならわかりますが、一つの寺院がこれを継続していくことは大変な努力の伴うことです。そのこ

とに大いに感嘆している一人です。育英会の若い人々が、世界に眼を向けて新しい知識と体験を吸収し、菩提樹の若芽のように未来に向かって成長されるよう期待いたします」

A五判、三〇八ページ、頒価一、五〇〇円、善光寺（横浜市港南区日野町一六〇四）刊。

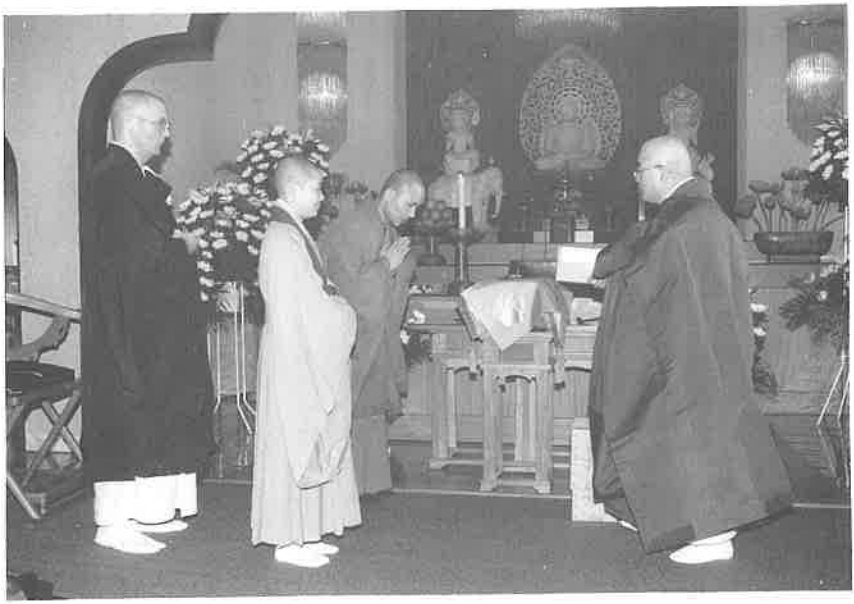
第八回育英生を決定

善光寺海外留学僧派遣育英会

善光寺海外留学僧派遣育英会（理事長＝黒田武志善光寺住職、事務局＝横浜市港南区日野町一六〇四・曹洞宗善光寺）は、このほど第八回育英生として五人の採用と二人の継続を決定した。今年度は日韓交流の年にしたいとの考えから、韓国人の育英生採用に重点が置かれた。派遣先は新たにカンボジアが加わり、これにより派遣育英生の総数は十カ国・四十人になった。

新しく採用決定した育英生は、カンボジアに派遣する真言宗僧侶の渋井修氏、山手学院高等学校講師で曹洞宗で得度したアメリカ人のペルキ・ローフ・大玄氏、韓国からの留学生で立正大学大学院の韓仁徹、大正大学の韓京愛、東北大学の権来順の各氏。また継続採用は、タイ国ワット・パクナムで修行中の曹洞宗僧侶・落合隆氏と、韓国から東洋大学に留学中の曹渓宗僧侶・李焌秀氏。渋井氏はタイ留学で採用されており、二度目の採用になる。

カンボジアへの育英生派遣は今回が初めてで、渋井氏はタイ国のワット・パクナムで得度修行。その間、カンボジアに入り、虐殺者の霊を弔う供養の行脚を続けた。こんど再びカンボ



辞令伝達式

お祝いの言葉を受ける皆様

ジア行脚を決意し、虐殺された人々の供養と現地での日本語教育、カンボジア仏教会の復興を目指したいとの菩提心を起こし、育英生としての派遣を求めた。ワット・パクナムのプラ・パワーナ・コーソン・テーラ副住職が推薦した。ペルキ・ローフ・大玄氏はアメリカ・ミネソタ州出身で、ミネソタ大学日本語学科を卒業後、来日し、市邨学園高等学校、愛知淑徳大学及び高等学校の講師を経て、現在は横浜の山手学院高等学校講師として教鞭を執っている。仏教や禅に関心を持ち、昨秋、善光寺の黒田住職に師事して剃髪得度。将来は出家の道を歩み、道元禅師の著作を英訳して禅の国際的普及を図りたいと願っている。推薦者は駒沢女子短期大学の東隆眞副学長。

韓仁徹氏は大韓仏教曹渓宗の僧侶。釜山の梵魚寺仏教専門講院大教科を卒業し、日本の駒沢大学仏教学部仏教学科に入学、卒業後、立正大学大学院文学研究科仏教学専攻の修士課程を修了し、同博士課程で律蔵の研究を行なっている。立正大学の田賀龍彦教授が推薦した。

韓京愛氏は梵魚寺で受戒した尼僧。韓国仏教大学哲学科在学中に来日し、東京の神田外国語学院を卒業後、大正大学に入学し社会福祉学科で学んでいる。大正大学で指導している斎藤円真講師が推薦者になっている。

権来順氏（女性）は韓国の嶺南大学哲学科を卒業し、現在、東北大学の印度学仏教史学科研究生。推薦者である仙台市の曹洞宗玄光庵住職伊串昇顕氏は、権氏が特別の用事がない限り毎朝同寺に来山し、三十分の暁天坐禅、約一時間の朝課を勤め、さらに清掃も手伝った後、大学へ自転車で通学していることに「身を以って行ずる身心学道に徹した勉学精進に頭が下がる」と感嘆している。保証人は塚本啓祥指導教授。

第八回育英生入選論文

カンボジアで

真言宗僧侶　渋井　修

カンボジアに最初に行ったのが三年前、そしてカンボジアに住んで二年がたちました。この三年間にカンボジア国内にいろいろの変化がありました。三年前のカンボジア、空港から町に行く道すがら、人々の浮き足立ったような軽い足取りが、何よりも印象的でした。それもそのはず、その年の一月にはベトナム軍がカンボジアから撤退して、四月に共産主義を捨て、国名を新たにして、私有財産と土地の所有を政府が認めたのでした。それ以後、五十歳以上でなければ得度して僧侶になれなかった法律も改正され、地区長の許可があれば誰でも年齢に関係なく得度できるようになりました。カンボジアが解放された二年後（一九八一年）に全国の僧侶の数が二千人だったと言われていましたが、三年前には六千人になり、一昨年には八千人になり、そして昨年には二万一千人にまで増えました。商業活動の面でも、商店の大きさに比べ品

薄であった二年前に比べると、今は店内にもたくさんの商品が並べられ、活気ある町に変わりつつあります。

プノンペン近郊の虐殺現場に供養に行った時には、何ケ所もの検問所を通り抜け、橋の手前と向う側には土嚢を積んだ監視所があり、兵隊が常駐していましたが、昨年には数ケ所の検問所が撤去され、監視にあたる兵隊の数も減りました。そして昨年のパリ和平会談で、現政権と反政府三派が停戦協定に合意し、やっと平和に向けての第一歩がふみだしました。しかし二十年にわたる内乱で国土は傷つき、人心にも言い知れぬ深い傷跡を残したことも確かです。

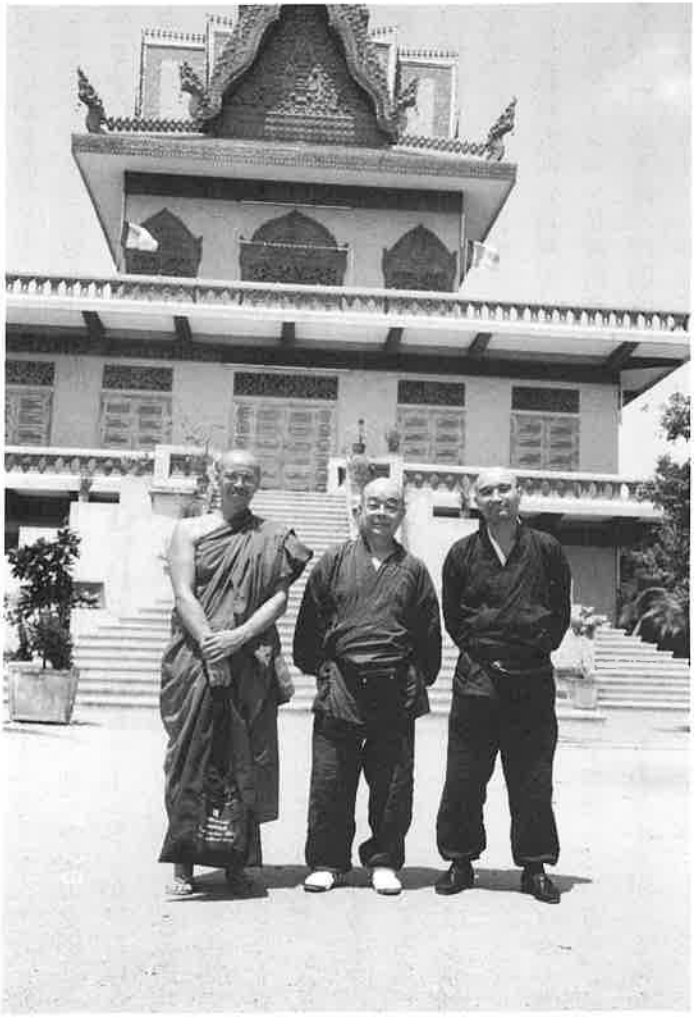
この二年間に、虐殺された人々の供養に十ケ所程行ってまいりましたが、地方の一人歩きはゲリラと地雷の危険があるとのことで許可が下りません。昨年の五月に開いた日本語教室も、まだ正式には政府の許可が下りず、黙認というかたちでやっているのが実情です。この国では外国人が何かしようとすれば、必ず政府の許可をとらなければなりません。そしていつもその回答は否定的なことが多く、自分の思ったことが思ったようにできません。

ポルポト時代に多数の知識人、僧侶が殺され、外国人の目から見れば人材不足が一番の深刻な問題です。現在カンボジア国内に僧侶が戒律やバーリー語を学ぶ学校が二ケ所ありますが、実際に学べる人数は二百人程度です。僧団内の指導者不足、教室の確保、経典不足など、僧侶の数が増えたぶんだけ、内面にかかる問題も増えてきました。

最初は虐殺された人々の供養にと入って来たカンボジアでしたが、現状を見れば見るほど、それだけではだめなことに気がつきました。それではカンボジアの復興のために日本人僧に何ができるであろうか。二年前に気がついたこと

は、この国には日本語の本もなければ、日本語を教える教師もいないということでした。すぐさま日本からカンボジア語、日本語の本を取りよせ、庫裏を改築して日本語教室を開く準備をしました。将来的にはこの国にも必ず日本語が必要になる時が来るであろうから、今のうちに

プノンペン・ウナロム寺院にて



その人材を育てようというのが目的でした。しかし少しずつ欲が出てきて、できるものなら生徒の何人かは日本に留学させたいと思うようになりました。現在二クラスあって、十一歳～十四歳までの子供のクラスが十三人、十八歳～二十七歳までの大人のクラスが十二人います。日曜を除く週六日、午後五時半～七時までと七時半～九時まで、一時間半ずつ教えています。

虐殺された人々の供養と日本語教室を開くことで、私自身のここでの活動は十分であろうと思っていたのですが、最近になってカンボジア仏教会から、プノンペン仏教研究所の再興を望む声があがりました。このプノンペン仏教研究所とは、付属機関として学校、図書館、印刷所をもつ国内では中心的な存在であり、一番権威のある仏教研究所であり、教育機関でした。しかしポルポト時代には建物が破壊され、図書が焼かれ、印刷機もどこかに持ち去られてしまいました。この仏教研究所を再興するために、日本の各仏教会、団体に資金面での協力を願うべく、連絡要員として私が御手伝をしなければならなくなりました。しかしカンボジア仏教の現実を見るならば、私が御手伝することは当然のことであり、また私しか日本とカンボジアを往復してその任にあたる人がいないのです。大きな任務を抱えこんでしまいましたが、カンボジア仏教の復興を考えるならば、どうしても若い僧侶の教育、経典の復刊が急務であることは疑いの余地のないことです。

私はこの国で三つのことをしなければならなくなりました。自分の力量を越えているのではないだろうかと思うこともありますが、とにかくやらなければならないでしょう。そして、いよいよ本腰をすえてこの地に根をはり、全力投球しなければならなくなったようです。

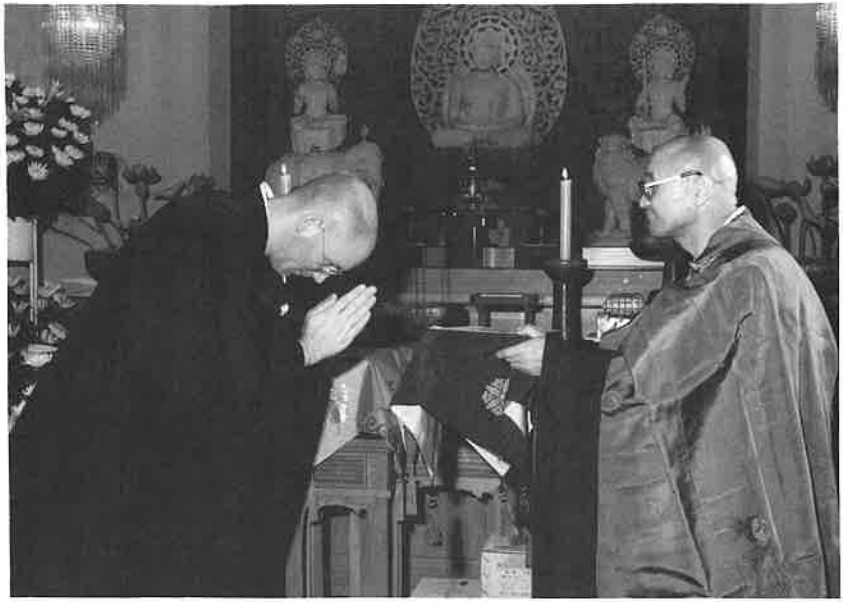
第八回育英生入選論文

未来の仏教と私の役割

ペルキ・ローフ（大玄）
（米国人）

ソ連邦消滅をあなたはどのように考えていますか。いろいろと取沙汰されています。たとえば、「偉大なる革命者ゴルバチョフは、共産主義を救う試みを、先を急いだばかりに崩壊の引き金をひいてしまった」と。だが、私は物質的なものを根本とする唯物史観の終焉だと考えています。アメリカ合衆国も似たようなものです。麻薬とホームレスが、はびこり広がっています。その反面、博士号取得者や大金持ちの人々が、社会的栄誉や物質的栄華の虚しさを実感して、禅に心をむけています。が、アメリカンドリームはすでに昔話であるし、再びモンロー主義が出てきそうです。

ルターの宗教改革を申すまでもなく、宗教のペレストロイカは、その成果を後の世まで伝えます。バラモン教に対抗して興った仏陀の教えは、未来永劫、脈々と受け継がれていくはずです。そう信じて私は出家しました。仏教も、今



まで何度も革命（改革）が行われています。部派仏教をはじめとして鎌倉仏教にいたるまで、いくたの正法を求める僧は、退廃してしまった僧伽を批判し、改革運動を展開してきたのです。私も、日本の僧堂で本物の坐禅を修得して、道元禅師の真精神を、混沌としたアメリカに布教できる僧になりたいし、また授けられた安名に負けないくらいに、大いなる奥深い天なる世界を、この地上の人々に普く与えることを願い、仏教の法輪を転じていくことを釈尊に誓ったのです。

私と仏教との出会いは、小学校の五年生の時です。宿題で、好きな国のことを調べて、その内容を作文にすることでした。オリエント趣味からだったのでしょうか、日本を選びました。学校の図書館にある百科事典を開いたら、日本をイメージさせる写真が五、六枚載っていました。桜と富士山、芸者さん、ラッシュアワーの

サラリーマン、そして坐禅しているお坊さんでした。この僧のイメージは妙に心に惹かれ目に焼き付いてしまったのです。中学校そして高校に通学するようになって、ますます「日本と仏教」についての興味は募るばかりです。〈日本へ行きたい〉〈お坊さんになりたい〉と思いながら、口に出すことはできないのです。それは、話したら、家族・友人そして先生だって、当時の環境と全く関係のない「日本と仏教」を考えている私を、アウトサイダーとみなし、ひやかすだけではないかと恐れていたからです。だから、心ひそかに大学は地元のミネソタ州立大学日本語学科と決めていたのです。ちょうど日本語ブームの第一波の波紋がアメリカの中心部まで及んだ頃でありました。皆が私を見て、外務省か日本企業を目指しているだろうと思ったかもしれません。しかし、私はそういう仕事に興味はありませんでした。

大学の授業で、私を仏教の世界に深く引き込んだ古典があります。日本人なら誰でも御存じの『方丈記』です。「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。――」この流れるような文章に、「諸行無常・諸法無我・一切皆苦」を読みとれることができたのです。ふと、自分の過去世は、日本の禅僧ではなかろうかと思えてきたのです。そうなると、日本に渡ることは目標となり、日本語学習になおさら熱が入ってきたのです。

大学を卒業すると同時に、お金を借り集めて、知人のいる所々を回って来ました。そして、愛知県に就職して、英語教師をしながら禅寺に通い始めました。教育制度の矛盾や自分の努力がほとんど無駄だと感じた私は、教師の仕事をやめよう、国へ帰ろうと思ったところ、横浜の知人から連絡がありました。山手学院という私立高校は外国人の日本語教師を探している、と。

都会をあまり好まない私は、想像していた横浜のイメージがあまりよくありませんでしたが、面接のため横浜に来たら、緑の多さや街のきれいさにびっくりして、是が非でも横浜にきたいと決めました。面接のおり、私が独学していた、日本人ならほとんど誰も知らない『寶物集』（鎌倉初期の仏教説話集）を取り出して、国語担当の校長と教頭の前でそれを説明したのが、効を奏したのです。

そして、今回ある僧を介して善光寺に縁があり、方丈様に「弟子になるか」とおっしゃられた時は、天にも昇る気持ちでした。十年来の夢が、実現出来たその夜、アパートで坐禅していても、妙に心が落ち着かないのです。そして、『奥の細道』の「月日は百代の過客にして、往きかふ人もまた旅人なり」の一節が浮かんできたのです。来日してから七年間に、芭蕉をしたって日本の隅々まで旅行しました。祖国アメリカでは禅センターがあるロサンゼルスに一回しか行っていないし、ニューヨークへのおのぼりさんもしてない私がと、考えると妙な気持になってきます。

私と逆に、来米されて、いくつかの大学で講義し、日本文化と禅思想を紹介してくださった鈴木大拙先生は、私にとってもかけがえのない読書の師です。日本語訳にもなった『禅と日本文化』の原書を大切に持っており、何かにつけページをめくりました。私の日本名は、鈴木朗夫です。この鈴木の姓も、ファミリー・ネーム、ペルキをベルキにして、大拙先生に因んで、つけました。ローフが朗夫になったのは、その漢字の意味が好きで、その発音が合ったからです。残念ながら、私は親不幸者で、朗らかになっても、結婚しないつもりでいるので、夫にはならないと思います。

日本人に近付きつつ、私は常に人間のあり方

を考えています。古典を読むと、日本人の心がしのばれます。たとえば、万葉の人々は、清き明き心を重んじていたのです。この清明さを『万葉集』で自然の形容まで用いたのは、自然が美しいというだけではなく、そこに聖なるものを感じとったからです。清らかで美しい自然が人間の世界にも訪れることは、望ましいことです。その理想の姿を見いだしていたのです。と鈴木大拙は『日本文化と禅』に述べています。

「うつせみは　数なき身なり　山川の
　　さやけき見つつ　道を尋ねな」

この大伴家持の歌は、『万葉集』のなかで私の好きな歌のひとつです。この心情は道元禅師にも通じていくと思いますが、いかがでしょうか。

現在、問題になっている地球の環境破壊にしても、この心を忘れてしまっているからではないかと、私は考えています。インドネシアの豊穣な森林を伐採しつくし、荒れた国土にさせているのは日本だと報道されています。万葉の人々が、人間を含め、すべての生命の源泉が自然の中にあると信じ、その生命力を賛美し、自然に対して限りない信頼を寄せていた血脈はどこに置き忘れてきてしまったのでしょうか。

『正法眼蔵随聞記』には、「日々時々を虚しく過ごさず」と、または『修証義』の「総序」には、「今生の我身二つなし、三つなし」と書いてありますが、私は剃髪をしたので、こういう注意と奨励の言葉を脳裏に置きながら、禅僧らしいと言われるように精進をしたいのです。

旅先の禅寺で、清香を放つ白梅の古木を眺めていると道元禅師の月見の像が浮かんできたことがあります。そして、言いようがない無上の喜びにひたっていたのです。道元禅師の精神世界は、世界のどの宗教、どの哲学も及ばない偉大な思想だと考えています。理屈抜きで行ずることは、人生においてもそうですが、厳しい修

行に耐えられるものにするのです。それがよく哲学には欠落しているが、道元禅師には含まれているのです。

現代です。経済が優越し、工業技術が世界を支配しているのが、人間を個別的・平均的な大衆にしてしまった時代にあって、道元禅師の実践仏教を展開することは非常に価値あることと考えています。願わくば、「只管打坐」を実践し、仏教の教えと一体となった安らかな自由と慈悲を会得して、その体験をもって、それらを世界の人々に語っていきたい。

これから大問題となる民族紛争や宗教紛争を、心配するあまり、またアメリカだけでなく、地球全体に仏教の調和の教えである「慈悲」を限りなく伝えたいばかりに誇大にその願望を述べてしまった箇所がありますが、日本の禅僧として、つつましく、「一隅を照らす」意味で、道元禅師が残して下さった書物の英訳を校訂していきたいと思います。それが道元禅師から私に与えられた使命のように思われます。

第八回育英生入選論文

未来社会の仏教と私

立正大学大学院文学研究科
博士後期課程仏教学専攻
韓　仁　徹
（韓　国）

東西の障壁が崩れ落ち、理念の対立が薄れていく現代に私達は生きている。ここ数年間、世界には予想しなかった出来事が起きて、周囲の環境が変っている。しかし今日私達が肌で感じる社会の空気はどう変っているのか。暴力、憎しみ、また麻薬などで汚染しつつあるのが現状である。それではその原因とも言えるのは何であろうか。互いに不信を懐く風潮、個人主義の蔓延、精神的な彷徨などが挙げられる。しかしそれよりもっと根源的な原因とも考えられることは「愛（アガペー）欠乏」ではないか。すなわち、自己中心主義が満ちあふれていることである。このように精神的な余裕をもたない現代人は実に精神の指導者を必要とする。

前世紀から今世紀にかけて我々は文明の進歩にともない物質的な意味では繁栄を享受している。その反面、心の奥底では孤独感と淋しさを抱いている。常に自分が疎外されているという

意識をもっている。このような状況に対して、私達宗教者は十分認識し、責任感をもたなければならない。

仏教には、多くの人々がもっているこの共通の悩みを救う思想及び実践に関して多様に説かれている。釈尊の悟りを源泉とする仏教の教えは、人間としてどう生きていくべきであるか、すなわち理想的な人間像を示したのである。またその教えの内容には「縁起」をはじめ、「中道」、「四聖諦」、「八正道」などいろいろがある。迷いの苦の世界にいる我々が、いかにその事実を自覚し、またそれをいかに処理すべきかの方法が考察されている。それ故に「慈悲」というすばらしい精神が説かれている。慈悲は「純粋の愛」ともその概念を解釈されるが、それは他人に利益と安楽とをもたらそうと望み、他人から不利益と苦悩とを除去しようと願うことである。すなわち菩薩の精神の基盤となるものである。私はこの「与楽抜苦」の精神こそが、現代人が抱いている苦悩を解放しうるものであると思う。存在するすべてのものは相互依存関係にあるという縁起の道理は、我々に多くのことを教えている。特に人間社会は相互依存する集まりであるという事実を我々はそれほど自覚していないのではないかと思う。互いに許しあい、協力し、助け合う、という慈悲の実践こそが、自分だけを考え、他人のことに目を向けようともしない個人主義に走って行く現代人を救うであろう。釈尊は悟りを開かれて、その悟りを自分一人で享受するものではないと気づかれ、大慈悲の心で多くの衆生のために伝道をされ、悟りに導かれた。多くの衆生の苦痛を自らの苦痛とされ、伝道の活動を続けられ、自らが抱いた理想の社会を実現しようとされたのである。

ところが、その理想の社会とは、寛容と包容性がある「平和」と「平等」の社会を意味する

のではないかと思う。仏教を産み出した当時のインドの厳しい階級差別の社会においても、釈尊は階級制度（四姓制度）を否定しておられた。出家して仏教教団（僧伽）に入った仏弟子は、バラモン、クシャトリヤなどの差別をすることなく、すべて仏弟子として扱い、四姓平等を唱えられたのである。また如来蔵思想は、すべての人間に成仏の可能性が本来備わっていることを認めている。そのほか「一切衆生　悉有仏性」を説いた『大般涅槃経』なども人間平等を説く仏陀の精神にもとづいている。しかし、今日我々の社会において、真の平等の人間関係が行なわれていると言えるのであろうか？　自分の立場は常に正しいと信じながら、一方では他人の立場は認めようともしない光景を私達はよく見かける。それが原因となって争いが生じ、不愉快な関係になることがよくある。このようなわけで今日我々には慈悲の心と、寛容と包容の精神が必要となっている。この精神を養い導くことが私達仏教者に要請される役目であろう。そのために私達は仏教の理論と実践の両面で最も充実しなければならないと思う。理論の面では、釈尊の教えを学び、その真髄を深く理解し、極める必要がある。これを基にして、煩悩や業（行為）によって作り出された誤り、罪悪あるいは不道徳に満ちている世界から理想の世界、すな

わち仏国土（浄土）への道を導く者にならなければならないと思う。またその実践においては大乗菩薩道の根幹である六波羅蜜（布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧）を実践修行することがのぞましいと思う。しかし私達仏教者はよく世間を遠ざかり、生活を放棄するかのごとき実践をいとなむことがある。このようなことも、結局世間の迷妄を抜けきることによって、よりよき生をおくることを目標としたのではなかったのか。すなわち私達の究極の目的は「よく生きること」であると思う。よって私達はもっとこの世間に対して、精神的な依るところとして貢献しなければならない。つまり、多くの人々とその苦しみをともに味わい、その苦痛から立ちあがる智慧を彼らに提示しなければならない。これが未来社会への仏教徒のあり方であると思う。

第八回育英生入選論文

二十一世紀の仏教と私の役割

大正大学文学部社会福祉学科　韓　京　愛
（韓　国）

仏教は、釈尊によって説示された生死の苦悩からの解脱道である。人間の最も大きな苦である死の苦悩から解脱して、人の心に安心と生きがいをもたらす道である。

今日、物質文明の急速な発展とともに人間は自分自身を見失っている。

人々の心の中には、何事も簡単に割り切ってしまえない複雑なものがうごめいている。歌い、喚き、踊り狂っている人間がいるかと思えば、政治運動に躍起になっている人間もいる。

人々は不安で精神病とストレスなど色々なことで悩んでいる。

人間の意識の奥の方には意志によって制御することのできない暗い衝動、あるいは盲目的な動きがある。それは「煩悩」というような言葉では表現できないなにものかである。「無明」といえばそれに一番近いであろうか？いや、「無明」という他はないかも知れない。

禅は無明を破してくれると私は思う。「禅」という言葉は仏教が成立した当初からある。これ

は精神の安定・集中（三昧）を総称する言葉である。

ヨーロッパやアメリカでは、禅が盛んであるという。禅ブームが吹きまくっているという人もある。韓国でも一般の人々のために「市民禅房」が運営されている。この「市民禅房」は特に働く人達の間で人気を集めている。人々は異口同音に「坐禅をすると心が落ちついてくる。」という。現代人だけではなく未来人にとっても「禅」は生きる力になるであろう。

「地球は青かった。」これは初めて宇宙を飛んだソビエトのガガーリンの言葉である。

最近、酸性雨や海洋汚染・熱帯を中心にした地域の砂漠化現象・地球の温暖化、あるいはオゾン層の破壊等々の問題がつぎつぎに出てくる。

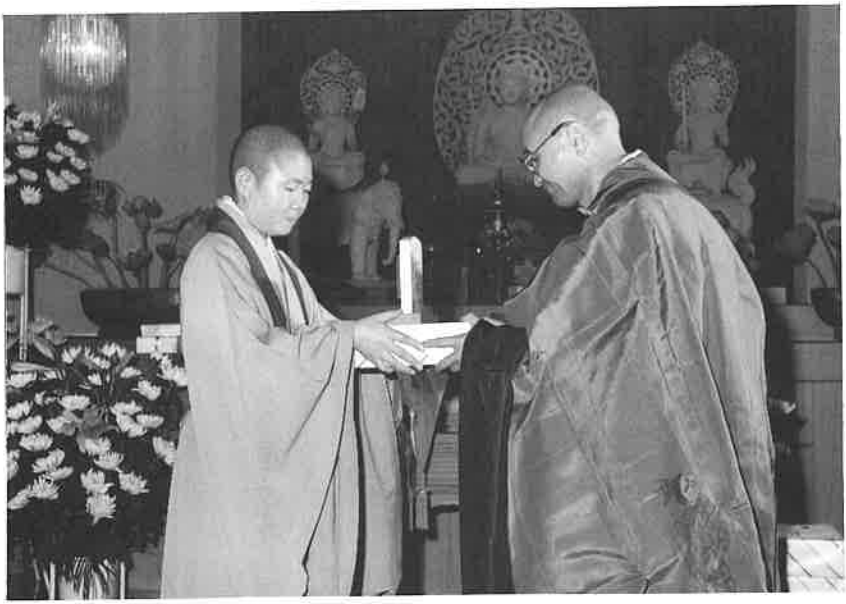
今世紀最大の噴火といわれるフィリピン・ルソン島中部のピナトゥボ山爆発も、日本雲仙岳の火砕流の被害も、温暖化が原因で発生したと主張する学者の説も無理ではないであろう。どうやら地球は破滅に近づきつつあるのではないかと思われるようなことばかりおきている。

美しい地球が破滅して宇宙から姿を消すか、または地獄のような現象が現われるか。

仏教は人間が自然を支配するのではなく自然との共存を説く。自然と共存しながら理想の世界を作る。この世界こそ極楽である。

仏典には極楽のことが詳しく説かれている。釈尊が弟子の中でも智慧第一といわれた舎利弗を相手に、極楽のすばらしさについて次の様に語っている。

「舎利弗よ極楽には大きな池があって八つの功徳をたたえた水が満々として、池の底には黄金の砂がきらめいています。池の中には、青い蓮花は青く、黄の蓮花は黄に、赤い蓮花は赤く、白い蓮花は白く、みなそ



れぞれに光とかぐわしい香りを放っているのです。舎利弗よ、極楽とは功徳で出来た実にすばらしいところなのです」と。

環境がいくら汚染しても、仏教には自然と共存しながら地球上に極楽を作る使命があると思う。

『維摩経』によると、世界を幸福にするのは無我大悲の心だという。この世にあるすべての病の状態を知り、世の中から病気を除く方法を考え、実行に移すことが『維摩経』には説かれている。

維摩居士が文殊の問いに答える言葉は次のようなものである。

「迷いから妄執が起こり、そして私の病が生じたのです。すべての生けるものたちが病んでいるので、それ故に私も病むのです。もしも生けるものたちの病が消滅したならば、私の病も滅びるでしょう。」

この病は何によって起ったのであるかというならば、求道者の病は大いなる哀れみの故に起こったのです。

（『維摩経』、東京大学仏教青年会編、『現代人の仏教聖典』）

大慈大悲の心とは、すべての生きとし生けるものを哀れ慈しむ仏の心である。つまり維摩はまず自分が病気になるのである。

『観無量寿経』には「衆生において視ること自己の如し」と説かれている。

富める時も貧しい時も、封建時代にも、王朝時代にも、そして現代の民主社会でも、国の政体にかかわりなく、人々の心は何とか光を渇望してやまない。

現代の福祉は、もはや慈善事業と考えられる領域から脱することができたようだが、慈善と考える源は、やはりみほとけの慈しみ給う心を自分の心にしたいという人間の願いから出たものであろう。

しかし人間性の極限まで考えてみなければ福祉活動をする人の心の成り立ちはわからない。福祉活動をする心だからこそ、これはなおざりにせず洗い出していかなければならないものではなかろうか。

急速な産業化、核家族化、高齢化社会の中で苦しむ人々のために仏教者は菩薩心をもち、一切の衆生を救済しなければならない。

二十一世紀の仏教は精神世界・環境問題・福祉社会の建設に積極的に取り組まなければならない。そこにこそ、仏教には人類が求める大きな使命がある。

私は、特に社会的に弱い立場におかれている人々のために働こうと思っている。仏教の修行にはげみながら人間の幸福のために働くことは出家の意味があると思う。

第八回育英生入選論文

二十一世紀の仏教と私の役割

東北大学印度学仏教史学科研究生　権　来順
（韓国）

韓国人の私は、現在仙台に住んでいます。仙台の一禅寺で坐禅もしています。東北大学では、学問としての仏教を学びつつ、苦しいけれども充実した毎日をおくっています。私は将来仏教経典を、梵語原典から韓国の言葉でわかりやすく翻訳して、仏教を母国にもっと広めたいという夢をもっています。そのために私は日本に来ました。仏教原典を日常的なハングル語に翻訳するためには、漢文からではなく、梵語・西蔵語に基づいて翻訳する必要があるのですが、韓国では、梵語・西蔵語による仏教研究はあまりなされていないので、それらの研究の進んだ日本に留学したのです。

私は出家しておりませんが、仏教は私のすべてです。少女の頃から、私は仏教とともにありました。私には、世俗的な生活にはなじめないものがあり、山や河や山寺、そこでの僧侶たちの生活に憧れをもっていました。韓国にいた時

は、山の色とよく似合った、僧侶たちの灰色の僧服に惹かれて、山寺を尋ねていきました。いつのまにか、私の友人は出家僧ばかりになっていました。私は、世俗の人たちと一緒にいるよりも、尼僧たちと一緒にいる時の方が、息がつけるような気がしたのです。その頃から、仏教は私の生活の中心になり、心の頼りになりました。姉が猛反対したため、私は尼になりませんでしたが、かといって俗に生きることも私には出来ず、そのため僧でもなく俗でもない、その中間の生き方としての、仏教学をこころざす学者になって、仏教を学んでそれを広めてゆくということを、私の人生の目標であると思うようになりました。

私の生まれた時から日本に留学するまでの、これまでの生と仏教徒の縁を、もう少し詳しく述べてみたいと思います。

物心ついた頃から、私の母は私たち姉妹に、後姿の状態で、「お前たちは皆、仏様にお祈りして得られた娘たちだ」と、繰り返して愚痴をこぼしておりました。この母の言葉にはじつは皮肉がこめられています。母は、本当は男の子が欲しくて仏様に祈ったのです。ところが、仏様が授けてくれたのは、みな娘であったというわけです。

私の母は、伝統的な儒家の家風がまだ強く残

っている「権家」の宗孫の頭の家に嫁いだのです。その母にとって、儒家の七去之悪の中でも最も重いとされる、代を継ぐ息子が産めないということは、一生の大きな苦しみでした。そのため、母は息子を得たいとの一念で、山神閣の七星前と仏前に、浄水を上げて祈ったのでしたが、そのお祈りが少し不純であったためかもしれません、結果として女ばかりが四人も生まれてきたわけです。漢学者だった祖父は、私が生まれる前に死にましたが、特に儒教的な観念が強い人で、直子孫を望んでいたと聞きます。代を継ぐ息子を産めなかった嫁としての罪悪感にいつも苦しんでいた母の姿を想うたびに、韓国人の心に潜んでいる「恨」（この言葉は日本語の恨むという意味ではなく、忍ぶという意味が強い）というものが、その後姿にはっきりと表れていたように思われてなりません。

その母は、私が小学校の四年生の十一月に、登校する私に朝の挨拶をしたのを最後に二度と会えぬ人となりました。高血圧のため急に倒れた母は、意識不明のまま病院に行く途中で、四十九年の生涯を閉じました。韓国の伝統的風習として、家の外で息を引き取った場合、その死体を家に持ち込んではならないため、母は病院から直ちに火葬場に送られて焼かれました。

母の突然の死は堪えられないほどのショックでした。母の死によって、私は初めて「無常」ということを意識するようになりました。火葬場の煙突から立ち昇る黒い煙を見、焼かれて出てきた母の遺骨を見、父がくずれて遺骨の前に伏すのを見た時、「死」ということがどういうことか、子供の私にもわかったのです。

儒教の伝統の下で責めを耐え忍びながら生きた母の生と、その悲しい死は、私がのちに仏教に生きるようになるための、遠い原因になっているように思われてなりません。母は、自分の

死で、仏教と私の縁を結んでくれたのかもしれません。

その後、仏教との縁が再び深まったのは大学の時です。心の余裕がない、猛烈な入試競争をくぐり抜けて、やっと大学の家庭管理科という学科に入ったものの、そこで行われる授業にまったく興味をもつことができず、私は脱け殻のようになっていました。「なぜ私はこのようなことをしているのか」という疑問をいつも自分にぶつけました。そして、大学二年の秋ついに自己への疑いに耐えきれなくなりました。講義室に向かう途中から踵を返しました。バスに乗って大邱市から同華寺へ行きました。同華寺は山の中にあり、冷たい渓流を見下ろしながら紅葉を抜けて行くと、静かに本堂が建っているのが見えました。しかしお寺に着いても自分の心をどうしてよいかわからず、虚しさを抱いたまま帰宅しました。

その後、学校に行かなくなり、部屋に閉じこもったままの日がつづきました。もう何にも関心が持てなくなり、体も衰弱してゆく私を心配して、ふだんは仏教の行事に関心のない姉が、私のために「放生会」を行ってくれました。その放生会には、亀が放生されました。姉は、亀の背中に私の名前を書いて、それを海に放ってくれました。

心配そうな姉の顔を見て、自分ひとりで悩んでいてはならない、なんとか自分の足でたたなくてはならないと思いました。

私は大邱にある八空山の巨大な石仏の許へ行きました。その露天の石仏は、慈悲にみちた微笑をもって、私の迷いのすべてを受け止めてあげると言っているかのようでした。私は石仏の足元で、夜を撤して三千拝の五体投地をしました。流れる汗を全身に感じながら浄化されてゆく喜悦を味わいました。夜が明けた時、自分が

生まれ変わったような感じがしました。

新しい生活がはじまりました。お寺に参禅に通いはじめました。大学の専攻も哲学科に変えました。あらゆるものに、愛情をもつようにしよう。人間の悲しさを、痛みを、愛を、離別を、そして生を抱きしめて生きよう。そう、新しい生活をはじめるにあたって心に誓いました。

大学を卒業するときに、友人になった尼僧から出家するように勧められました。そこで、もう一度私は迷いにぶつかりました。なぜなら、私自身以上に私を愛してくれた姉、その姉が猛烈に私が出家することに反対したからです。姉は、「仏教を勉強したいならば、自分が学費を援助し続けてあげる。しかし、出家してお寺に入ってしまうことはしないように」と言い、出家することよりも仏教を研究することを勧めたのです。姉が反対した理由は、韓国の尼寺は戒律が非常に厳しいため、私が肉親に会えなくなることを恐れたためです。私は人生の岐路に立ち悩みましたが、ついに姉の勧めに従い、出家することよりも、仏教を勉強する道を選び、日本に留学することに決めました。仏教を勉強して、経典を翻訳し、経論をわかりやすく解説して、仏教の宣布に努めることも、やはり仏陀の恩に報いる行の一つであると思ったからです。

留学を決めて、参禅に通っていたお寺のお坊さんにその決意を話したら、そのお坊さんは「真に仏教を知りたいと思うなら、知識欲を含む、すべての私を捨てて、その場で坐りなさい。坐禅だけをしなさい。」と言われました。そして「留学はやめるように、出家するように」と私を叱りました。私は「出家は大事です。しかし、大乗仏教を学問として学ぶことの大事さを感じていますので、出家したつもりで、僧が修行する心構えで、学問に専念してみたい」と答えました。すると、お坊さんは「そのような覚悟がで

きているのなら、やってみるがよい」と私に同意してくださいました。

現在韓国では、次第にキリスト教人口が増える一方で、仏教人口が減っています。その結果、仏教人口は六十パーセント弱にまで落ち込んでしまいました。これは仏教者にとって反省すべてことです。民衆的な生活仏教が、僧堂の仏教と乖離してしまっています。もっと民衆に仏教を正しく理解してもらおうという積極的な努力が必要なのです。もっと仏教を広めるためには、民衆には読めない漢文経典よりも、その漢文の元になった経典の原典を、よりやさしい現代の日常語に訳して、それを理解してもらうことが必要であるかと思います。その訳経の試みが、韓国では足りません。なぜなら、韓国の仏教学は、まだ漢文の域を出ていないからです。私はこの点で、二十一世紀の韓国仏教に、私の研究が少しでも役に立てたらと思っています。

日本に来て、研究者としてどこまでやってゆけるか不安ですが、ただいつも仏様の教えどおりに生きて行きたいと願っております。

第八回育英生入選論文

未来社会の仏教と私

東洋大学文学部印度哲学科二年　李　焌　秀
（韓国・継続）

私が未来の韓国仏教界の一員として必ずやりたいことがあるとしたら、それは釈尊の仏教を世界に広く知らすことである。

韓半島に仏教が入って来て、一六二〇年間仏教は韓民族の歴史・文化・思想・宗教の根拠となって、民族史観の主流を形成して来た。一六二〇年の韓国仏教史において学僧として最も偉大な方は新羅時代の元暁（ウオンヒョウ）大師（六一八―六八六年）と義湘（イサン）大師（六二五―七〇二年）のお二人であった。

元暁大師は新羅仏教史のみならず、中国仏教史においても、その傑出した業績に関して卓越した存在であった。皇龍寺に得度し、修学に専心したが、後、高句麗僧普徳について『涅槃経』などを学び、常に諸方をめぐって研鑽を怠らなかった。

六五〇年、学なった元暁は普徳門下の同門義湘と入唐を試みたが、途中「三界唯心・万法唯

識・心外無法」の哲理を悟って義湘と別れ、踵を回すと生涯二度と故国を離れようとはしなかった。是は真理の普遍性と独自性を根拠として求法仏教の時代から自らの身内証に依拠して立つ韓国仏教確立の時代を示す一挿話として意味が深い。元曉の著作は、総じて五十七部二百三十巻の存在が確かめられているが、外にも八十一部説、九十九部説、二百四十余部説などがある。とにかく、元曉は世界仏教史に一番多くの論書を残した。

元曉の代表的著書としては、『金剛三昧経論』・『十門和諍論』・『大乗起信論疏』・『華厳経疏』・『法華経宗要』などがある。特に『起信論疏』などの諸疏は『海東疏』として中国本土でも非常に尊重され、中国華厳宗の四祖であった清涼澄観の思想的根拠ともなった。元曉の思想は多技にわたり複雑であるが、簡単にその思想的根幹を述べるならば、起信論的如来蔵思想や

仏性論によりどころを置いた華厳教学であったと思われる。『十門和諍論』はそれまでの教学を大成し、新たに新羅仏教学を樹立しようとするものであったから、元曉はいわば韓国における八宗の祖ともいうべき位置にある。『十門和諍論』は仏法全体を「和」という一つの理念で解釈した名著であり、世界平和をめざす仏教的理念を高らかに論じている。

ドイツのカントは、『永遠の平和のために』という著書を残しているが、それは理想的に『十門和諍論』と類似している。元曉とカントの思想による世界平和の理念を確立するとしたらすばらしい結果が生まれるであろう。それゆえ、私は元曉とカントの比較研究をやりたいと思い、指導教授（東洋大学の）金岡秀友先生に自分の意思を伝えたところ、先生は「仏教と西洋哲学を比較するのはあまりよくない。そして、比較思想は君が将来大家となってやった方がいい」とご教示くださったので、将来には必ずやってみたいという強い信念を心の中に持っている。

義湘大師は新羅の王族金韓信の息子であったが、二十歳で京師の皇福寺に出家得度した。後に元曉とともに入唐の志を抱き留学の途についた。元曉が万法唯識の悟境を得て踵を返すや一人でそのまま唐へ入った。入唐し、終南山至相寺の智儼（華厳宗三祖）に学んで華厳教学の蘊奥を極めた。現在する『華厳一乗法界図』は、義湘が智儼に示して印可された法性偈であり、七言三十句二一〇字五四曲をもって、華厳教学の奥旨である海印三昧を表現したものである。智儼は義湘が義持に秀でるを賞し、義持の号を義湘に与えたと伝えられる。智儼の入寂後、講主の継承を慫慂されたが、時あたかも新羅統三の時にあたって、新羅・唐は対立しており、義湘は唐が新羅攻略の準備に急いである情勢を伝

えるため急拠指南の地位を同学の賢首大師法蔵に譲って、文武王十一（六七一）年帰国した。義湘の帰国後、法蔵は華厳宗の三祖となって、華厳宗史において一番偉い人物として天台宗の開祖である天台智者大師とともに中国仏教学の双璧となった。私は華厳学の分野では義湘と元暁がいたので中国より新羅の方がより水準が高いのではないかと思い、天台学の分野では天台智者大師がいたので新羅より中国の方がより水準が高いのではないかと思う。元暁が「和」という一つの理念で仏法全体を解釈したように、天台は『華厳経』を諸経中の最高の権威であると結論し、「妙」・「法」・「蓮」・「華」・「経」の五つの文字で仏法全体を解釈したあの有名な『法華経義』・『法華文句』・『摩訶止観』を著わした。天台のその哲学的な深い世界はだれもついて行くことが出来ないほど非常にすぐれていた。天台と法蔵を中国仏教学の双璧と見る見解もあるが、インドの仏教を最初に中国化させた人物が天台であったので、彼は中国仏教学の先駆的業績を築いたと称されるのである。

義湘は帰国後、太白山に浮石寺を創建し、三千人の弟子に『華厳経』を講じ、『入法界品鈔記』・『華厳十門看法記』・『阿弥陀経義記』などを著したが、その教学の深広比類ないことは智儼門下において証された通りであり、法蔵も『華厳経探玄記』を著わして義湘に贈り批判を講じたという。義湘は「海東華厳宗」の祖として浮石寺を本山と定めた。

義湘は唐に留学して大成した。元暁は新羅を離れることなく新羅において大成し、驚くべきことに中国本土で非常に尊重された。天台学と華厳学がインドの仏教哲学を超克した中国人独自の思想体系であるといわれるのに対して、元暁の『十門和諍論』（和諍思想）は中国人を超克した韓国人の独自的な思想体系であるといわれ

る。

私は元曉と義湘の後裔として海東の沙門の一人として存在しているということにいつも強い矜持を持っている。将来釈尊の法を継いで釈尊の偉大な思想を世界に広く知らせて最も誠実な修行者としての道をひるまず行きたいと決心している。

不動明王の大祭並びに大般若会法要を厳修

五月二十八日(木)午前十一時より善光寺恒例の身代り不動明王の大祭並びに大般若会法要が厳修されました。佐藤俊明老師を大導師に、家内安全、身体健全、商売繁昌、交通安全、その他の御祈願会、祈禱会がとり行われ、また講演に獅子てんや先生をお招きし、参加者一同に感銘を与えました。

善光寺だより

伊藤三喜庵氏 新聞小説の挿絵を描く

善光寺檀徒総代で水墨画家の伊藤三喜庵氏が、五月二十五日からの読売新聞の朝刊小説「万次郎の生涯・椿と花水木」（津本陽・作）の挿絵を担当することになりました。その独特な作品は本誌の表紙絵や挿絵などで私たちにも御馴染みですが、新聞小説という限られたスペースの中で、三喜庵氏の世界が一段と広がりを見せてくれることでしょう。

陳永裕師 博士仏教学の学位を授与される

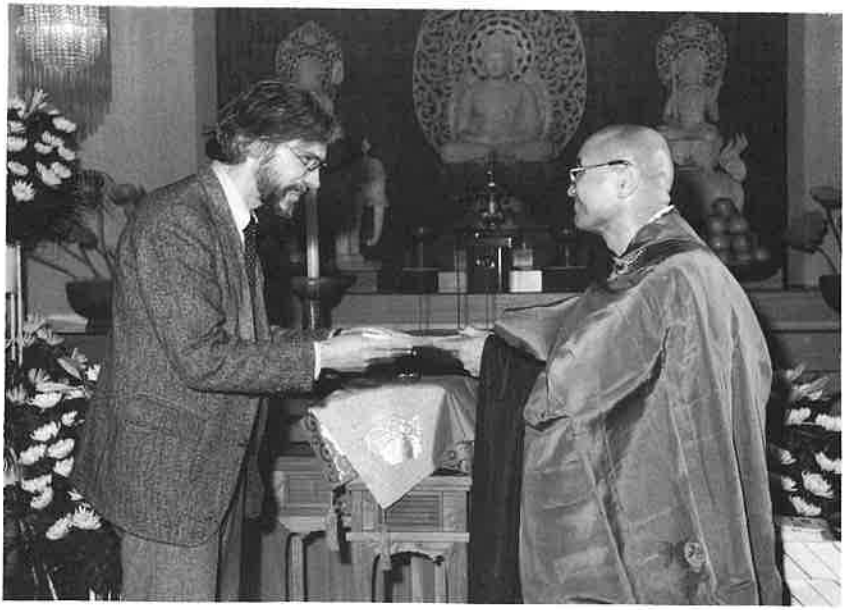
平成二年度第六回の善光寺海外留学僧派遣育英会の留学生だった陳永裕師（韓国、駒沢大学留学）は、駒沢大学大学院人文科学研究科仏教学専攻の博士課程において所定の単位を修得

し、学位論文の審査及び最終試験に合格、三月二十五日、博士仏教学の学位を授与されました。留学生の中から第二回生の安井隆同師（インド・カルカッタ大学＝古典・サンスクリット学）に次いで二人目の博士の誕生で、大変に喜ばしいことです。

陳永裕師は現在、韓国において普陀寺の住職で、中央僧伽大学の講師を勤めておられます。

平成四年度総代会を開催

六月六日（土）二時から平成四年度総代会が開催され、二十五名の方々が参集されました。総会に先立ち釈迦殿において黒田住職導師のもと回向を厳修したあと、開基家の代理として株式会社ナリス化粧品相談役・東郷優氏が挨拶。続いてこのたび西堂として迎えられた佐藤俊明老師が、「折角西堂という有難いお役を頂き、今まで以上に善光寺を素晴らしいお寺にすべく、皆様と共々に精進していきたい」と述べられました。このあと客殿に移り、総代・中村治雄氏、黒田住職、檀頭・伊藤喜三郎氏の挨拶のあと議事に入り、①平成四年度行事報告、②平成三年度決算報告、③平成三年度護持会報告、④善光寺海外留学僧派遣育英会報告、⑤永平寺参拝の件、⑥其の他、が審議され、承認されました。



顧問の委嘱書を伝達

善光寺海外留学僧派遣育英会では、各界から多彩な方々を顧問に迎えていますが、新顧問の米国スタンフォード大学教授で文学博士のカール・ビーフェルト氏に、黒田育英会理事長から、委嘱書を伝達しました。

会社の安全大会で住職が講演

七月九日（木）午後一時半から行われた神奈川電機株式会社の平成四年度・第二十七回安全大会において、「生きがいのある人生」と題して、善光寺・黒田住職が講演しました。会社が一丸となって取組む安全大会でのメイン行事として、住職の講演は社員の皆様に感銘を与えました。

ご寄付御礼

〈育英会寄付者〉

匿　名　三十万円
匿　名　十二万円
多湖　公二殿　十万五千円
木下　純一殿　十万円
KK坂戸工業所殿　十万円
河原　昇殿　十万円
細井　勉殿　十万円
小川　光生殿　十万円
安藤　康哉殿　十万円
松原　克子殿　十万円
村岡　有尚殿　十万円
安　徳　寺殿　九万円
和田　龍宏殿　六万円
神奈川電機KK殿　六万円
伊串　昇顕殿　五万円
田中　健稚殿　五万円
阿部　全也殿　五万円
石川　征一殿　三万円
永代　素宏殿　三万円
増山　静江殿　三万円
瀧沢　武雄殿　三万円
鈴木　紀元殿　三万円
井口　幸夫殿　三万円
久保田賢一殿　三万円
匿　名　二万三千円
円　光　寺殿　二万円
緑　雄二殿　二万円
能勢　隆之殿　二万円
成田　大航殿　二万円
越前　竹子殿　一万五千円
井上益太郎殿　一万円
四居　和子殿　一万円
高山　徳殿　一万円
桜井　雄三殿　一万円
村山　隆殿　一万円
中畑　勝善殿　一万円
星野　正平殿　一万円
吉村　新殿　一万円
田代　盛夫殿　一万円
吉田喜代美殿　一万円
片山　一良殿　一万円
山本　龍廣殿　一万円
西海　秀晃殿　一万円
宿屋　義子殿　一万円
伊藤　幹雄殿　一万円
匿　名　八千円
井上　葉智殿　五千円
越前　竹子殿　五千円

〈成寿賛助〉

大道　晃仙殿　五万円
横尾　太寿殿　三万円
今泉　源由殿　二万円
功　雲　寺殿　二万円
永代　素宏殿　二万円
伴　鉄牛殿　一万円
櫻井　和子殿　一万円

「海外留学僧派遣育英会」ならびに「成寿」に、上記の方々よりご寄付をいただきました。心からお礼申し上げます。

読者からのお便り

本日、留学僧派遣育英会論文集並成寿特別号御恵贈下され拝受いたしました。両者共に充実した内容で読みごたえがあり、閑を見ては熟読頑味させて頂きます。留学生諸師の真摯な態度と信念が文章に漲っているのに感歎、此の経験を実動して多くの人を導いて頂ければありがたいと思います。

大乗は兎角小乗を軽く見たり疎かに扱ふ風習がありますが私は小乗を身につけそれを広く他に活用するのが大乗で、実行の伴はない教へや導きは遊びといはれても仕方がないのではないかと思っておりますので、留学僧がその気になって身につけた経験を生かして導いて下されば仏教は必ず実を結ぶと思うております。皆さまの努力に感謝申上げますと共に、之が基礎を造られた方々の一方ならぬ御苦辛と御努力に深く敬意を表します。

比叡山瑞応院楽紫庵　**山田　恵諦**

益々国際相互理解が切実な問題となる情況の中で、率先してその実績を挙げられている貴育英会の先見性と具体的実践に心から敬意を表して居りますが、此の度、その成果の一端とも言うべき貴会の論文集第一巻を完成なされ、早速にその続編「成寿・特別号」と共にご恵贈賜りましたこと篤く御礼申し上げます。

横浜市　**岡野　正貫**

貴育英会の『論文集』第一巻をご恵贈いただきまことに有難く存じます。今後、貴会のご発展と共に巻を重ねていくことは大慶至極に存じます。小生、一月には、仕事でまたスリランカに一週間出掛け、五月末にはマドラスへ行く予定でおります。この様に忙しくさせていただけるのも、みな、皆々様のおかげと存じ、ありがた度く思っております。

新座市　**森　祖道**

本日、航空便にて成寿特別号並びに数々の海外留学僧派遣に関します記事を贈り頂き拝受し、厚く心より御礼申し上げます。又、日本パクナム会会長にご就任され、誠にうれしく、お慶び申し上げます。さて小尼はメキシコ接心会より戻り、只今スタッフのメンバーが少なくなり、不肖の身、至りませんけれど前角老師様の食事や院寮関係のお手伝いをさせて頂いて居ります。この一月から冬安居の粥座の典座を頼まれ、そして合間を見つけて英語学校に通学し、充実した日々を送らせて頂いて居ります。お陰様で元気にて弁道して居ります。時の流れますのも早く、特に米国生活二年めは、より一層早く感じます。老師様のご活躍されています記事を拝読させて頂き、いつも

敬服し、老師様のパワーに策励させられています。老師様の蒔いた種が萌芽され、同じ留学僧のバチュールース浄信師が南仏に禅堂開単され、立派なことと存じます。老師様や善光寺檀徒方々の尊い慈愛を受けてしっかりと教化することを忘れないように肝に銘じました。二年めの米国生活をするご縁を頂いたお陰により、一年めは生活に慣れたところで終り、二年めにして人間的にも変わったように自分自身に思います。本当に有難き二年の米国生活を過ごさせて頂き、感謝して居ります。この海外留学制度は一人でも多くの方が、色々な場所で学べる機会を得られることを望みます。

ロスアンゼルス禅センター　**沖田　玉映**

「成寿」特別号と「善光寺海外留学僧派遣育英会」の成果である論文集をご恵贈戴き誠に有難うございました。これによってあなたが今仏教界においてなされているお仕事の中味がいかに大きなものであるかを知らされ、唯々感服措く能わずといったところです。LPレコードが出始めた頃のあの大高時代を懐かしみつつ、あの頃あなたの中に潜在していた才能が大きく花開きしことに満腔の喜びを感じています。

仏教界の一流の方々との多くの交流を通じ、今後ともあなたが目指しているグローバルな視野に立った仏教界での有為なる先達として益々のご活躍を心から祈念し、お礼といたします。

宇都宮市　**大嶋　正**

論文集と特別号の二冊を拝受致しました。七年間の孜々としてたゆみなき貴会の歩みが、このように大きな果実を結んだわけで、これまでの御苦労やいかばかりと拝察申し上げます。殊に論文集では海外に雄飛する若き仏教徒の真摯な目を通して素直な意見が開陳されており、啓発を受けました。これを機に着実に号数を重ねていかれるであろうことを心から念じつつ一筆お礼のみ申し上げます。

東京都　**池田　魯参**

過日は権来順生の為に善光寺育英資金を賜わる御通知を頂き只〻有難たく幾重にも御礼申上げます。又、二月八日の御案内と貴重な御本を御送り下され恐縮且つ感銘一入にて、山内一堂拝読させて頂きます。八日に御開山忌も営弁なされる由誠に有難たい勝縁、是非拝登し焼香させて頂きたく存じて居ります。御開山の頂相を拝し、拙僧、愚妻ともども感壊にしたって居ります。法の為に代々不惜身命の御生活に、ひとしく敬仰いたしております。今後共宜しく御教導賜りますよう懇願申上げます。

仙台市　**伊串　昇潁**

一昨日は突然寄せて頂きましたのにお忙しい中私如き者に大変なるお時間をお与え下さり恐縮至極に存じ、お礼の言葉がみつかりません。何十年も身近に御指導をお受けしていたような、そんな先生の心の広さと大きさに甘えて、尚厚かましく何やかやお願い申し上げてすみません。今の私の心境は、唯々ナリス化粧品にご縁頂き本当に良かった、何故なら五十有余生きて、初めて体験させて頂いた得も言われぬ感動と、未来のパワーを充分に満喫し得たからです。これもひとえに先代社長のお導きによるところと肝に銘じ、微力ながら販売活動も広げていく所存です。

岐阜県各務原市　**松原克子、西部幸代**

成寿一八号、有難うございました。方丈様には仏教興隆の為に御努力されている様子に心よりお喜び申し上げます。ビルマ最大の仏塔（シュエダゴン・パゴダ）の、カラー写真の素晴らしさには、大変感動しました。仏の慈悲を写真から体感できたようで、ビルマ仏教徒の祈りさえ感じられました。〝仏の姿に打ち込みて・仏師錦戸新観師に聞く〟では、矜羯羅・制　迦童子の内からにじみ出る錦戸新観師様のおもいは、いつまでも私の脳裏に焼きついてます。

横浜市　**吉川　文夫**

この度留学僧の論文集ご恵贈頂き、ありがとうございました。私は幼児教育を軸にして二十四年を経て、ようやく平和活動にも拡大、個と全体、人間のあるべき道、哲学と生活、思索と体験、理論と実際の究極的には帰一する聖なる生活に向上させる見方となって参りました。フレーベル著人間教育の難解さを法華経によって理解させて頂きました。ここに至るまでに試練の山をいくつか越えてまいりました。それはすべて私の糧となる試練でございました。父を母を理解する尊い学びでございました。又三人の息子達から人間の教育の本質的な学びであり自己教育でもありました。「私の宗教生活の基盤は、宗祖を通して釈尊に還る。いつも仏法の原点に立ち還って自らを見つめる、自らの道を護っていただいている、そうして生かされている命を、一滴残らず仏法のために人のために使い切って…」黒田先生のおことばに感謝申し上げます。

東京都　**泉田　佳子**

成寿第十八巻、ミャンマーに関する写真、記事など何回も見て懐しく喜んで居ります。戦争中六年間も居たので第二の故郷と言ったような国です。ミャンマーが民主化したらもう一度あの大陸に行って、自由に旅したいと思って居ります。

横浜市　**大場　貞蔵**

第九回海外留学僧募集について

目　的　大学卒業相当以上の学力を有し、仏教を修学する者のうち、学業操行ともに優秀にして心身堅固なものを海外に派遣し、仏教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る優秀な人材を育成することを目的とする。

派遣先　世界各地

派遣期間　一年間とするも場合により延長するも可

給　費　派遣先までの往復旅費及び滞在に要する必要経費を支給する

募集人員　2～3名

提出書類

(1) 論文　(2) 保証人と連署した願書

(3) 卒業証明書　(4) 履歴書

(5) 推薦書　(6) 健康診断書

提出レポート

●禅の国際化と私の役割　●二一世紀の仏教と私の役割

●タイの仏教に学びたいこと　●未来社会の仏教と私の役割

いずれか一題を選ぶこと、枚数はいずれも四〇〇字詰原稿用紙五～一〇枚

原稿〆切　平成四年十二月十日

善光寺海外留学僧派遣育英会事務局

BEYOND THE SORROW

I visited Cambodia this April. Recently this country, reported everyday by the press, has become the center of the world's attention.

Osamu Sibui, the priest of the Zenkoji Scholarship for studying abroad, has stayed and fought alone in Cambodia since two years ago.

In Cambodia, under the strict national isolation, the infamous Pol Pot supressed religious and cultural activities, massacred three million people. Shibui went to the scene and held a memorial service. Today, he gives Cambodian education of Japanese. Buddhism in Cambodia has been gradually revived in spite of destruction by the Pol Pot, so Shibui's activity will be important more and more. Also Japanese authority Ishizawa, as an adviser, sets about on restoration of the remains of Angkor in Cambodia. The Zenkoji Scholarship Foundation for Buddhist Study Abroad

want to do much for the ties of friendship between Japanese and Cambodian Buddhism as far as we can.

Next topics, my mother left this world this January. We feel very sorry when someone dies. This is because of not only the sorrow of forever parting, but also of the remorse for the deceased which we couldn't do best. This is exactly what I think.

When Rev. Mokuren gained supernatural power, he thought about his deceased parents before everything and decided to repay his mother for bringing up him. This is the origin of Urabon, and now I am filled with deep emotion about my mother's First-Bon.

St. Shinran said that he couldn't chant a Buddhist prayer for his parents even once. I also don't think to get the prayer for only myself, but for all the people. I will do my best for the world peace, though my ability is limited. I ask that you kindly support me.

編集後記

▼暑い夏もようやく終わり、皆様には愈々ご健勝のことと存じます。成寿第十九号をお送りいたします。

▼本号ではカンボジア特集いたしました。四月に佐藤俊明老師と善光寺黒田住職に写真家の樋口英夫氏が同行取材。本誌のグラビアは見事なアンコール遺跡の写真で飾っていただきました。佐藤老師、石澤氏の文章と共に鑑賞していただけましたら幸いです。長い年月内戦が続いていたカンボジアは、今、国連主導で和平へと歩み始めたとはいえ、まだまだ不安定な状態は続きそうです。一日も早く平和が訪れますように、ただ念じるばかりです。その中で渋井師の活躍は目を見張るものがありました。

▼善光寺海外派遣留学僧育英会の第八回育英生の入選論文を掲載しました。昨年十二月、第一回から第七回までの入選論文をまとめて『論文集Vol.1』を刊行したところ各界から大きな反響をいただきましたが、第八回生もまた、仏教に対するひたむきな心が誌面にあふれ、多くの人びとに感動を与えるものと思われます。

▼今後共、読者の皆様の力強いご支援をお願いいたしますと共に、関係者一同、期待と同時にその責任の重大さを痛感しているところです。

▼次号ではスリランカを特集する予定です。また、表紙絵及びカットを伊藤三喜庵先生にお願いしておりますが、次号で二十巻になるのを機に、創刊号から二十号までバックナンバーを揃えて掲載いたします。

▼九月三十日から十月二日までの予定で、大本山永平寺を拝登いたします。檀信徒の皆様には、この機会にぜひご参拝されますよう、ご案内いたします。

▼秋彼岸も間もなくです。ご先祖様の墓前にお参りし、心ゆたかに日々を過ごしたいものです。

成寿　第十九号
平成四年九月一日発行
発行所　成寿山善光寺
横浜市港南区日野町一六〇四
電話　〇四五（八四五）一三七一
印刷所　神奈川新聞社出版局

横浜善光寺